さりとは武勇の本意にあらず、然りといへども時節の命なれば是非なし、死去の後形をこのまゝ土中に築き込め、專太郎尋ね來らば、たとひ白骨となるとも二たび我を掘り出し、敵をうたせ給へと、たしかなる詞殘して終に空しくなりぬ。十藏遺言の通りその軀を取置きける。專太郎は諸國めぐり來て、沖津の札を見るより、出羽の羽黑に立越え、觀音院に名乘り入りしに、住僧はじめを語り給へば、專太郎おどろき、折角爰にくだりし效もなく、敵を手にかけざる事の殘念なり、されども十藏殿心底疑ふまじきは、淸見寺まで尋ね出られし所男なり、此上のねがひ、その死骸を見ずしては浮世に心の殘れり、それ見せ給へと申せば、法師おつ取り鍬して塚のしるしを掘りのけ、形を見せけるに、はや百日あまりも過ぎけれども、ありし姿のさのみ變らず、生ある人の眠れる如くなり。走り寄つて聲をかけ、榎坂專左衞門が悴專太郎なるが、親の敵の軀なれば擊つといへば、十藏死骸眼をひらき、笑ひ顏して首さしのばす、この心通を見て尙いさぎよく、差したる刀脇指を見れば、刃引にして目釘竹を外しおき、專太郎に手むかひせず討たるゝ覺悟の心入れ、ためしなき男なり。この後恨みはなしと舊のごとくに埋みて、その跡念比に弔ひ、今は世界に望なしと卽座に髻切つて、觀音院を師と賴み、出家堅固に勤めける。

刃引―刃を磨りおとすこと

をしや盛りを待つ花の帽子、身は墨染の櫻ちる世がたり。

第二　誰か捨子の仕合

心の海を横わたしに、むかし島原の舟つきに辻岡角彌とて浦の吟味役人してありしが、御奉公疎略して明暮奢りを極め、京より美女を取りよせ、其上他國よりの緣組をかたく御法度を背き、泉州堺の手前よろしき町人の娘を呼びむかへ、樣々我がまゝ重なりしを、家老中ひそかに數度意見加へられしに、一圓承引いたさず、女を幾人か手打にせし事、其外十二ヶ條の惡事橫目役より言上申せば、御僉儀極まり、柏崎茂右衞門、矢切團平、此二人に仰付けさせられ、角彌討つべき御科の御書付下し給はり、兩人上意承けて角彌濱屋敷に案內なしに入て、仰せ渡さるゝ段々聞き給へと、茂右衞門書付讀み仕舞へど、團平おくれて不首尾の時、茂右衞門ぬき打ちに子細なく角彌を止めまで刺して立ちのく時、團平言葉あらく、最前申合せて鬮を取り、其方は箇條書を讀む役、此方打つ役に極めしに、無用の出來立、八幡堪忍ならずと顏色かへて詰めかくる。茂右衞門すこしも騷がず、此義二人承れば、いづれか前後の論に及ばず、これ兩人の働きなり、角彌首尾よく討ち

手前よろしき―身代よき

一圓―一切

取るこそ仕合せなれ、御前の御機嫌なるべし、急ぎ給へと、首羽織につゝみて立ちのく所を、うしろより茂右衛門を切付けしに、卑怯者とぬき合せ、團平に撃ちかける太刀先下りて終に撃たれにける。死骸角彌が働きのやうに取り直し、立ちのく所へ、徒士横目千本勝五左衛門駈著けしに、我が手がらのやうに次第をかたりけるに、物に馴れざる男にて、死人撿めもせずして團平口上の通りを、我見たやうに申上ぐれば、團平一人の働きになり、即座に百石の御加增下され、武士の面目、世の所聞、彼是よろしく家榮えける。茂右衛門妻は知らぬ事とて最期を悲み、日比は人におくれ給はぬ御所存なりしが、武運つきぬれば是非もなき世の中に、殘りて住むもよしなしと、二十一にて髪をおろし、山居の身なり夫のための香花、今は心もひらけて出家堅固に勤めけるにも、明暮夫の事のみ忘れがたし。茂右衛門一子もなければ其家絶えて、諸道具は其兄茂左衛門方に取りのけ、後家比丘尼にはこれより給養を遣しける。定めなきは世の態、つらきは人の心ざし、團平その後は世間のよきまゝに何時ともなく奢りて、人皆これを憎みし。殊更家來に情をかけず、ひとりぐ〳〵恨み申すぞ因果なり。或時若黨の九市郎と申す者紙細工いひ付けられ、枕屏風を張り立てけるに、仕立惡しきとて、さん〴〵無調法と言葉あらけな

卑怯者―原本比興者とあり

山居の身なり―身となりの誤か

く蹴立てられしを、主人ながら氣色つねに變れば、長屋に追込みおかれて憂きめに遭ひける。おの〳〵詫言すれども聞入れ給はず、近々に成敗極れり。同じ屋敷に召しつかはれて腰元の久米といふ女、いつの日か九市郎といひかはして、二世のかたらひなして末末一つの願ひ、年の明け行く事を待つうちに、この難義かなしく、雨の夜人しづまりて後、九市郎追ひ籠められし長屋の窓に立ち忍び、たがひの憂きを語りつくし、わが命をとらるゝ程の事にはあらず、さりとは酷き仕方なり、この怨念外へは行くまじ、そなたもかく成り行く身の程さぞ不便に思はるべし、何事も主命なれば是非もなし。されども身にあやまりなくて死する事、後の世までの迷ひなり、旦那に此恨をなして此家失ふことこそあれ。日外の上意討、柏崎茂右衛門殿手に掛けて角彌殿を討たれしに、主人おくれて首尾あしき故に、茂右衛門殿を角彌撃たれし所を切り伏せたるやうに、御前へ披露申されしが、實は茂右衛門殿を旦那だまし討ちにして、世には手柄觸れける。これ畜生なれば、此事茂右衛門殿兄茂左衛門殿に告げ知らせて、主人團平をないものにせば、われ相果てても思ひは殘らじと涙をこぼす。とやかく歎く内に、夜も明けわたれば別れの後、九市郎を引き出し、慮外者の斷り立つて手打になりける。腰元の久米は屋敷をぬけ

一つの願―一所になるべき願

出、茂左衛門殿に駈込み、此段々語り、舌喰ひ切り、夢よりはかなく消えける。此事一家中の沙汰となり。おのづから天命のがるゝ所なく、團平非道あらはれかゝれば、たまり兼てその夜屋敷を立ちのき、いよ〳〵惡人に極まれば、其時の横目役千本勝五左衛門義不念に極まり、切腹是非もなき仕合なり。其後茂左衛門家老中まで御訴訟申すは、茂右衛門事弟ながら、これは各別の義なれば、敵討ちたき願ひ申上れども、世の御仕置立たねば、子方の者詮議して討たせとの仰せ出されなり。茂左衛門にも娘ばかりにて男子を持たねば、さしあたつて分別及ばず、御暇申し請けて、浪人の身となりて諸國を尋ねめぐり、二年過ぎての秋の比、江州志賀、唐崎、この兩里に在るよし聞き出して、逢坂山を立越えて關寺の邊にして、いまだ誕生日を過ぎまじき捨子を拾ひて、名を茂吉と改め、乳姥に抱かせ、大津の屋形に行て、此悴親の敵打の御帳にしるし、それより在家を慥に見出して、八月十四日時節を待宵の月見、所の人を誘ひ、團平濱邊に出でしを、名乘りかけて討ち濟まし、姥抱きながら茂吉にとどめをさゝせ、天晴はたらき殘る所なし。團平が首うつは物に入れさせ、本國に歸りざまに、茂吉に金子十兩付けて藪の下の萱菅切りの許へ養子にとらせ、茂左衛門は肥前ノ國に歸り、團平討取り、上方の首尾、所の御奉

不念―不注意

先知―從前の知行高

行よりの添狀さしあぐれば、殿の御機嫌よろしく、先知に二百石の御加增くだし給はり、母衣大將に御役替までなし下され、武勇此時國中に其名をあげける。茂吉事筋目はいかなる者なりとも、茂左衛門が才覺にて一たび茂右衛門が一子に仕立てければ、急ぎ呼び下し、茂右衛門名跡を相違なく繼がせ申せとの御意有難く、大津に人をつかはし、茂吉を呼び寄せ、九月九日の御禮日に御目見えすまし、家の悅びをかさね菊醉をすゝめて千秋樂を諷ひ、柏崎の名を祝ひけるとぞ。

第三　無分別は見越の木登

肥後のむかしの國の守なる御城構への外、新造作の門櫓、長屋作り美々しく立ちならびたるは、どなたの御屋敷と尋ねければ、これは彼の出頭に暇なき大壁源五左衛門といふ新參者、僅二十五石より三年の中に二千石とりあげたる者の拜領の地なり。今時は武道は知らいでも十露盤を置きならひ、始末の二字を名乘れば、何處でも知行の種となりて、始末云々―儉約の意にて財政整理を言立にす

譜代の筋目正しき者は必ず先知を減少せらる。世は色々にかはりて、今より末々は、諸侍たる者刀の代に秤を腰にして、商賣はやるべしと沙汰する時、源五左衛門が一子小八

ること

折目高―禮儀作法嚴重なること

奥の間取り放し―障子襖を明け放つこと

古座―古參ないがしろ―輕蔑

車に拂ひ云

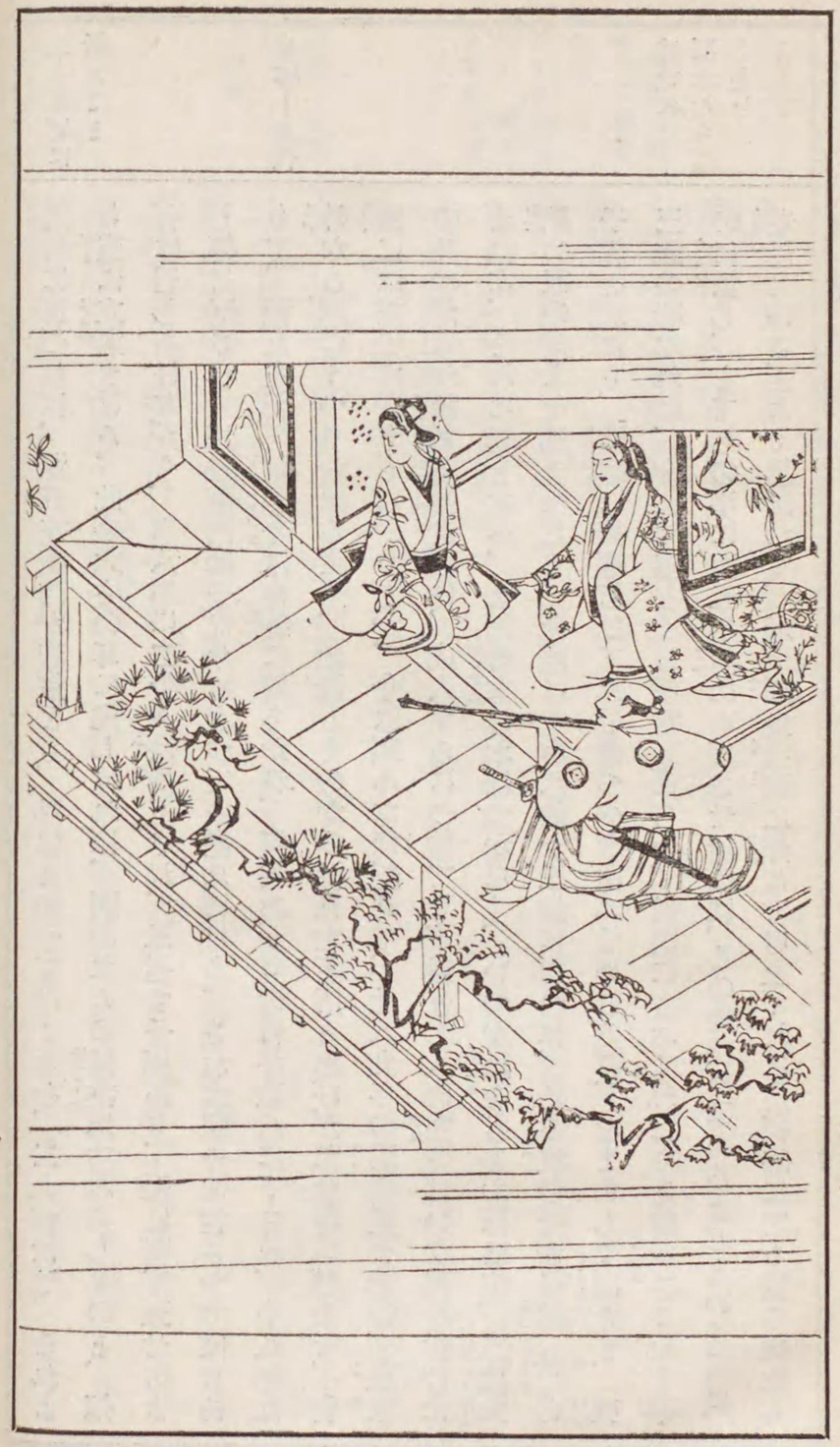
郎三歳になりしが、折ふし五月の半、築山に楓の大木ありて、其梢に若葉千入なるを、童心に急に欲しきとむつかりけるに、中間を木にのぼらせ、其枝、此枝折れと差圖するに、隣屋敷は安森戸左衞門とて家久しき侍、萬に折目高なる生れ付きながら、今日は非番の暇にて、奥の間取り放して、内儀と只二人しめやかに物がたりし、勤の苦勞もこの樂みあればこそ。何心なく假枕するを、彼の木にのぼりたる男遙にこれを眺め、夫婦さうなが心地よく遊ばるゝよと、望みの梢をば切らずして見まはすうち、戸左衞門見付けて、あれは源五左衞門屋敷なるが、無作法千萬なる木のぼり、近所の内證まで見おろすに、斷りの使は來るかといへば、いや何とも申し來らずといふ。其身常々殿の權威をかりて、古座の諸士をないがしろにするさへ憎しと思ふに、このことわり無きはいよ〳〵踏み付けたる仕方と、木より半分程下りかゝる所を、鐵砲二つ玉こめて、狙ひすましてて撃てば正中、氣も魂もぬけて落ちける。これに驚き、源五左衞門にかくといへば、勿論此方より一應ことわりなきは不念といひながら、あまりなる仕こなし堪忍ならずと、戸左衞門かたへ行きて、事譯二言といはぬさきに拔き合せて打つ太刀、源五左衞門か長刀鴨居に切付け、引きかぬるを車に拂ひたふし、止めまで刺して、今退くと奥にしらせて、

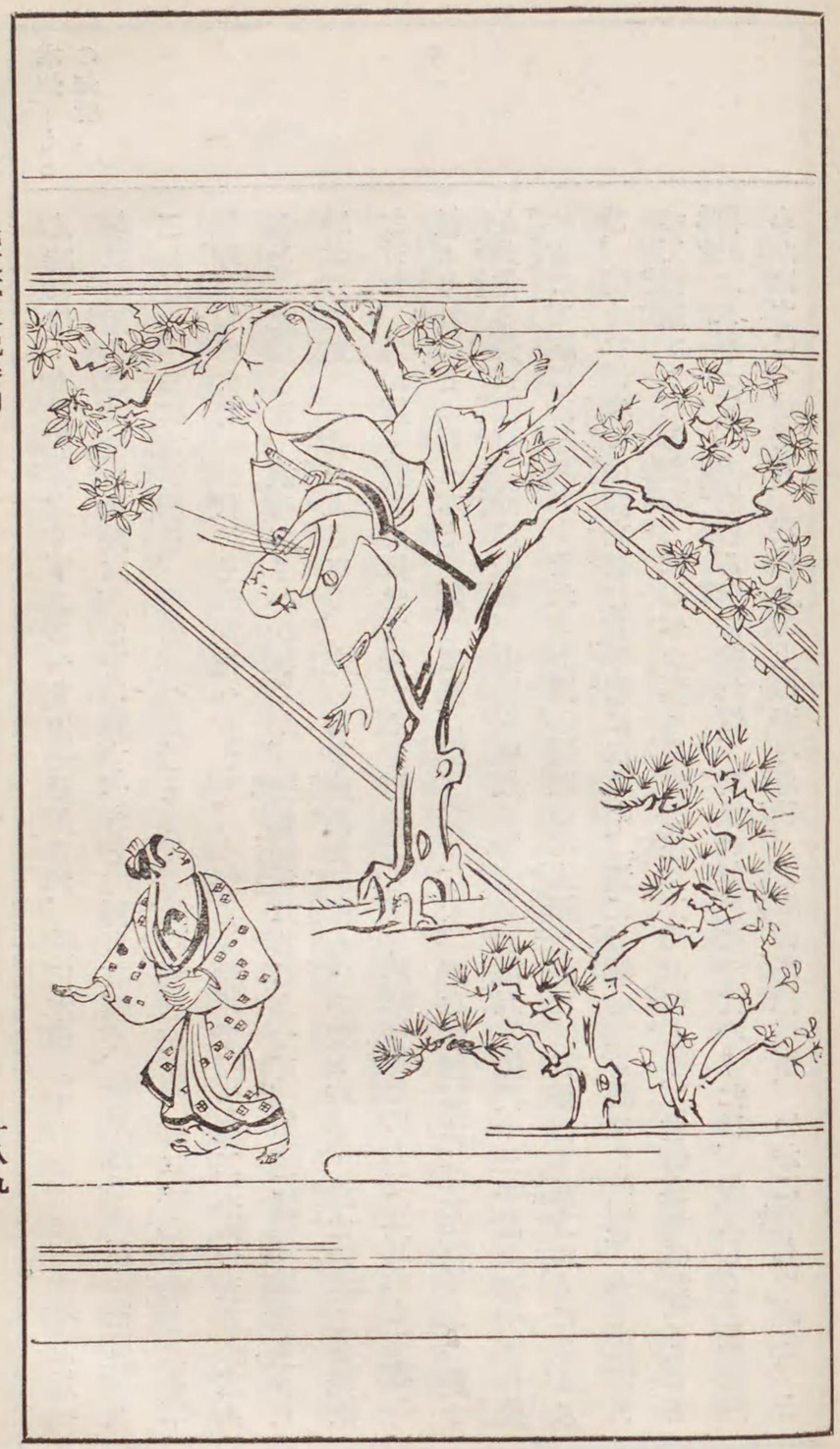
云―車切に斬ること

身躰―身代

時なれば―原本ならばとあり

門外に出づれば、源五左衞門が若黨ども、扨はと切つてかゝるを、二人切伏せ、それより直に立退きける。此事大守の耳に達しければ、國のために拔群忠功ありしものと、知行は召しあげながら、小八郎に二十人扶持下され、思召す子細あり、母に養育致せのよし仰せ下され、戸左衞門は子なきによつて家絶えにけり。されば家々の世ざかり限りありて、源五左衞門屋敷今は身躰に持ちかね、御物あがりの岩井惣八に下され、小八郎は外なる廓にうつりかはる世や。此母もそのかみ源五左衞門と忍びがたきを忍び出で、當國には露のゆかりもなかりしが、今は賴みなほ絶えて、此八九年の間の憂き思ひ、後家の身ながら幼稚者を撫育あげ、成人するにつけても、過ぎし人の在さばいか程か悦びたまはん、それに引きかへ、まだ行末のおぼつかなく、いつか敵を打ちおほせて、二度大壁の家の榮えを見まほしく、今ははや小八郎十五歳になれば、ある夜ひそかに始終の子細をかたり、殿樣に御暇乞ひて思ひ立つべき由ふくめけるに、おとなしく頷きて、我三歳の時なれば、今まで空しく日を送りたるを、世間にもおくれたりと後指さゝれし事の口惜し、とてもの事に四五年前にも知させ給はば、この御恨みはあるまじといふにぞ、老母もいさぎよく思はれて、老中瀨良内藏之介まで申上ぐれば、何時にても討ち得たら





本知―もとの知行

ん時には、本知相違なく下さるべき由仰せ出され、殊に本望達するまでは、路金入用次第に御用人の其役増見勘六方まで申越すべきとの御事有難く、首尾残る所なく宿に歸り、二月十四日に首途祝ひ、母の心づかひとして、先年源五左衞門撃たれし時供したる草履取、自然の時の目代にその儘抱へ置きて、くれ〴〵頼みて、主從二人同十五日に立出るを、見送るまで涙をおさへかねしが、親他國者たるによつて、當所に縁類兄弟とても、助太刀後見する者一人もなく、定めなき旅路を幼稚ものの獨り行く、武士の道こそ覺束なけれ。目出度く討ちおほせて母が心を慰めよとて、此詞を暇乞にして立別れぬる哀れ、袖より外にとふ者もなし。願ひは鶴ヶ崎の八幡に祈り、思ひは鐘ヶ淵に沈む心地して、憂きを戸渡る舟に漂ひ、陸に佇み、山陽四國殘らず巡り、源五左衞門十三年忌をはや美作誕生寺にて竊に志を施し、それより津の國難波の大湊を尋ね、五畿内を彼方此方にさまよひ、明くれば春日山霞立初むる今朝になりぬ。遙に故郷の空を眺めやれば、山上に山あつて幾重かさなる旅衣、歸るべき程も白雲の往く方のみ懐しく、世の哀れは我ひとりと御社ふし拜みて、人泊むる宿に歸れば、門松の氣色に千代をうたひ、幾久しくと屠蘇酌みかはすにつけても、我が身の上の春を思ひ、古郷の老母の事、いかに在しけんと、これも氣にかゝり、彼も胸にせまりながら、旅のかりねの初夢うつゝにもあらず。老母はるばるの國里たづね來り給ひて、此年月の久しき事を指を折れば一年わづかに餘る袖の涙は西の海、浪の立居にもそなたの行くするのみ胸にせまりて懐しく、此思ならば、諸共に連れ立ちて本望を達せん物を、甲斐なく跡に殘りて今のうさつらさ、草の露とも消ゆべき命なれども、せめて一たびの音信を聞きたく、十三年の弔ひまでは待ちしが、それにも音信の傳なく、淨雲寺の同じ苔の下にもとは思ひ極めながら、一日〳〵と暮らして、告げわたる鳥と同じく鳴き明かし、今は姿をかへて彼の人の後世いよ〳〵祈るばかりなり。只とにかく焦れ死なぬうちに、今一たび覺めての對面を願ふ心を力にする命も知れず、うらめしき浮世の中のならひと、しほ〳〵と枕に佇み給ふと思へば、曉の鐘に俤消えて寢覺悲しく、召しつれし小者を引起して夢の物がたり、聞かぬ先より涙を流し私の顯然と見しもこれにたがふ事なし、御袋樣の御歎き御尤に存ずるにつけても、運のつよき敵の行くへと互に男泣。いか程思へばとて、このまゝにて國本へは歸り難し、これより東海道にかゝるべしといへば僕すゝめて、見かけたる敵にはあらず、一先づ忍びて御歸りあり、御袋樣に御對面なされ、其上にて又何方へなりとも御出然るべしといふ

にぞ、一つには孝の道筋、豐後まで行けば、知邊の本賀猶右衞門方からなりとも云ひつかはし、本望は遂げざれども、我々息災の樣子ばかりなりとも知らすべしと、それより引きかへして又西國におもむき、小倉より徒歩行く道の側なる休茶屋に、老母疲れたる躰にて腰掛に息らひ給ふに驚き、これはいかなる事と、さきだつて敵の在家今に知れざれども、かやう〳〵の夢見より、まづ御目にかゝらんと存じ、僕の宅平に勸められ、かひなき歸國ながらといへば、老母も國元に中々在るにもあらずして、尋ね出たる越方のうき思ひをかたり、諸共に本意遂ぐべき願ひ、然らば又北陸道へ心ざし、主從三人になりて行く程に、今は江州に立ちたる鏡山の里に著きぬ。爰にて思ひ出せば、親源五左衞門殿生國は、この國打原とやらいふ里より幼稚て城下に出で勤め給ひしに、十六歳にて爰をも立ち退き給ふと、長き夜のつれ〴〵に語られしが耳にとまりぬ。もし大壁のゆかりあらば訪ひて見まくほしきと打越え、ひそかに聞けば、澤山にかろき奉公人に大壁六平といへる男ありと傳へ聞きて、それに尋ねあひ、源五左衞門何十年以前當國去つての後、今までの首尾かたらるれば、六平横手を打て、それはわが爲めには現在の兄なり、此上は敵の在家根を掘つて葉を斷つべしと、これも御暇申して打ちつれて行くに、美濃ノ國關原

あるにもあらず―あるにもあられずの誤か

然らば又―然らばとて又とありたし

是非なく―無二無三に

名をば埋まぬ―和泉式部「諸共に苔の下には朽ちずして埋もれぬ名をみるぞ悲しき」白氏

にて俄に時雨して、晴間を待つうちに隙どり、日を暮らし難義なる所へ、追剝數十人むらがり來りて、四人を中に取りこめて、是非なく切り結びけるに、身は長旅に疲れたるに足場惡しく、されども小八郎が手にまはる程の者薙倒し、追散らし、立ち歸りて見てあれば、六平、宅平、老母はや切り伏せられ給ひたると見えて、念佛かすかにして息絶えければ、南無三寶と空しき骸に取付て、呼べど歸らぬ玉の緒の、扨も是非なき次第、賴み切りたる者どもも、今は野末の薄より外にとはず、思ひもよらぬ事にひとり殘り給ひし母まで刃に懸け、年來の敵は討たずして、いやましに憂目をかさぬる事、是程侍冥加にも盡きぬるものか、よし〳〵是迄と、すでに自害と見えしが、又心を取りなほし、兩親の中の敵、せめて一人を孝養にせざる事腑甲斐なしと、我と宥めし心の中、生ける心はなしに、三人のなき骸片里の庵に賴みて埋み、名をば埋まぬ武士のかひ〴〵しく、其所を無念ながら立退き、同じ國の府に著きて、しばしは爰に留まり、世のありさまを窺はんため、さま〴〵手だてを以て、其府の旗大將白峰村右衞門といふ男に半季さだめの僕となりて、ある時村右衞門が若黨と共に長屋住居の木枕をならべ、四方山の雜談のついでに、御手前の生國はいづくと尋ねける。詞を聞けばまさし我國の者なり。何と返事すべ

文集「龍門原土上埋レ骨　不レ埋レ名」
まさし―まさしくの誤か
由縁も知らず―由縁かも知れずの意
せゝわらひ―せゝらわらひの誤か

しと工夫めぐらし、若又その由縁も知らずと思ひ、わざと肥後の者と答ゆれば、此男は戸左衛門國より召しつれたる一人の草履取あがりなれば、同國なる事を聞きとがめ、どなたの御屋敷に居られたといひしに、安森戸左衛門に奉公したりといふを聞きて、彼の男扨は安堵したり、よい加減に嘘つく者と思ひすまし、まづ敵の末にてもなし、されども旦那の名を聞き覺えて、今は家の絶えたる事をしらず、嘘つくが憎しと思ひ、それは其方の覺え違ひなるべし、その戸左衛門殿は十四五年以前に肥後を立ち退かれ、跡は餘の侍衆の御座る筈なり、こちがよく覺えて居るに大きな嘘つきと冷笑ひけるに、これは面白き事をいふと覺えて、何と人をいつはり者とは迷惑いたす、して其戸左衛門殿實正國には御座らぬ證據ありや。其證據なくては我いつはり者になりて一分立たず、堪忍ならずと、寢てゐたるを起きかへり、脇指取廻せば、此男臆病者にて、いかにも證據をいだすべし、さりながら誓文立てたまはねば言はぬ事といふに、成程立つべしといへば、その戸左衛門殿はすなはち今の旦那なりしが、隣の源五左衛門殿を討つて退かれし時、我ひとり供して丁度今年で十五年國へ戻らぬ、これが證據ぢや、も堪忍したまへといふを聞て、これ天のあたへ、優曇華の開くを待ち得たる心地して、今は駈込みて討つべき、忍びてや討たんと、樣々分別しきりなるを色につゝみ、其夜の明くるを待ちかねて、朝日に我が古里の氏神を拜み奉り、この度本望を遂げさせ給へと祈りける所に、村右衛門登城の支度して出るを、源五左衛門が一子小八郎と名乘りかけると、村右衛門うけとめけれども、念力に撃つ太刀、即座に討ちおほせ、今は是迄と嬉涙をこぼす處に、村右衛門若黨六七人拔き連れて、互に手は負ひながら戰ふ音におどろき、近所に大目付役の稲村與助駈著けしに、はや最前村右衛門樣子をかたりし者も切伏せられ、過半疵を蒙り、立ちしろぐ所を、これはいかなる子細と問ふに、一樣に口をそろへ、主を殺す惡人といふに、小八郎は親の敵なりと、詞だたかひにも鳴は鎭まらざりけるを、與助しばしと兩方へ引分けて樣子を聞けば、敵にまがひなしと段々咄しければ、其比の大守小久島民部殿に申上げしに、然らば彼者の國へ使者を立つべし、それより中は小八郎を與助に御預けにて、谷見森右衛門使者に仰付けられ、筑紫に下りぬ。知れぬは人間の命、源五左衛門に不便加へられし殿は、過ぎし九月十九日に日腫といふ病にて逝去なされ、いまだ百ヶ日も立たぬ所へ、大壁小八郎事段々書付を以て奉行所まで申來るよし、家老瀬良内藏之介へ伺ふに及ばず、御代替りて、大壁の家は今まで立ても潰すべき旨、内々若

殿の御内意なれば、たとひ贔屓に存ずる者ありても取りあげる者一人もなし、殊に源五左衞門出頭するに任せて前後に眼見えず、權威己がまゝにふるまひしに付て、意趣ふくむの輩使者に立向ひて、當家の扶持人にあらずといひて、大儀ともいふ禮儀さへ言ふにおよばず歸しければ、使者美濃に立歸り、此段委細に申せば、敵といふ證據なきによつて主を殺す科にさだまり、哀れや年來の憂き難義、母までに後れながら、本望は遂げたれども、賤しき者の手にかゝりて果てしを、語り傳へてあはれなり。

松坂越えて—伊勢踊の文句を用ふ古文眞寶に云々—まじめ顏なるをいふ

淺間山—伊勢の淺熊山(アサマ)を信濃のそれにかけてい

第四　踊の中の似せ姿

松坂越えて伊勢ノ國、日和打ちつゞき、隈なき月に終夜の大踊餘念なく眺めし時、常は古文眞寶にかまへし男も、釣髭に樣は變へながらそれと知られてをかし。そこの御内儀も浮かされ、鄰の娌子に借り衣裝、振袖に品つけて昔にかへる化粧から、娘はことさら振よし、品よしと褒めらるゝを嬉しがる心は淺間山、胸は煙の種。かゝりし程に東横町より無紋の挑灯數見えて、眞先に金の烏帽子をかぶりたる男唐團をかたげ、あとは同じ紫の絹縮に紅裏、廣袖にして、筋天鵞絨のはやり結び、ばつぱの大小一樣に六人深編笠

ふばつば—鮫鞘

の目に立ちて、外の扮装は消壓されぬ。彼の金の烏帽子殿音頭とりはじむるより、おもしろやと太神も御影向、末社のぞめき爰なりと、月の入方もなげかしき時、此踊俄にくづれて以ての外の騒動、これは何事ぞと思ふうちに、はや南北の門をしめて、此町内へ入り給ふ人子細ありて腰の物をあらためまするとて、所の宿老たる者床几に腰をかけ、おのおの名を聞けば、私は魚屋町の五郎右衛門倅、私は柳町の誰彼と、脇指さし出して一人一人通り、扨かの六人組の風流男呼び出せども出かねて編笠も脱がず。樣子はしらねど異しく尤めらるゝ者は彼等ならんと沙汰して、無理に引出せば、男にはあらず、いづれも色ある女の姿、扮したり、作りたりと、騒々しき中にもをかしく、おもはゆげなる色なして差俯ぶきて物いはず。よし〳〵女のなす業にあらず、今はこれまでなりと、若き男をよび出し、是程にいたしても何れを疑ふべきものなし。まづは切られ損、されども自とあらはるゝ事もあるものなり、御本社の見通し、其時を待ち給へと、皆々戻り足に見れば、西側の軒の下に斬倒されし男、是故の穿鑿ならんと思ひ合せける。この討れし男は、當國夷町の邊に烏羽田勘助とて、かくれなき銀かしの浪人、弟助八と一所に來りて、少しの間の事なり。其後色々手段をもつて此敵を尋ぬるに知れざりけり。爰に勝

御本社の見通し—大神の照覽誤らず罪人の知るゝべければ

月も日もあけず—此女ならでな夜もあけぬ如く

われを—汝を

くすべられ—悋氣がましく責めかけられ

浦孫之丞とて手跡の名高く、同所の町はづれに鄰國の大名より小扶持を下し置かれしに、いまだ定まる妻女なく、獨寢覺のさびしきに、この夏より妾を尋ねけるに、二皮目なれば唇あつく、姿すらりとすれば鼻低く、漸と裏町に年比まで思ふまゝなるがありて、これを寵愛して、吉野を目前にながめ、更科の月も日もあけず可愛がられけるに、其明けの年の春より、行先はしらねど毎夜宿には寢ずして、淋しき留主ばかり、女の身にして迷惑、恐しくて夢もむすばず。さても人の心は是程にもかはるものか、去年までは一生もはや女房は持つまじ、城下へ出て知行にもなる時は、われを本妻になほしてと、うれしき言葉のかず〳〵も仇になり、增す花に思ひかへられ、おもしろき事もなしと、或時孫之丞に段々口說げば、氣色かはり立腹して散々に打擲し、おのれ思ふ子細なくば打殺しても慊ずと、無興しながら又立出でけるに、此女心の淺く、瞋恚に身を焦し、所詮この意趣いか程いひて我が力におよばず、一大事を白狀して腹たちをやめんと思ひはめ、孫之丞留主にひそかに立出て、勘助弟勘八の所に行きて忍びて呼び出し、私は勝浦孫之丞と申すものに召しつかはれの女にて、寵愛ふかく思はれしを、常々惡氣まはされ、本町の小兵衛といふ小間物賣と密通したるとくすべられしに、私何心もなく七月

十六日より養父入に親里へ歸りし時、近所のをさな友だちに催され、男裝束の物好して大橋町にて踊ると聞かれたる由にて、道なき事もありやと、跡から尾けてまはされし時、勘介樣の御姿、小兵衛が風俗に似たるを見そこなひて、闇打にして足ばやに退かれし跡にて、穿鑿ありしかども知れざるを幸ひに、忍ぶ躰もせず暮らさるゝ其上、私の主ながら非道數々ゆゑ、注進のため申し參りぬ。今晩御忍びあつて打ち給へ寢間の樣子はかやう〳〵と委しく敎ゆれば、勘八横手を打つて、扨々過分至極、まづこれはと金子拾兩取出し、討ちおほせての上は又御禮申さんと喜びて歸し、その夜の夜半に忍び入れば、折ふし孫之丞留主にて、彼の女ひとり燈火ほのかに光りながら、淋しきあまりに夜著引被き、高鼾して前後しらず臥しゐたるを、勘八孫之丞と心得て、はしりかゝりて胴切にして、今は本望とげたりと首を見れば、これは仕損じたりと驚く處に、孫之丞歸るを敵はそれかと段々述ぶれば、今は逭れぬ所とわたりあひて、これをも首尾よく討ちおほせ、始終奉行所へ斷り申上げければ、敵なれば勘八は別義なし、彼の女は主の訴人の科人なれば、獄門にかけて恥をさらされける。

武道傳來記

卷五

諸國敵討

目錄

第一　枕に殘る藥違ひ
　法師むかしに歸る月代の事
第二　吟味は奥島の袴
　意氣地を書置に知る事
第三　不斷に心懸の早馬
　なげきの中に島臺出す事
第四　火燵も歩行く四足

鉢敲は我が國聲の事

家の風―家風の義拾遺集に「久方の月の桂も折るばかり家の風をも吹かせてしがな」

いつの比より―いつの頃よりかの意

さゝけて―口中の荒れること

第一　枕に殘る藥違ひ

後柏原院大永の比、大和の武家がたより、都の高家の御かたへ御息女を送らせ給ひけるに、御年十五の春を過ぎて秋をかさね、月に明かし、花に暮らし、その家の風なれば歌道一入に心をよせ、琵琶、琴の翫び酒嬉の種となりて、枕二つの俤次第に羸れさせ給ひ、久しく御冠も召し給はず、御髪自らに亂れて、殿振ありしに變り、色みる梢も落葉して、風は無常の早使、衰眼眠る山の土とはならせられての歎き、各にまさりてこの姫君の御理せめて、永離の御愁歎外より見る目もいたまし。世にある習なれば是非なく歸らせ給ふに、故郷は錦の紅葉しほれて龍田の山も雪に見ながら、白無垢の袖に袂に御目の時雨かゝる憂き身ぞと、御心もみだれて黑髪のおくれ先立ち給ひし御人の爲なれば、出家姿となりて、南都の法華寺に入つて佛の道心ざし給ひしうちに、いつの比より心地なやませ給ひ、美しき御形のあをざめて、胸痛ませ、口中さゝけて、夜をねさせ給はねば、日々に頼み尠く、これを大殿樣御歎き深かりき。諸家中神を祈り、此たびの助命を願ひ奉りぬ。御手前醫者樣々にし奉りし驗もなく、都の名醫の内談せし時、出頭家

御手前醫者―抱へ醫者
種方付―處方書
もてはやし―原文饗應の字を宛てたり

老坪岡藏人、町醫者原川玄芳を同道して罷り出で、遠慮なく御病室に入り、御脈を候はせて其後廣間に坐して、御姫樣御病躰、玄芳見立に至極の所あり、彼に種方付いたさせ、いづれも吟味の上御藥調合さすべしと、日比目掛振を爰に出し、耆婆扁鵲が再來の如く稱贊しければ、時の權威に恐れ、皆々御尤貌に詞をかへす人も無かりし時、愚暗の玄芳硯を鳴らして、

筆談云。脈來數大。此陰虛火動之症也。按古之賢聖指火而爲諸疾之原。所以然者。火妄動則燎物。疾之象也。人能修道而淸順則病何由生哉。夫若人鮮世。接物觸事之間。情欲之火無時而不起。起則得疾。其指火而諸疾之爲原。豈不宜乎。經曰。一水不勝二火。一水者腎也。二火者君火相火也。五行各一其性。惟火有二而已。陽常有餘。陰常不足之理昭晰也。然者參芪甘溫藥所深禁也。速非投於滋陰降火之劑難救命矣。如緩治則噬臍有何益乎。

爰に國家老森尾兵庫御姫樣の御病中を悲しみ、晝夜老足を運び、夫婦共に相詰めしが、京よりの浪人醫者横川周益を伴ひ出で、これも御脈の後書付差上げける。これぞ醫道のまじはり、たがひに意魂をみがきて、時に、

再談云。愚按診脈無定體。或小。或緩。或沉。或數。變動不常。夫脈不常血氣虛也。譬之虛僞人。朝更夕改無定體。且數大之脈來全不常。故非火動之症。唯考脈症屬虛。而氣虛爲重也。此金極似火之病。非芪甚甘溫輩難治。曰陽生陰長之格言。今此時也。何可畏於不偏不倚中和之君藥哉。蓋痰中帶血者。由脾傷不能裹血也。舌生白胎者胃中有寒。丹田有熱也。夜不寐者。由子盜母氣心虛而神不安也。胸痛噯氣者。氣虛不能健運。故鬱於中而噯氣。或滯於上則爲胸痛。以上之諸症無疑虛也。故以補氣藥爲主。加用安心滋補消食之劑。則諸症自退矣。且不知亢則害承迺制之旨。誤爲陰虛火動。而用寒涼降火之藥。則聲啞喉痛五瑞下泄之變症增劇。扁術亦可難起乎。

玄芳周益兩人の配劑、御手前の醫者中間にして詳に吟味を遂ぐるに、周益種方付一々

取持ちて理に徹し、いづれも是に同心なれども、坪岡藏人身に替ぬれば、誰か詮義のしてもなく、立芳藥に極り、二三日上げ奉りしに、是より以ての外に御顏色變らせ給ひ日毎に羸れさせられ、周益見立に一つも違はず七日過ぎての曙に死去あそばされ、上より末々の歎き止む事なし。御死骸は御遺言に任せ、當麻寺に送りて松の煙となして、年比召しつかはれ女郎中御恩の程忘れず、十七人立ちならび下髮惜しからず切捨て、皆墨染の袖に替り、飛鳥川の水を手向け、夏花に籠山の梢をもとめ、世になき姫君の跡弔ひ參らせ、常念佛に暮らしぬ。定め難きは人の身の上世間の口やかましく、此度立芳藥違ひにて賴みある御命失ひけると、誰いふともなく、此沙汰募つて、程なく御耳に立ち、原川立芳所を拂ふべき由仰出させられ、俄に妻子召しつれ、河州國分の里に立退きける。藏人これを腹立して、仕置者にさし向ひ、此所に醫師の住宅御法度ならば横川周益も追立て給へと、御意をも承けず我が家來を遣はし、無躰に家内を仕舞はせける。周益御無理とは存じながら、殿樣よりの仰せは背きがたく、これも同國三輪の里に立退き、不自由住ひの草葺に其身を隱しぬ。此事森尾兵庫聞き付け、その里に人を遣はし、周益を信貴に呼び歸し、急度吟味にかゝり給へば、藏人惡事露はれ、是非をかまはず兵庫を待ち

仕置者―刑の執行者

伏せ、面を合せ打つてかゝる。老人なれども烈しき左の肩に初太刀請けながら、拔打に藏人切伏せ、とどめ刺しかゝる處へ弟坪岡虎七駈著け、後より下人を拂ひ、管鎧をさしのべ、脇腹をつらぬき、又突きかゝるを兵庫入首より二尺ばかり切落し、飛びかゝる心はあれども深手によわり、持ちたる刀を投げ付け給へば、虎七が肩を越えて、若黨が太股に立ちて卽座に命を果たしぬ。これを見て兵庫打笑ひ、脇指拔きて腹かき破りけるまで虎七怯れて、漸うに首打つて、此場より直に立退き、豐樂寺の末寺榎葉井坊に忍びぬ。兵庫屋形には驚き、家久しき中野武太夫其所に駈行き、退道を詮議すれども奈良越の山道あまたなれば、先立ち歸りて思案を廻らしけるに、兵庫名跡を繼ぐ人は、十八の年世を恨み給ふ子細有て森尾宮内といへる姿をかへて、紫野大德寺にて淸藏主とよばれ、禪學修行してましまし、その弟宮松とて、いまだ七歳なれば敵討に出づる暇くだし給はず。武太夫無念ながら此子の生長を待ちける。この樣子を淸藏主傳へ聞き、信貴の古里に立ち歸り、老母に御勘當を御ゆるしとねがひ、父の事ども申し出して、互に涙のやむことなく沈み入りしが、淸藏主母の御盃を戴く時黑衣を脫捨て、乞請けて髮斗肴を喰初め、その儘心を還俗して、又名を改めて暫男とよばしして羽織に刀、脇指、頭巾、編笠

太股―原本ふとばらと傍訓せり

修行―原文執行とあり敵打に出づる―原文にの字なし

に面を隠し、人知れず屋敷を出で、この處毘沙門天に參詣し、當寺はそのかみ楠正成を申子の靈地、武士の尊む所なり。我この度の大願は、敵を手の下に討たせ給へと、心中ふかく祈り、それより大和順禮して虎七が在家を尋ねけるに、折ふし春の山、鶯の關を越え行くに、里人のとがり杁に薦包好もしく、佛臭き買物、御華足、線香、氷蒟蒻、一つにからげたる干鮭をかしく、腥き寺ぞと笑ひけるに、跡より色めきたる女の此男に追著きて、さりとは山道初めて難義、旦那に逢ふが嬉しければこそ、はるぐ〳〵の所を行けと、身は汗水になりて脱掛したる面影、振袖の上に脇塞の著物、いか樣僻者ぞかし。見る程里びたる風情なく、髪の結振、信貴の城下にはやる〳〵付島田のふき鬢、不思議に思ひ寄り、なほ心を留めけるに、荷物の中に弓の弦二掛見えしは、いかにしても合點ゆかず、彼の男をまねき、おのれは正しく寺に召しつかひ者なるに似合はざる女の道づれ、殊更佛具に武道具、これ只事にあらず、某は箇樣の事を見出して國の掟の役人なるぞ、有りのまゝに申せと威しければ、此男さし當つて迷惑し、まつたく住持の大黑には非ず、信貴の御侍衆坪岡虎七殿の御妾なり、榎葉井坊の門前におはしけるが、御屋敷へ御狀遣はされ、竊につれまして參るなり、これに少しも僞りあらば、初瀬の觀音樣の罰

ふき鬢―鬢のふくらみたるをいふ

國の掟の役人―國の掟をたゞす役人の意

大黑―梵妻

あたらんと、心のまゝ申して埒を明けける。暫男聞きすまして、此者どもに先立つて豐樂寺へ急ぎ、其里の屋に駈入り、折から虎七運命盡きて轉寢の枕に立寄り、夢覺ませて名乗りかけ、願ひのまゝに切伏せ、首を古里の母の御目に懸けて、是迄と又昔の衣を懸け、出家の身とぞなりける。

第二　吟味は奥嶋の袴

昔日誰が乘初めて壹岐の島、夕波さわぐ村衞に夢も結ばず、糸鹿梅之助とてかゝる鄙にもまた有るものか、俤の花浦風の烈しきをも厭ひて、深くかたらひける男は村芝與十郎といへる舟改め、身躰は輕けれども水主船頭にあがめられながら餘情に生れつき、無念や其昔は筑前にて五百石、筋目も人におとらずと、常にこれを悔みけるは、この若衆の親父糸鹿内藏は國の奉行職なれば、なまなか戀の習ひとて兄分といふ恨めしく、世間の思はくも心よからず、されども此道の隔なく、忝き事嬉しき事に一命を抛げて年月を送りぬ。爰に國の守なる若殿、或時梅之助を只一目御覽有て、頻に召し出さるべき由仰下されたるを、内藏かたじけなく御請申上げて歸り、此段梅之助に心得べきといふに、

身躰―身分

餘情に生れつき―其家の衰へたる時に生れ

何の色なく返事して、其夜すがらも與十郎と語るにも此事を話さず、心に之を思ひわづらひしは、もし是非召出され、御側ちかく御用承る時には、與十郎手前の道を缺く事の恨めしく、分別し極めて、その明けの日より病氣といひなして、部屋より外に出でず。親父これを氣の毒に樣々と慰むるに驗なく、別して若殿の御前いかゞと、御機嫌の次手をもつて悴病氣のよし申上ぐるに、御氣色かはりて座を立たせ給ひ、其後近習勤めし十倉新六に御雜談あり、梅之助今に本服せずやと問はせられしに、新六内々梅之助に執心ふかく、文つかはしければ其返事に自身來りて、念比分ありとの言譯なりしかども、いひかゝりたる一言無下にはと申せし時、これ程の御心底忘れ置かずといふに絆されぬ。其後勝島の入江に小舟うかべ、其友には村芝與十郎を伴なはれて魚釣りし風情心得ず。又過ぎし月見る宵浪都に三味線引かせ、與十郎と夜更くるまで私宅に語りながら、浪都は返しぬる跡は心憎しと語り、これより氣を付くるに、いよ〳〵念比にかくれなく、それとはなしに遺恨にさしはさみ、折をもつて參るべしと思ふに、これを幸ひにして段々申上げ、此度の病氣も虚病に疑ひなし、とかく與十郎生きて罷在るうちは、大殿の御意にても御奉公致す心底にあらずと、意趣ある下心よりつぶさに言上すれば、然らば方便

念比分―兄弟分

をもつて與十郎を成敗すべし、さりながら大殿の者なれば一旦貫ひての上と、家老白濱刑部まで、村芝與十郎利口ものたるにより、若殿御召使ひなされたき由仰せ遣はさるゝに、是程の者御耳に達するまでもなし、いか樣とも御用承るべしと、與十郎を呼び寄せ、仰せ渡しを申付けたるに、有難く直に若殿へ御目見え、即座に切米十石の御加增、殊に女中部屋の下横目役仰付けられ、首尾殘る所なく、外聞かたゞ〳〵面目身にあまり、宿に歸りぬ。其後鈴の間の番にあがるに、相役三人づつ詰めしは田上磯右衞門、柏義左衞門、村芝與十郎なりしが、いつも三人の内二人は臥して、一人宛は一時がはりに寢ず出させ、それを次手に成敗すべしと巧みたれども、此男よろづ律義につとめ越度なく、古座の者にまさり奉公するにつけて少しも見おとされざるを、右の新六若殿の御心底を察し、時の權を假つて、おのが姨野澤女中頭を勤めしを幸ひに、隨分與十郎越度になるべき事をたくみ給はるべしといひしに、野澤心やすく賴まれ、晝夜これを心がけたる時夜半の比與十郎袴を脱ぎて後架に行きけるを、竊にこれを盗みて足ばやに奥に入り、妻戸かたく締めぬ。與十郎歸りて見るに袴無し、相番は前後しらず寢入て音なく、不思議

古座―古參に同じ

後架―原本高架とあり

行方―なりゆき

九つ―十二時

深殿―寢殿の宛字なるべし

におもひて通路の扉を見れども嚴しく鎖し、彌工夫に落ちず、終夜これを思案するに行方合點ゆかず。さりとては奇妙千萬と思ひながら、相番の者に穿鑿しても迚も知るべき事に非ず、なまなか不埒なる事を尋ねて訝しと、夜明けてもこれを語らずして、番より下る時に磯右衞門この躰をみて、御手前の袴はといへば、昨夜より見えざれども、事やかましく詮議するに及ばず、大儀なれども新しく拵へるばかりといへば、義左衞門聞きて、それは先づ勝手づくの事、こゝは御城内の番所なるに、盗人來るべき道にあらず、また只見えずというたばかりにして置いても濟まぬ事なり、磯右何と。中々合點がまるらず。とやかく沙汰する時、女中頭野澤奥より走り出で、夜前當番の衆一人も歸らるゝ事無用、子細は大目附津川重五左衞門殿御出でなされてからの穿鑿と云ひ捨てて奥に入りぬ。扨こそ御見やれ、これはまがひなき怪事なりと、行方氣づかひして居ると、はや櫻の間に呼び出され、野澤口書をもつての詮議。夜前九つの時計過ぎて、南女中部屋の方に怪しき男の面影見えたるよし、西の深殿なるかたより告げ來り、一々これをたどすに別義なきゆゑ、いかなる者か目にかゝりたると、其なりけりにすます所に、今朝ほのぼのなる時梅の庭の忍返に、奥島にかた色の裏つきたる袴、打ちかゝりて在りしまゝに

かた色―かち(褐)色の誤か

私一分に致して―我身にとりて

六尺―駕籠かきのこと

今にこれあり、まつたく外より來るべきにあらず、まづ當番の者を改むべきよしなり、いづれも袴に別義なきかといはれし時、磯右衞門まかり出で、これに相詰めし與十郎今朝白衣なるを改むる所に、夜中より見えざるよし申したるといふ時、與十郎這出で、まさしくこれは狐狸の仕業と存ずるは、しばしの間の義に、誰とも形の見え申さざれば力なき仕合せ、御了簡をもつて御詮議頼み奉る、拙者もし不義の心あつて忍び入る程の事に、これを落して來るべきものにあらず、私一分に致して露程も覺えなき御事といひも果てぬに、然らばその見えたる時急度穿鑿せずして、磯右衞門咎むるまでは隱したるや、このいひわけ如何しても晴れず、但しやかましくむつかしとて改めざるとは、公儀に向つてはいはれざる私にして、おのづから其方越度極りぬ。それ二人の者に預くると、座を立ちさまに、此上は南部屋にも不義の相手あるべし、これを糺明すべしといひすてて若殿へ申上ぐるに、かねての巧と悅び給ひ、二言といはず縛首打たれて、定め無きかな村芝與十郎葉末の露と消えぬ。そのまゝ梅之助に只今登城すべし、しばしの内叶はざる御用あり、もし病中といはゞ乘物にて迎へ來るべしと、歩行六尺數十人、御手醫者坂川玄春、御使者には今の御物甲斐品之丞をつかはされけるに、内藏是を冥加なき仕

いはれざる過言―無用の過言

合と、早々梅之助を送り、扨御前に出たるに、今まで御前に罷出でざる御不足數々ありて、それも樣子を聞けば憎からず、さるによつて與十郎事不義の科にかこつけて今朝成敗したれば、此上は最早障ることはあるまじ、身に奉公すべしと仰せらるゝ半より、はつと思ひながら色に出さず。これは御意とも覺えず、與十郎と拙者義さら〳〵左樣の事にあらず、箇樣なる義は、御側に佞人有て跡形もなき讒言申上げたるものにて御座あるべしといふ。言葉の下より新六罷出でて、何と御傍の佞人とは誰を指すぞ、その上其方と與十郎念比の事は、國中に隱れなきによつて某申上げたり、生若輩なる口よりいはれざる過言、一つには御前をも憚からぬ、それを佞人といふと、色を變へて詞だたかひするを、若殿兩人を御なだめあつて、それはともかくも、梅之助身が近習へ詰むれば別義なし、向後互に意趣を含む事なかれと、奥に入らせ給ひけるに、梅之助直に宿に歸り、扨も是非なき次第、これ新六がなせる所、與十郎露も知らせ給はず、やみ〳〵となられたる事の悲しきに、涙にくれながら文細々と書置き、その夕暮立出でて新六が歸るさを待ちかけたるに、菱蔓の紋挑灯、これ新六と詞をかけ、拔き合はせて擊つ一太刀に切伏せ、若黨二人も遁さず切倒し、鎗持小者追つ散らし、今は是までと、新六が死骸に腰を

一天の王子云々―用明天皇の俗說

かさぬる―原文かぬるとあり

鴛鴦の劍―鴛鴦の劍羽にかけていへり

當流―當世風

かけ、心しづかに切腹し、みづから首搔落して消えぬ。この太刀音に近所おどろき駈寄るに、はや兩方事きれて一通の書簡あり。披き見るに、およそこの一道においては高き賤しき隔なく、たとへば一天の王子も草露の牧笛を鳴らし給ひて御思ひを晴れさせ給ひき。況やその以下は申すも愚なれども、戀慕に捨つる命は風塵よりかろく、屍を霜刃に刻まるゝとも、一たび交す侍の一言をや、爰にこの戀しらずありて、漫に忠信の者を無實の科に詐りて殺害す、よしや存命して人皮畜の世界にあそんで契絶々ならんより、邪魔の關を踏み破つて永き黃泉の旅枕、かさぬる衾はこれぞ鴛鴦の劍を以て、最愛とおもふ兄分の敵を討て、うき世の夢を覺ますものなりと、見るもの感涙の雨、さかりなる梅のあたら落花の名殘を惜まぬ人なく、今に語り傳へて聞くさへあはれなり。

第三　不斷心懸の早馬

男は當流、諸禮はむかしの物堅きこそよけれ。和朝の風俗は島國の果までも萬事變らず、その時津波しづかに、佐渡の國主に召しつかはれし大組頭は椿井民部、御用の事ありて召されしに、早馬に乘りて番町筋の四辻廻る時、綱島判右衞門といふ人に行き違へば、民

治定—決定

部詞を懸けて、判右衞門殿御ゆるされませい、鐙を外しましたと云捨てて通りける。この斷りを判右衞門聞き屆けぬこそ是非なけれ。屋敷にかへり、しばし思案して、兎角は堪忍成りがたしと分別極め、一門中を呼び集めて次第を語りける。いづれも内談してさまざま申す中にも、老人役に久木勘右衞門申されしは、民部程の侍がよもや詞もかけずに乘打すべき故なし、貴殿耳に入らざる事もあるべし、民部三千石、其方三百石、祿のかるきを見くだす心底にあらねば、爰は分別所と申されき。判右衞門一通り委細に承り屆け、尤も民部禮儀あつたにもせよ、此方の聞かぬからは是非もなき仕合なり。この上は勘忍ならぬに治定して、親類も同心の後、右の段々書中にしたゝめ、民部方へ遣はしける。民部その使に返狀いさぎよく申越しぬ。鐙をはづし、謙退の辭を正しく懸け申しつれども、今更この斷りは申さぬなり、明晩長林院の松原へ出合ひ、太刀先の御所存その意を得候、明日酉の下刻に立向ひ、面談の時はうつさじと書きおくりける。この事自然と沙汰して、横目役津田求馬聞屆け、御前へ申上ぐれば、兩方共に武士の義を立つる所至極なり、民部鐙はづし、禮儀を正しながら、此時におよびその斷りを構はず、一命を捨つる志これ神妙の至なり。又判右衞門心底民部詞を聞かぬにして、我一人の勘

小早—小舟の一種
國遠—國を立退くこと

忍にて濟む所を身を捨て申入るゝ事、これ又道理に歸したり、もと意趣なき義なれば、自今以後兩人共に遺恨さしはさむ事なかれと、大殿曖はせ給へば、上意有難く御請申し、別條なく屋形に歸りて、民部妻子を召しつれ、其夜立ちのき、渡せる船を急ぎ、佐渡ノ國をはなれ、越後の寺泊といふ浦邊に著きぬ。かゝる折ふし、跡より福井丹後、安德寺勘太夫、伴采女、此三人小早浪をくどらせて程なく追付、御暇も乞請けずして國遠いたさるるの段以外の御立腹、先々歸宅申され、其上の願と申渡しければ、民部少しもおどろく氣色なく、剃髮したる首を見せ、この仕合なれば外に主取仕り勤むる望にあらねば、いかなゝ上意にても此身後へは歸らじ、是より武州淺草の邊に住宅仕る子細ありと申しはなれて、この一言に取りつく島もなく、船は佐渡にもどりて、御前よろしく申上げ、先づ其分に濟みける。それより民部は東武に行きて、淺草の寺町ちかくに借座敷して、門柱に椿井民部と筆太に張札して、菱垣の假なる風情、軒は雨もりて月すごく、壁は蔦のみ嵐の吹込み、身をいとはず、世をかまはず、心のまゝに一日を暮し、遊興有る程盡して、秋の夜の哀れ一しほ、菊も霜枯に近き比、ひとりの息女十一にして琴の曲すぐれて好き給へば、母はこれに和せて時勢をうたひて餘念なく見え給ひぬ。この歌面

白き半に女の聲して、けはしく板戸敲き開け、抱きたる子を差出し、しばしこれを爰に賴み奉る、只今御門前にて親の敵討と申して、肌刀抜きて駈出づる。民部それはと續きて出給ふを内儀おしとゞめ、こなたの御命は義理の預り物にあらずや、助太刀ならば女に女よしと、長刀の鞘はづして門に出給へば、長月二十四日の宵、出でそむる月にほのあかくその面影も見えわたりし。相手たくましき男三人、こなたは纖弱き男に、角前髪の若衆、彼の女切結び、成程靜に受け流しつ、一命爰に極めたる有樣なり。民部内儀女に立添ひ、これに身共が後詰、心覺えの長刀なりと脇を拂はせ給ふ働き、摩利支天も恐れ給ふべし。この懸聲後に鐵山の便となり、彼の女が手に懸けて、進みし男の脇腹切付け、よわるを疊みかけ終に打伏せとゞめ刺す時、高股我とあやまり、身を惱むを内儀肩にかけて内に入り給ひぬ。民部は塀越に見物して、角前髪裾を拂へ〳〵と下知し給ふに力付き、踏ん込みて切付け、飛びかゝつて首を打つ。この勢ひにおくれて一人遁行くを、今一人の男追つ著け打ちとめ、二人ながら淺手おひて、嬉しや敵は殘らず討つたぞと聲をかけあふ時民部廣庭に入れて氣を鎭めさせて後、樣子を尋ね給ふに、兩人禮儀を演べて、この度の首尾偏に御蔭ゆゑなり、殊更御内方樣のお働きにて、願ひのまゝに此女本望をとげ、こ

角前髪―額の角を剃入れたる前髪姿

座にて―其場にて

の嬉しき御恩報じがたしと、いづれも涙をこぼし、これなるは信州松本にて高倉庄左衛門と申す者の娘、私義は大野笹右衛門と申して、同じ家中に罷在しが、この五ヶ年以前に庄左衛門聟となり、此女とかたらひ申し、未だ十日も立たざる中に岩谷喜平治と申す者庄左衛門と口論、座にて打ち捨て、國本を立ちのきける、舅の事なれば外に見られず、御暇申請け、三年あまり流浪をいたし、やう〳〵此程付出し、今宵の首尾本國へ歸宅の土産には喜平治が首なりと、言葉に悅びを含み、段々心底を殘さず語り、これなる若年者は私弟笹之介と申すなり、これを追付御禮にさし越し申すべしと、互に武士のつめひらき、聞くにたのもしき事ぞかし。各夜明がたに立ち行くを民部門送りして、此上ながら尙仕合よく御歸國を願ふなり、扨この度それがしが女さへ力をそへしに、我ながら助太刀用捨する事まつたく身を引くには非ず、此段は後日にしるゝ事ぞと、これを暇乞の納めにして別れぬ。扨又佐渡が島に在りし綱島判右衛門國に勘忍成りがたく御暇申請け、十三になる一子判之丞、同じく妻を召しつれ、急ぎ江戸に立ち越し、民部かたへ尋ね、互に涙に沈み、されば武士の義理程是非なきものはなし、兩人が最後は何の遺恨もなく、世間の思はくばかり恥ぢて、身命捨つる夢路の友、けふをかぎりなれば、うき世の名殘

酒心よく酌みかはし、二人が妻もうちまじり、古里にてはあひみぬ貌を、思ひもよらぬ爰に近づき、むかしを語り今の歎き、一人の男子、ひとりの娘、この行くすゑの思ひやられて、今相果て給ふ人々の身の上より、なほ悲しきは女心に道理なり。民部内方申出されて、判右衛門殿一子の判之丞に民部殿娘のお松を妻せたき願ひ、歎きの中によろこびの盃事、後の事家來に申付け、両方の内儀一度に髪を切捨てて、いまだ御命のうちに出家姿となり給ひぬ。何か世上に残らぬ仕方、哀れをふくみ殊勝さ限無かりき。民部、判右衛門今はと思ひ定め、袴肩衣を華やかに死出立をあらため、これぞ佛の淨土寺を頼み、法の庭なる草むらに疊六帖敷きならべ、両人座を占め、臨終を觀念して左の手に手を組合、南無といふ聲を合圖に切付け、露ものこらぬ心の魂、そのまゝ同じ煙となしける。末の世のためしぞかし。大野笹右衛門此事はしらず、はるゞ〳〵の信濃より一禮に來り、大かたならずこれを歎き、その後さまゞ〳〵佛事をなして、四人を伴ひ生國に歸り、二人の比丘尼には善光寺の片山に草庵をむすびいたはり、判之丞は手前に庇へ、成人の後御奉公に出し。浪人分にて八百石くだしおかれ、椿井主水とぞ申しける。

何か世上に残らぬ仕方
―少しも浮世に未練を残さぬ仕方

第四　火燵もありく四足の庭

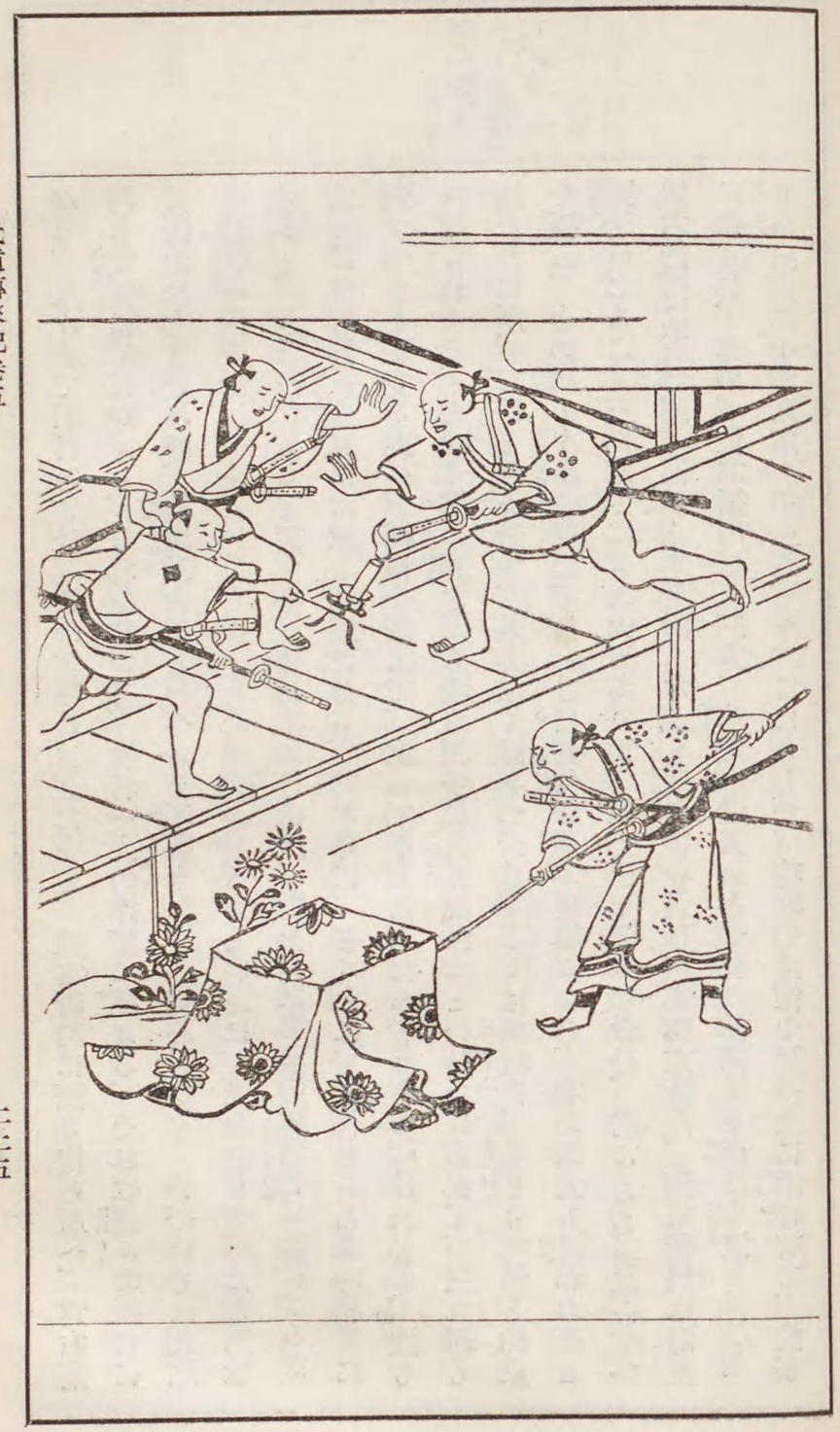
大雪軒より高く、國は隔てながら目前の白山、水邊は離れて橇の浮舟漕通ひて、適々の御出で、これはゝ〳〵、此比の景色に鄰家を見失ひて、市中の山居と存ずるなどいひかはしたる朋友四五人、語るには夜のながきを重寶に、おとし咄も耳馴れたるはやや言盡して、何と化物の出づる百物語とやらを始めてはといへば、これ一興たるべしと、行燈かすかに帷子を打掛け、火燵も取て退け、各座を占め、むかし空屋敷にと、いふ程の事おそろしく、目に見ぬ鬼も面影に立ち、咄の六七十もすむ比より、透間漏る風もそれかと驚き、片隅に居たる男も次第に躙出、天井に鼠の噪ぐも雷のおちかゝると疑はる。屋根を物めが行くやうに聞え、もはや九十七八に語りつめたる時、皆々面の色を違へて五人一所に鼻を突合せ、今は咄一つに極りたるにぞ、目を見合せ、手に汗を握り、身柱もとより何ものやら抓みたてると、榑縁より爪の長き物這出る音頻りなるに、心魂も消々となりながら、さすがすくみも果てず刀取りまはして、一度に聲をかけてはらりと立ち、障子を明くるまでは叶はず、唾にて穴を明けて覗けば、最前自ら置ける火燵の

物め―化物

御時宜―御挨拶いはれぬ所―無用なる場合

武邊して―武勇だてして

檜、縁より下におりて霜枯の菊畠にはしり出たるに、いざしとめ給はぬかといへば、先づこなたに、いや御時宜に及びませぬと、いはれぬ所で禮儀を述べて埒あかざるを、中にも亭主武邊人にすぐれ、そのまゝ廊下に走り行くと、手鎗提げてかけ出、ぼつ詰めて突きとめ、仕留めたりと呼ばはる聲に力を得て各駈著け、まづは御手柄、これを殿の御耳に達せんと、はやとりぐなるに亭主噪がず、これ人の疑ふ事なれば、いづれも證據狀を書いて給はれといへば、心得たりと、天正三年十一月二十八日の夜、畠山の末孫友枝爲右衞門重之化生のものを仕留むる處實正明白なり、其爲如件、花崎波右衞門、笠井和平、常磐瀧右衞門、戸島與四左衞門と連判を据ゑて、いざ正體見せ給へと蒲團をまくれば、日比手飼の犬なり。宵のあたゝかなるに塒とせしが、夜更け寒ずるをいとひて駈出でたるにぞありける。これに興覺めて大笑ひして歸りぬ。その後此沙汰一ぱいになりて、扨も今は御代靜謐に治まり、血臭き事なきによつて、此比去方にて諸歷々衆犬を突きとめたりとて證據狀を取り、これをいひ立てに外に知行望むよし、向後人の首取る刀を罷めて、犬を切るには生くら物よしと、名をさゝぬばかりに評判しけるを、右同座の戸島與四左衞門傳へ聞いて、何とやら言はれぬ所に爲右衞門が武邊して、諸士の物笑に



なり、我々まで面目を失ひ、この言ひわけ立たずと、波右衞門に語り悔む所へ、爲右衞門も當番にて來かゝり、これを聞いて、拙者一人の迷惑に極まる、それは誰々の批判にて聞かれしといふ時、篠原三九郎といへる男不圖きたり、何心もなく、いづれもは此比の沙汰を聞き給はずやといひしに、それは何事ならんといふに、犬を突きとめたる感狀の事と、きほひかゝりて話すを、これは幸ひの所へ御出、則ちその臆病者は拙者なるが、此事に付て御一分立たぬ衆も此座にあり、其申譯に、どなたにても仰せらるるを相手に致すべきと存ずる處へ、御自分御出で、定めて申し出したる者は有るべけれども、迚も仰せられまじ、とかく御不祥ながら我ら相手に此方を致すといひかけられて、三九郎も退かれぬ所、二言と遲々せず、是非なく詞をつがひ、こゝは御城内、番下り次第と約束を極め、その明の夕暮中橋にて出合ひ目釘竹の飛ぶ程戰ふよし、右の四人も免れぬ所と駈著けたるに、三九郎方にも助太刀ありて、兩方三十二人切合ひ、討たるる者十五人、爲右衞門は三九郎、同林八郎を討ちながら餘多手を負ひ、與四左衞門、瀧右衞門は卽座に切られ、和平、波右衞門以上三人、草履取壹人めしつれ、其場より直に立退きける。其後三九郎子林八郎、弟三八、十二になりしが、喧嘩の時節十死一生に煩ひ有て、此事

御不祥ながら―御迷惑ながら

今しらせければ自ら御暇の事御前へ申し籠めたるに、いさぎよしと、三九郎甥芝村湖助に後見仰付けられ、兩人その明の春より立ち出で、北國海道殘らず尋ねのぼり、京三條通信濃屋に宿取りて、或時は淸水の群集に立ちまじり、ねらひありくに終に廻りあはず。こゝに三ヶ月足をとどめ、旅より旅の假寢物うき夜半毎に、空也上人の流れを汲む鉢敲の物哀れなる聲して、生死無常の理を聞けど驚く人もなしと口說くにも、先立ち給ふ父の事を思出し、夢も結ばず聞居しに、此者どもは皆其筋ありて山城ノ國に限りたるに、今宵の二人づれは訛聲なるは不思議なりと、湖助氣をつけて、施物やる次手に火影に貌をよく見れば和平、波右衞門なり。まづこれを捕へけるに、三八扨は敵よと刀ぬきかかるを、湖助しばしと止めて各は正しき相手にあらざれば討つに及ばず、扨爲右衞門は何方に忍び居申すや、もしこれを知らせ給はらずは御兩人共に逃さぬといふ勢に、この者怯れながら、土はたがひなり、我々も彼者ゆゑにこそ流浪いたせ、何をか包まん、爲右衞門は今は西の京大將軍に戸川友元といふ醫者の庵に、身を隱して用心ふかく致せども、夜は粮もとめんため太平記を素讀して、今宵も出づべしといふにまかせ、堀川を上へあがれば、一條戻橋にて言葉をかけて討ちおほせ、兩人のものは助けて歸りぬ。

鉢敲―瓢を叩きて無常頌文を唱へ、年末に洛中洛外をめぐる行者

大將軍―地名

武道傳來記

卷六

諸國敵討

目錄

第一　女の作れる男文字
　姉より妹が奉公振の事
第二　神木の咎めは弓矢八幡
　同行三人若衆順禮の事
第三　毒酒を請太刀の身
　神鳴に月代差合の事
第四　碓挽くべき埴生の琴

鴛鴦の劍衾を通す事

第一　女の作れる男文字

咲くをうれしがらねば散るに歎なし。東山の櫻は殘り、人はむかしの春の事、都を見立て、岡崎の奥に樂隱居をかまへ、泉川修理ノ大夫吉連入道し給ひて隨夢と改め、弓馬の家久しき水越外記、德仙寺隼人、この二人を兩の手のごとく賴み、世間をこれに捌かせ、内證美をつくしたる居間、廣間、華麗歡樂爰に極め、世の人の一年一日に暮れて、銀燭の光る源氏の名をうつし、須磨、やどり木、花散里、うつせみの夜のころもを飾らせ、あれにもこれにも手懸女は、いたづらの書も蘭帳のうちに房付枕ゆたかにかしら撫でさせ、足さすらせ、夢見て覺めて、金盃甘露の醉の中に世にあらざらん謔調のみ、華淸宮もこんな事なるべし。それは見ぬ唐の鳥の高う捿りし梧の木も、玉琴となりて連彈の爪音、御屋形の外にもれて耳にひゞきわたれど、流石都人稀にもこれに氣を移さず、松吹く風に聞きなし、かゝる殿作り、誰の御屋敷と尋ぬる人もなかりき。この隨夢の年の程七十古來稀なる御身にして、世をいやましに恥ぢ給はず、よしなき御無理を仰せられ外記、隼人が異見をも聞き入れさせ給はず、後には女藹の中間にさへ疎み果てける。殊

須磨、やどり木、花散里、うつせみ―いづれも源氏物語の巻の名
華淸宮―唐玄宗楊貴妃と遊びし離宮の名
七十云々―杜詩に人生七十古來稀

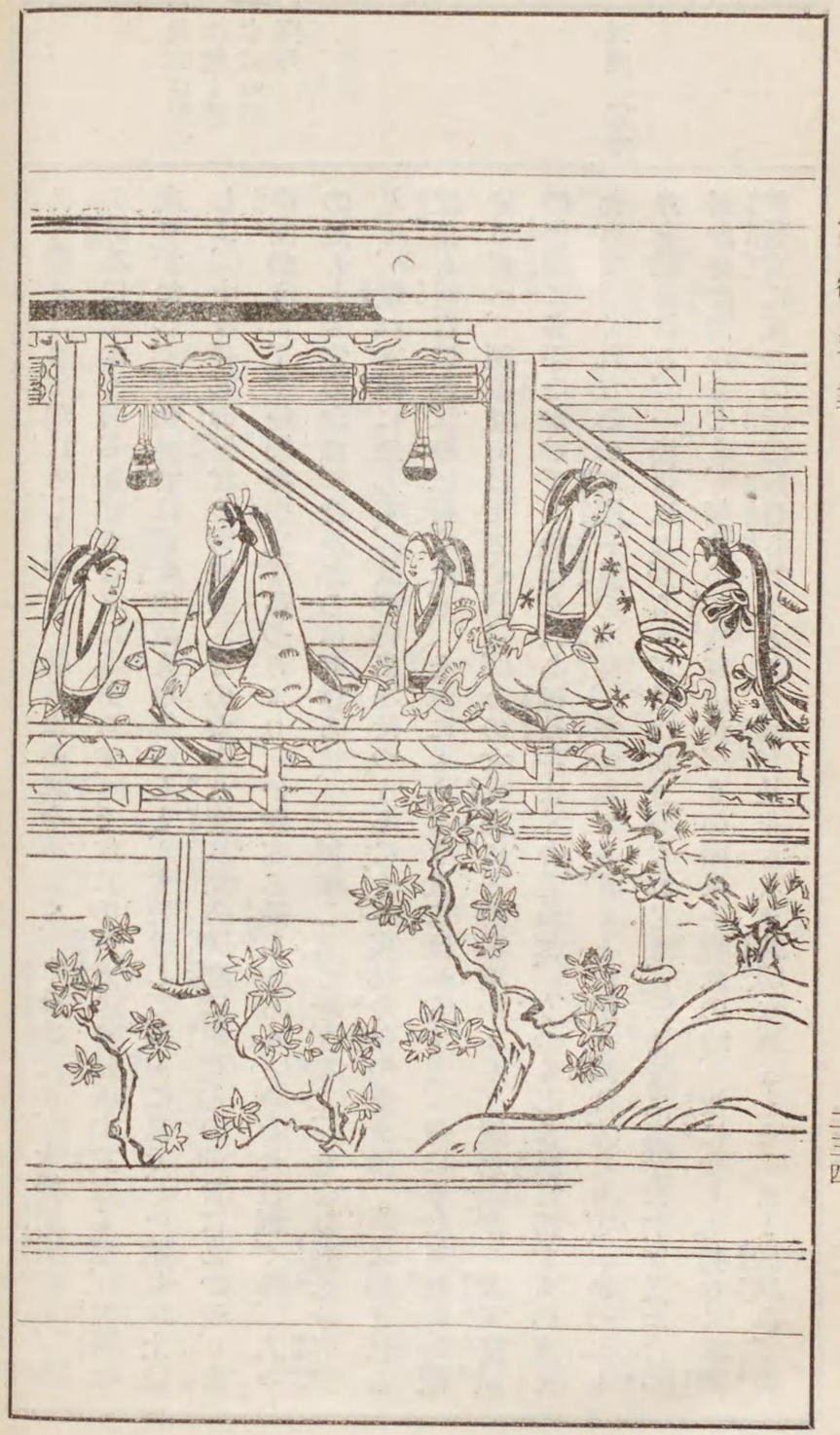
更此程しきりに御契の深きかたは一橋殿とて、この親里は伏見の片陰に詫住居して、佐脇玄丹といへる目醫者の娘なりしが、艶女に生れつき、見し人なづみ深し。はや十七なれども縁付このまず、親の不自由を見かね、折ふし此屋敷美女尋ね給ひしを幸ひに、當分百兩請取り、金子に身を捨て、御手懸者といはれしも、父母のためなればこれ更に口惜しからず、只御主のお氣に入る事をわすれずして勤めける心から、隨夢又もなく御寵愛あそばし、朝暮御寢間に召され、外の女中は仇なる花となれどもこれを嫉まず、いかにしてもお氣取りぐるしき旦那に、一橋御機嫌に入らせ給ふを悅び、おの〳〵隙をうき世の思出に、百菊の長座敷に集り、双六、歌がるた、謎かけてとけしなく、秋の夜の明がたおそく晴れて殘れる月を恨み、薄雲といへる女萬、旦那の御情の遠ざかるを悲み、一橋を見捨てさせ給ふべき、難義を巧み、女心のおそろしく男文字にて、一橋に懸けしや思ひの深き所見えわたりたる折文を、爰にかしこに落し置きしに、はじめの程は末の女も取りあげずして掃捨て、塵塚に埋みぬ。其後幾度か重なりて、或時隨夢の御目にかゝり、御詮議あるに一橋かたへの通はせ文に紛れなし。その文章逢馴れて後の思ひを書きつゞけし。隨夢殊の外に急かせられ、女萬頭の木幡に仰付られ、一橋に尋ねけるに、夢

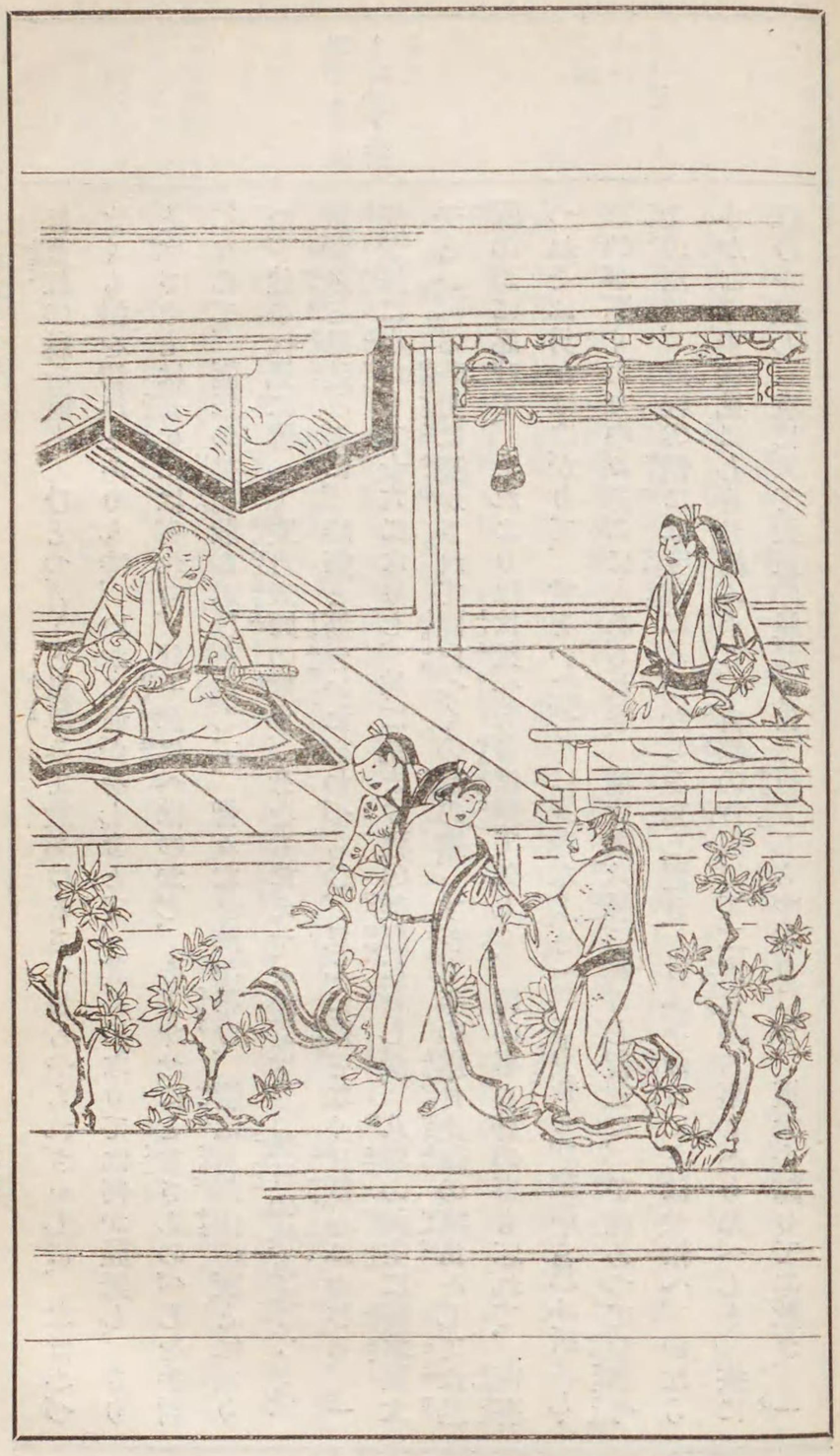
とけしなく
―待託ぶる意、解くにかけていふ

美女は悪女の敵―諺存じの外―案外

恥隠―湯卷

にも覺えなく、現にもしらずと、曇らぬ心底を正しく、申分の段々、木幡聞屆けて、人の嫉みにてかく有るまじきことにもあらず、そなたの御方より外への文ならば、言分は成りがたし、兎角美女は悪女の敵と申傳へしと、大笑ひして御前に出で、一通り申上げしに、中々存じの外なる御機嫌、その女を八鹽紅葉の廣庭に廻せとの仰せにまかせ、女中間のうたてや一橋を引立て出づるより、いかなる憂目やらんと色を失ひ泪ぐみ、人々の足もとも定めかね、身をふるはせけるに、一橋すこしも騒ぎなく、常より麗しき容顔して、慟れず裕に坐して、旦那御出を待つうちにも、哀れ今年の憂き秋、色に染まれる紅葉も科なければ枝は折られじ、それにも心なき風には知らずと、身に寄せて無常を觀ずる所へ、隨夢立ち出でさせ給ひ、その女丸裸にと御言葉かゝる。迷惑ながら金天鵞絨の後帶に各手をかけて　色はえたる袖褄をまくりとれば、うつくしき肌に折からの嵐あたりて、くれなゐの恥隠一重の有樣、主命ながら然りとは酷き御仕方なりと、いづれも身を縮めける。一橋世にながらへて效のなき事なれども、罪なき身の程人にしらせて後、何か命は惜からじと、無念の少時を脱れ、身の因果を觀念の時、汝にかくし男なくば諸神誓文に五つの指の爪自ら放てとあれば、是非もなき糺明なれどもそのまゝ切刻み、血





は眞紅の絲を亂し、ひとつ〳〵と數算みて放ちけるさへ目もやられざりしに、なほ心づよくも指を切れとありし時、いかに命がをしきとて、其身になりては何か詮無し、さりとはさりとは畜生には劣れり、此一念外へはゆかじ、心まかせにと首さしのべしを手討になして、面影の美花散る思ひをなして、皆々なき跡を弔ひ、軀は鳥部山の灰とはなりぬ。此事伏見に傳へて玄丹夫婦の歎き、身をもだえても詮なく、後日の恨みをふくみ、娘が敵と思込みしに、時節と筋骨いたむわづらひ、思ふに效ぞなく日數をふりける。一橋が妹に小吟とて十六になりし、姉に見ます程の美形なりしが、八幡の神主に橋本權大夫といへる若男に唆かされて面白づくの緣の道、すぎし年の霜月比親の家出をして水無瀨の里に忍びて、それよりは伏見へも音信絶て久しく、親の事も姉の事も忘れて、明暮つれそふ男かはゆがりて、世をいたづらに身をなし、これより何をか樂みと思ふ折ふし、京の事聞くより中々あるにもあられず、權大夫八幡に歸りし留主に、子細あつて我事今生の別れ、此程の情には姿繪にみづからを寫し置き、けふを命日にとはせ給へ、かならずかならず伏見にしらせ給ふまじ、自然の首尾にて二度見ゆる事もありぬべしと、筆に思ひを殘し、夜に入て此里の屋形を出て行方しらずなりにき。權大夫歸りての歎き、一

時節と一時も時折も折とて

あら世に一あたら世にの誤なるべし

人つかひし下女に尋ねて樣子しれず、これをこがれて胸せまり、次第におとろへ、つひに憂き身の果、息引取るまで女の事ばかりいひて死にける。小吟京に行きてすこしのゆかりを尋ね、都の奉公を望みといへば、此姿にてあら世に流れありく銀になし給へと、あなたこなたの肝煮宿を賴みしに、京にも稀なる色盛、見る人これを焦れけるに、願ひあるゆゑに外へは行かず、やう〳〵隨夢の屋形に女の入るを嬉しく、給銀のねがひもなく、まづ目見えを申しけるに、風情好ければ、其日より宿にはかへさず召しつかはれしに、小吟身に望みあるゆゑに人の氣を取り勤めければ、皆よしなに申しなして、或時雨の日のくれかたに小吟はじめて御寢間にめされ、心よく打解け給ひし折を得て、肌刀にして胸刺通し、一橋が妹なるぞ、姉の敵とつゞけさまにとゞめ刺し、其上に腰をかけ、胸つらぬき、身をかため、うれしげに笑みたる最期見し人志を感じける。女のはたらき前代ためしなき敵討、今の世までも語りつたへたり。是皆薄雲といへる女の仕業あらはれ隼人が手にかけて打つて捨て、この跡程となりてもとの草むらと變りぬ。

この跡程となりて一この跡程もなくての誤か

第二　神木の咎めは弓矢八幡

昔但馬なる出石の里のいつの春、山は茂りあひ、小鳥の塒こゝなりと、風あたゝかなる野末の茅花摘み捨て、差竿手毎に持たせ、友とせし男をかたらふ比は同じ人心、この森陰に行き歸り、逍遙あるが中に、葉田與七郎といへる若侍半弓の自慢して、日にかゝる程の翅あまた射落しけるを、同道の小伴新四郎これをとゞめて、こゝは宮地なれば神は木の葉さへ惜み給ふ況や殺生をや、これより朝木山の麓にて思ふまゝに狩すべし、此所は遠慮し給へとすゝめければ、與七郎打笑ひて、何祟といふ事のあらん、それは近比なまぬるき穿鑿、あれに見えたる松の葉隱れに、殘る雪にまがひの白鷺、矢坪御望み次第に射落して見せ申さんと、引きしぼりて放つ矢、眞たゞ中を射抜いて、先づは御手柄と譽めし詞の下に、あまり矢向ひの尾に遊びし大石半九郎が右の肩骨より心もとまで篦深に、たちまち絶入して倒れ、所惡ければはやこときれける。同道の久志小左衞門おどろき、あたり見廻す時、與七郎はこれを夢にもしらず、新四郎に向ひ、何とこの拳にて、自然の御馬前にての星甲違ふべきものに非ずと胸をたゝいて、半弓小者に擔げさせて立ち出づるを、小左衞門、扨は此男いかなる意趣かありての事、仕方も有るべきものをと、身膳ひして追懸しが、もし又人違ひもやと、聊爾に詞を懸けず、先づ僕が持てる弟矢と一手に紛ひなき證據に、立ち歸りて立つたる矢を引きぬきて是にくらべての上に、これしばし同道あるを御存知なきかといふに驚き、後を見返りて、段々聞けば聞く程、此方は少しも覺え無しとはいひながら、是非なき過失、いかやうとも御了簡に從ひ申さんといへば、小左衞門も承り屆けたり、尤も意趣あつての事に非ざれば、いよ〳〵是非に及ばぬことながら、半九郎死骸を闇々と持ちて歸り、彼者兄弟緣類に向ひ、何とも私の一分立ちがたし、互に不祥の事ながら、打果さねばならぬ首尾と、いふに引かれぬ梓弓、忽ち神罰の顯れ、最前諫言したる新四郎も遁れぬ所と覺悟して、二人が切結ぶを側にながめてゐる時、與七郎はや切殺されし。助太刀心得たりと切結び、終に小左衞門を打つて、直に同國二見の浦より舟に乘り、丹後の成相の里にしるべ有て五日影を隱し、それより大和ノ國初瀬の里にゆかりの者を賴みて、爰に居をくろめける。その時の首尾に小者二人は忽ちに相果て誰しれる者なかりしに、小左衞門が草履取餘多手は負ひながら、その里の者ども板に乘せて小左衞門屋敷に送り、樣子を問ふに深手なれば返答もさだかならず、息の下より旦那を討ち給ひたるは小伴新四郎殿にてありしとばかりを最期に果てければ、扨は敵は一人に極りたりといふ處へ、大石半九郎子息半三郎、樣子いかゞと

篦深―矢竹の深く沒入すること
星甲―兜の鉢に星の如き點の凸起せるをいふ
聊爾―輕卒
弟矢―一手に二本もちたる矢の初に射るを端矢、矢に射るを弟矢といふ

駈著くる。與七郎はいまだ妻なかりしが、弟分松淵時之助も來り、小左衞門一子澤之助と三人一所に寄舉りて、とかく我々敵は新四郎にまがひなしと、御暇申上げて立ち出でける。いづれも同じ十六七、一樣に態かへて西國順禮、五畿七道より順逆かまはず打つ札の、敵にあはせ給へと誓願空しからじと、末を心に觀念して、四國西國の津にいたるまで、二年にあまるうき旅路夢も結ばず、今は河内ノ國藤井寺にさしかゝりける。こゝに新四郎が妻此事を思ひこがれてその翌の年果てしに、尙又一人の娘の殘りて不便を留めたる由、傍輩のうち好深かりし梅垣平藏方より文こまゞゝと書き送りたるに、新四郎もつらき憂き住居に、歎きに哀れをかさね、せめては忘れ形見の娘をなりとも、行末知らぬ身の行くへ、今一たび見まほしく、忍びやかに呼越したき願ひの返事するに、平藏も尤もの事に思ひて、竊に乘物に乘せて遣はしける。此三人の者藤井寺より大和の坪坂を志して行くに、立田越にかゝる時、籠の茶屋にしばし休らふ處に、この乘物も同じく立休みけるに、茶汲む女香煎を酌みて乘物の側に行けば、戸をば明けずして内より簾を少し卷き上げたる氣勢の物床しく、この三人の血氣ざかりに心うつりて差覗けば、そのあてやかなる美形、此年月國々にさまよひ、目にかゝる程の女色これに比ぶべきなし。

打つ札―札所札所を參拜すること

あはれ如何なる御方の花の姿、吉野は凩に見劣り、この嶺の紅葉も時雨塵の芥とはなりぬ。日比の一念つい打忘れて、誰か先に見初めたると私語での爭論、寔に猛き武士も聖の御國を傷らるゝこの惑ひの道に踏み迷ふ慣ひ、思ひやられてさも有るべし。かゝりし程に飲みたうもない白湯を飲み、俄に足を痛ませ、此乘物いつまでも此所を動かずもあれかしと、迚もかなはぬ戀に氣を惱まして時をうつしけるに、ふしぎや乘物の中より利根なる狆駈出でけるを見れば、澤之助はやく言葉かけて、あの犬は敵新四郎が日比祕藏せしに少しも違はずといふより、今まで思ひこめし戀心忽ちひるがへり、誠に氣を付ければそれにちがふ事なし。何とも心得ねば、いざ跡を慕うて見屆くべしと、五六里の間を跡になり先になり、終に初瀨の里につけ屆けて、奥深き編戸しめし藁屋に舁入るゝと、内より新四郎ころび出でて、扨もはるゞゝの憂き旅路、よくこそと悅ぶ躰を柴垣の隙より見屆け、扨こそ新四郎なれと、我さきと走り入るを、澤之助おとなしく推留め、もはや敵は掌の中に在り、慌つる所にあらず、扨各一所の敵なれば一度にも討つべき事ながら、先太刀は拙者給はるべしといへば、半三郎、此方も親の敵と詮議をはらざる間に、時之助たまり兼ねて、跡よりつゞき給へと内に入れば、おくれたりと、三人同音に名乘

聖の御國を傷らるゝ云云―本心を失ふことをいふ

りかけ、抜きつれてかゝれば、新四郎騒がぬ躰にて天卷して刀を提げて立出で、暫く待ち給へ、この子細は段々の首尾あり、先づ聞給ふべしと、半九郎與七郎に討たれし事を語る詞の下より、半三郎顔色かはつて、今まで思ひしに違ひて時之助も同じく見合せて切結ぶを、澤之助も肝つぶれて眺めゐし時、其助太刀の子細、御自分と拙者箇樣なりといふと、また抜合せて戰ふに、はや時之助と半三郎は互に深手負ひながら、兩方共に疲れ倒れて、寢ながら今はかなはずと刺違へて果てける。澤之助も思ひ籠めたる一念の太刀に、新四郎が右の腕を切落し、南無三寶と差添抜く間に、新四郎娘長刀を小脇に搔込みて走出で、澤之助を水車に切伏せ、立歸りて見れば新四郎も深手一つにあらず苦みて、卽時に息絶えぬ。此娘の悲歎一方ならず、旅の疲れの憂き思ひ、二年の内の難義語りも果てざるに、此有樣目もあてられず、賴む木の下に雨も涙もたまらぬ所に、逆緣ながらと道明寺の側に庵卜め　妙理比丘尼と名を改めて、此七人の菩提を問ひける。

賴む木の下に雨が洩る—諺

第三　毒酒を請太刀の身

驛州にありし事語り傳へて、其時の大守森脇主税之助病死あつて、若殿市丸殿遺跡を繼ぎ給ひ、代々の家絶えず、國の成敗を執行ひたまへり。ある時家老祝山中務に仰出さるるは、御慰み旁々、家中の若き者共それ〴〵に武藝嗜める品、時ならず御覽有るべし、其内先づ人々勝れたる藝書付を上ぐべきよし、畏つて相心得、いづれも其頭々に觸れて差上ぐるに、何の何某は正田流の兵法、馬は大窪が印可、居合は片山伯耆流、弓は當流、鑓は大島流、誰は鐵砲、彼は何々と、いづれか一藝なきはなかりき。其日廣間の當番には外山白右衞門、坂野用助、乙見瀧之進、一所にならびゐて、白右衞門云ひけるは、何と今の書付の披露の内、熊井五助が武藝の品々多きこそ合點ゆかず、其子細は、あの青男つね〴〵の有樣から生ぬるく、殊更つひに弓を手に取りたるを見たる者なし、鑓などは念もない事、及ぶまじきを、人竝に書付をさし上ぐる事、是程の嘘はつかれうものに非ずと大笑ひしけるを、次の間に五助從弟白橋元左衞門これを聞いてたまりかね、其番より歸り樣に五助がもとに立ちより、けふ誰々打ちよりて、此沙汰ありしと知らせければ、よくぞ聞かせ給はれ、これには分別する事ありと、その翌日家老中務まで申込みけるはこの度書上げたる武藝の品々御前にて仕りたきねがひ、中務取次ぎて伺ひければ、幸ひ御機嫌よろしく、今日御覽あるべきよし仰出され、五助忝しと支度して、櫻の庭の廣緣

成敗—政道

念もない事—無論

竹刀―原本品柄の字をあつ

に立ち出づれば、殿にも御出座有て皆々相詰め、まづ弓をはじめて三寸の的を懸けしに、三手の矢五本中り、殊更手前見事なるに列座驚き入り、次に竹刀、その入身には小石與四郎とて、家中若手の中の達者なるが出たるに、三本ながら突き止め、其次に兵法、笠田卜立が一の弟子數枝友平立合ひけるに、竹刀たゞきおとし、かさねての時には打合せるまでもなく勝負を見せければ、これまでにて措くべしと仰付られ、若殿の御感甚しく、其外の諸役人に至るまで舌をまきて、人は侮られぬものかなと、今までをかしがりし者ども興を覺ましけり。しばらく有て五助御前に呼び出だされ、御褒美として加增百石下され、當座の面目、外聞かたゞく有りがたく退出すれば、家中に其聞え隱れ無く、それより三日過ぎて、右の三人の方へ狀を付けけるは、拙者事先日御評判の武藝の義、今月二十五日櫻の庭において上覽に入れたる通り僞りなきは、定めて各も御見物有べし。然る上は御取沙汰一分堪忍ならず、伺候致すべきやこなたへ申入るべきかと、讀みも切らず驚きて、そのまゝ用助、瀧之進を呼びよせ、何と返事をせんといへば、兩人おなじく色を違へ、これは先づ誰がいひはじめて、このやうなる凄じき事を仕出して氣遣ひする事ぞ、惣じて人の噂をせぬがよい、今からも有るべき事、いづれもたしなむべしといへば、今それをいうて埒のあく事か、とかく此返事の仕やうはと頭を割らして、用助やうやう今分別出たりといふに、何と問へば、まづいかやうに思案しても死ぬる事は好かぬによつて、爰は陳じてやるにはしかず、其返事に、仰下さるゞの取沙汰、此方三人の者は貴公樣の事微塵影にても日向にても惡しく申したる事なし、萬一脇に憎しむ者あつて我々に迷惑させん爲めに申したるにぞあるべし、それは御不祥ながら堪忍あそばして給はれと、小野流のふるひ筆をとめて遣はせば、五助つくゞ〳〵段々の斷りを見て、此上に何ともいひやるべきやうなし、先づ思案すべしと、其日は暮れけり。瀧之進、用助は白右衞門方に取籠り、何と五助は堪忍してくれうか、心もとなきは、あれ程の藝をかくして居る程の者ぢやによつて、そこが濟まぬ事なりと、一所に額を合せ、手に汗をにぎり、嘐あればすはやそれかと肝をひやし、又談合して、昨日の御返事をつかはさるべしと、慇懃にいうて取りて參れと、家來を白眼つけて又五助方に遣れば、五助分別して、沙汰せざる事に此方より狀を付くるは却て無調法なり、されども言はぬといふを是非とも相手にすべしといふも、道理しらずになるに似たり、但し元左衞門が聞き違なるも覺束なし、もし實にいひたるにしても、狀付けられての上に申さぬといふ程の腰ぬけなれ

頭を割らして―心を碎き思慮すること

小野流云々―道風の震ひ筆といふ諺による

ば、相手にして面白からずと思ひかへして、御斷りを承り屆くる上は、互に意趣ふくみ申さずとの返事を見て、三人の者ども二三度おしいたどき、扨も大事の命を拾ひたりと祝酒など飲んでよろこび、まづ其通りにて濟みけり。其後途中にて逢ふ度毎に何とやら氣味わろく、其上此事誰いふともなく、果し狀付けられて詫事したりとの取沙汰かくれなく、かれこれ心よからず、三人寄合ふごとにこれを苦にして、此比の取沙汰聞きてむやくしき事といへば、我々も左樣におもふ、何とぞして五助を殺す分別は有るまじきかといへば、あれ程の手者なれば、先づ太刀打はとてもかなはじ、とやかく案じ入て、白右衞門小聲になつて言ひけるは、先日の意趣互に少しも殘らぬ中直りに、無榮の振舞に是非呼請け、食類に和へて一服さすれば、骨折らずしてころりとやるがといへば、これに過ぎたる手段なしと、日限をさだめ、御茶進じたきよし五助方へいひやれば、さして進まざれども、行かねば先度の意趣殘るやうなりと心得、忝るべしと返事するに、其日いづれも相伴にて、馳走樣々なる躰にもてなし、後段濟むと心もち例ならず、宿にかへると五躰血筋引て身をもだえ、半時ばかり惱み、血を吐いて息絶えぬ。前廉より醫者もそれとは見ながら、大事の事なれば聊爾に言出さず、不思議なる病とばかり評判し

手者―熟練者

後段―飯のすみたる後に麵類其他何にまれ出すものをいふ

て、其なりけりに野邊の送り、人は煙のたね。一子五七郎幼少なれば本知半分にて跡目立ちて濟みぬ。彼者どもは仕濟ましたりとよろこび、此内證は誰もしらず、過ぎ行く春は夏にかはり、此三人の者は平生兄弟同前にかたり、たとひ如何なる事ありても退くまじきかたらひなしぬ。其日は白右衞門方にあつまりて雜談する次手に明くれは、端午の節句、月代を剃るべし、幸ひ其方家來關内髮月代よくいたすよし、賴むべしといへば、云つけて剃らせけるに、折ふしの夕立しきりに降りて、雷耳のあたりに轟きわたり、はや落ちかゝるかと覺えし時、瀧之進日來雷公をこはがる事人に勝れたれば、このひびきに動顚して、關内まづ待ちてくれよと、半分頭剃りかけしを、慌てて立ちさわぎ天井の板の厚き所はないかと逃廻り、脫捨てし單羽織の有程引かぶり、桑原々々と身を縮め、片隅に倒れ伏したるをかしさ。白右衞門、用助大笑ひして、扨も結構なる御侍、それ〳〵又光りたるはと威しかけて興がりけるに、程なく空はれて後瀧之進這出しを、その頭つきはどこの去荷物を持たれしぞ、扨も臆病千萬なりとおどけたるを、瀧之進蟲にさはり、最前も笑物にするのみならず、卑怯なる侍などいはれ、それさへ心にかゝる人には物のいひやうあり、雷は武邊の外、好きといふ者なし、もし卑怯の穿鑿ならば

去荷物云々―荷持人足の頭つきに似たりとなり

卑怯—原文比興とあり

其方達こそ侍畜生なりと、顔色をかへていへば、座興に思ひし兩人もこの一言に堪忍ならず、侍畜生とは何ぞと刀を取りまはす時、されば過ぎし年熊井五助と太刀打はならずとて、何ぞや女童のたくむ毒藥を以て殺す、勿論我は同心にあらざれども、それを改むれば傍輩の因を空しくすると思ふばかりに默りぬ、何とそのしかたが侍の言出だす事かと、同じく刀を取りまはすに、兩人目を見合はせ、南無三寶、内輪破して、大事の事を人に洩らす惡人と、二人して切伏せ、まづ門をうたせ、心靜かに支度し、路金まで才覺し、直に勢州長島に知れる者ありて立退きける。此事意趣はたしかならずして國中にかくれなし。爰に瀧之進が一子角之丞御暇申上げて敵覘ひに立ち出で、諸國尋ねめぐり、此度は東海道にかゝり、それとも知らず此長島に入て一日逗留するに、彼の二人の者は蘆屋町針立の賢意といへる者を賴みて居しが、今は粮皆無になし、亭主は固より貧しければ、爲んかたなくて門謠、編笠深く冠り、連節に小濱町を通るを、角之丞見付けて詞をかけ、敵二人を薄手をも負はず物の見事に打ちおほせ、此首國の土産にと下人に持たせて、夜を日に繼いで屋敷に歸り、母に對面して箇樣々々と語る詞を押しとゞめ、それは聞くまでもなし、先づ聲を高くするな、扨も父瀧之進をはじめ、白右衞門、用助

先年五助に遺恨有て毒藥にて殺したるよし露顯あり、子息五七郎親の敵は其方ならびに白右衞門、用助と、一昨日討ちに出たり、しばらくも爰にはたまられず、我も諸共にいづくへも退くべしと、其夜の九つ過に又密に家久しき下人一人めしつれ、親子伴ひて立出で、江州醒井の宿にしるべを賴みて、世の憂き住居をとゞめける。扨又五七郎は三人をねらひて、國々殘らず姿をやつして廻り、今は勢州鳥羽に著きて旅籠する宿に一夜を明かすに、障子のあなた旅人の物語するを聞けば、扨も先月十八日長島にて敵打の段々聞くほど角之丞が有樣なり。此上ははや三人の敵二人は相果てたり、殘多き事ながら力なき仕合、さだめて角之丞は本國に歸るらんと、それより引返して又本國に急ぎて行けば、醒井の宿何心なく打過ぐるに、比は極月十三日、家々煤拂とて諸道具大道に積重ねしを取入るゝに、古簾を釣れる貧家に似合ざる鑓、長刀、葛籠の上に挑灯くゝり付け、其袋の紋井筒の内に若松、これは敵の乙見が定紋なると氣を付けて、其隣なる家に立寄り、龜忽ながら此北隣の御亭主は何人にてさふらふといへば、されば主はつひに見たる事なし、伊勢の浪人衆とやら聞き及びたりといふに、いよ〳〵覺束なく、それより辻堂に行きて、小者に持たせし著籠取出だし、身拵へするうちに、小者に、汝は旅人の躰

見聞―檢分の借字なるべし

御自分―貴殿

して見聞して參れと云付けしに走り行き、駕籠をかりたしといふ調子にはひりて、樣躰見屆けてかへり、成程角之丞殿にまがひなしといふに、踏み込んで名乘りかけし時、角之丞は水風呂に入りながらこの躰を見て言葉をあはせ、母親に刀給はれといへるに、五七郎これを見るより、その躰をば討たず、心靜かに支度致さるべしといひ捨てて、表に出づれば、母親浴衣をうちきせ、いさぎよくすべしといさめて、簾の内に見物して、互に汗水になつて戰ふうちに、五七郎刀の目釘はしりて落ちたるに、弓矢八幡運命盡きたりと、差添ぬかんとせし隙間をたゝみかけて擊つを、母親これを見て、角之丞しばしと止め、其方は道をしらぬ男かな、最前此方湯あがりの支度を待ち給はずや、其心底を顧みず心なき仕方と恥ぢしめ、隨分心靜かに目釘をとめ給へと、その間を待たせて、又打合ひけるが、角之丞深入して指三本落されて、ひるむ所に踏込んで大袈裟に討留め、あら嬉しや年來の本望遂げたりと、息をつぐ所へ母親かけ出、さても遊ばしたりと、角之丞が死骸をつくゞ〳〵眺めながら涙をば流さず、誠に我が子ながらも心の剛なる事は、中御自分におとる者にあらず、されども父瀧之進武士の本意に背きたる冥理の程、弓矢神にも見はなされし天罰のがれずして角之丞に報いて、只今御手にかゝりたり、討つも討たるゝも武士のならひ、天晴神妙なる御はたらき、御父五助殿草葉の蔭にても嬉しと思しめさん。爰にてほろりと潸然、我が身は賴みなき者なれば、思ふにまかせぬ憂きに憂きを重ねる事の行くへこそ定め無けれ、角之丞が跡をばよきに弔ひて給はれと、言捨てて、内に入り黑羽二重の羽織を取出だし、これは角之丞に著せんと思ひしばかりにて、いまだ手も通さず、これを道すがらの風厭ひにあそばせと持ちて出でし。此心底忝しと暇乞して、本國に歸るを懇に見おくり、それより濃州關の藤川といふ里の側に草の庵を結びて、行ひすませし心の水のあはれをとゞめけり。

第四　碓ひくべき埴生の琴

過ぎし比越の國の太守に增倉治部大夫と聞えし、同じく家老德澤刑部、ある時大小性役勤めし赤西專八、廣間に傍輩二三人相詰めて居しを呼び立て、ちと申したき事ありと、御居間の前栽の片陰までつれゆき、別義にあらず、只今殿の仰付けられしは、思召す子細あるの條、出崎新五平を討つて來るべき器量撰びて遣はすべしとの事なり、大切の御意なるに、誰と差圖すべき者御自分ならで外にこれなしと述べられけるに、專八承り屆け

ながら、それはいかやうなる越度あつての事にて、この仰付にてさふらふといふ時、刑部、されば拙者も御心入忖りかたしといへば、専八、尤も御自分の御詞を疑ひ申すにはあらざれども、とてもの事に直に御意を承りたきと言ふに、いかにもよき御念なり、さらば御前へ御出であれと伴ひ、このよし申上ぐれば、専八召出され、刑部申付けたる一義首尾致せとの由畏まり入て私宅に歸り、その科はしらねども、武士の習ひ程世に定めなき物なし、今までは互に傍輩のよしみ深かりしかひなく、我が身に思はぬ御意をうけて討つこそ本意なけれとつぶやきながら、新五平所に入て一つ二つ物語して、御意なりといふ詞の下に討ちすまして出づるを、家來立ち騒ぐに、これは上意なり、まつたく當座の喧嘩にあらずと言聞かせ、直に屋敷も取上げられける。移りかはる世の習ひとはいひながら、知れぬは人の行末、哀れなるは此内室、親里は隣國の片陰に日陰の浪人の娘なりしが、新五平親と古傍輩のよしみにて、其身死すべき前の秋より外聞よろしく取りはやして、婚禮の儀式して、世に頼む方なくおはしけるに、思ひよらぬ此次第に驚きながら詮かたなく、このまゝ同じ道にも果つべきと思ひ詰めしに、その身只ならぬ忘れ形見の中々に、一たび是をまみえたく心ひかれて、袖は涙のせきかねしより、奈呉の海を跡

世に頼む方なく―世の中にこれより外頼みとする人なく

まばらや―あばらやの誤か

唱歌―原本證歌とあり

身體濟みけれども―仕官の身となりたれども

に出ながら誰を頼むともなく、比は卯花山を眺め過ぎ、里の垣根に色こぼす雪の高濱はるばると見え渡り、越の舟路もこがれ〳〵し旅の、空定めなき短夜、有明の嶺の麓にやうやう由縁を尋ねけるに、其里の佗しき憂き住居たとへがたなく、今日と暮らし、あすの命も頼みなきまばらやに心地例ならずして二日悩み、取揚婆といふものもなくてつひ生まれけるは、殊更男子にて、なほ果報つたなき身の果と、恨みて效なく月日を送りぬ。此所には物縫ふ女も稀なるに、雇はれて憂き世を暮らす種として、此子成人して今は十四歳、育賤しげながら生付さすがそれと見えて、爪はづれの尋常、俤のやさしきにつけても、ありし世を思ひくらべて母のなげき大方ならず。されども國を出さまに親より賜はりし新羅琴跡付に長國、國宗の大小はなさず、長き夜の折々の手ずさみに組の唱歌をうたひて、諸共になぐさめて、住居せし哀れはかぎりもなかりしが、世は不定の習ひにて、赤西專八少しの過に御前を仕そんじ、浪人となりて四五年さまよひ、漸う此里近き城下に又身躰濟みけれども、此人々の事は夢にもしらざりける。或日傍輩鳥山九郎のにいざなはれ、野がけのなぐさみに出て、この山陰に百舌をおとして歸る細道に、琴八音かすかに音づるゝを松吹く風と聞き捨てて行くに、なほ爪音の近く氣高くて、數なら

ぬ思ひは無くてあれかしと、聲の嵐につどひ來しに、これは合點のゆかぬ、山里にかゝる音信のする事はと、各立ちとまりて耳をかたぶけ、その方を見れば、あやしの竹の編戸のうちなり。いかなる者ぞと覺束なく立ちよりて覗けば、萬長なる女も三十五年には麗しき姿して、東の母屋によりかゝりたる有樣、世を恨み佗びたる貌ばせながら、調べしは尋常ならず、傍に庄之介母の手跡の假名文うつして何となき粧、此美形にあきれて、これは不思議なる者ども、とてもの事に尋ねてみるべしと、御免といひて内に入て萱茗飲みちらして立出で、世にはさまゞのなれ果もあるものかなと、何心なく歸りて、專八庄之介に深く泥み、誰しらず行通ひ、いつとなく執心かけ、其後に念若の誓約堅く、庄之介を城下に伴ひ、母にも扶持を合力し、行末はいかやうとも申上げて、庄之介をも身躰有付くべき心から、他事なく思ひかはして一年餘も過ぎて、母專八をつくゞ〳〵眺めて、あの男は確に御意蒙りて新五平殿を討ちたる男にまがひなしと、餘所ながら先祖をとへば、何年の事共かたるに彌違はず。或時庄之介を近付け、いつは語らんと思ひしが　其方が父新五平殿、尤も上意討とはいひながら專八手に懸けたれば、汝が親の敵にまぎれなし、潔く討つて孝養にすべしといふに驚き、扨はそれとも知らず過しける事

念若―念者若衆の意にて衆道の兄弟分をいふ

何年の事共―何年か以前の事

こそ無念なれ、併ながら自らの遺恨にあらず、主の仰せなれば専八も是非に及ばぬ所なり、もし敵討つべきならば治部ノ太夫殿にこそさふらへ、殊に此年月の厚恩須彌よりも高し、かれこれ私の敵とて討つべき義理にあらず、爰は分別して御覽あれといひもはてぬに、母顔色變りて、とても其方は得討つまじ、前かたよりかくと知らば、たとへば餓死するとても彼が合力うくべきにあらず、其方假の兄弟の契約したればとて、誠の親に思ひかゆる事が侍の道か、よし〳〵我が夫の敵其方が手には懸けまじと、守刀を懐に押込み、駈出で給ふをすがりつき、それ程に思召すならば、私手にかけて本望達し申さんと宥めおきて、其支度するに付けても、假初の事ながらこの二年の契深く、かはせし詞の松に誓ひしも皆いつはりとなり、いとほしと思ふ兄分を手にかくべきか、これを包みて討つべきにあらずと、いつに變りて専八を呼請け、恨めしき貌ばせ、専八見とがめて、何とやら異な有様、心にかゝる事ありやと問ふに、思ひのまさりて涙は袖に餘りたるに猶心得ず。いかなる思にか、語り給へといへば、扨も是非なき次第、拙者は山崎新五平が悴、御自分に覺え有るべし、然れば勿論上意とはいひながら、承るに勘忍ならずと、其時は胎内に宿りゐし事段々語りて、扨只今まで御懇意中々詞に盡されずと、言切りもやらず打萎れたるに、専八横手を打つて、扨も人間の行くへ知れざるもの、なる程手に懸けし事まがひなし、いざ討つて本望遂げ給へと、大小抛出して首をさしのべたるにぞ、庄之介が思ひ一方ならざる至極の所、其有様を何しに討たるべき。御自分にも太刀取上げて給はれと言ふに、哀れ深く見えし時、母次の間にたゝずみ、この躰を見て庄之介を呼び立て、潔き心底殘る所なし、今宵かぎりの事なれば、今までのよしみに暇乞の盃したかるべしと、母のはからひを語りて土器を取出し、自ら持ちて出て、常のごとく夜更くるまで語るに時移り、母も次の間に轉寢の夢見明かして、朝の五つになれども起きず、差覗きて見れば二人枕をかはして臥したるを、油斷者と聲かくれども音なく、不思議に思ひて立寄りても驚かぬに、夜着を取て見れば、専八が心もとより我が背中まで貫きて死したり。母二目とも見ず、同じ枕にこれも自害して果てしを、聞くさへ哀れは盡きず。

五つ―四時

武道傳來記

諸國敵討

卷七

目錄

第一　我が命の早使
　灸居るとても身のあつきを知らぬ事
第二　若衆盛は宮城野の花
　義理に身を捨つるは譽草の事
第三　新田原藤太
　百足枕神に立つ事
第四　愁の中へ樽肴

敵うたで横手をうつ事

第一　我が命の早使

月はかはらぬ昔の空、日に向ふ國の守につかへし磯邊頼母とて勇に色ふかく、春秋の花紅葉、紅閨長時に、いまだ妻女は定めず幾人か翫び、酒婬日々に長じて勤めも自らに缺けぬ。或時おのが家老塚林權之右衞門を呼びて、公用の事について急用これあるの間、伯父春川主計殿へこの書簡早々持參致すべしと周章しく云付けられ、問返すに及ばず支度して、參州吉田に急ぎぬ。程なく著きて主計に對面し、子細は御書中に御座あるべしと差上げける。何事やらんと封切つて披見あり、文の半過ぎて驚ける氣色にてそのまゝ懷にをさめ、權之右衞門が貌を打眺め、何と國にかはつた事はなきかといへば、畏つてまづ殿樣には御機嫌よく御座なされまし、三俣修理助殿の跡目の儀甥の内匠殿へ仰付けられて、まづ家中まで悅び、扨は城下の町はづれに童ども集まりて土遊び致しけるに長五寸ばかりの朽木を掘出だし捨置きたるを、極樂寺の長老これを見付給ひ　行基の御作の觀音にて、寺の傍に假堂の奉加を勸めてしつらひ、これへの參詣國中群集仕ること中々夥しく、此比喧嘩これありけれども、それはしづまり、旅芝居二三間くだり、水

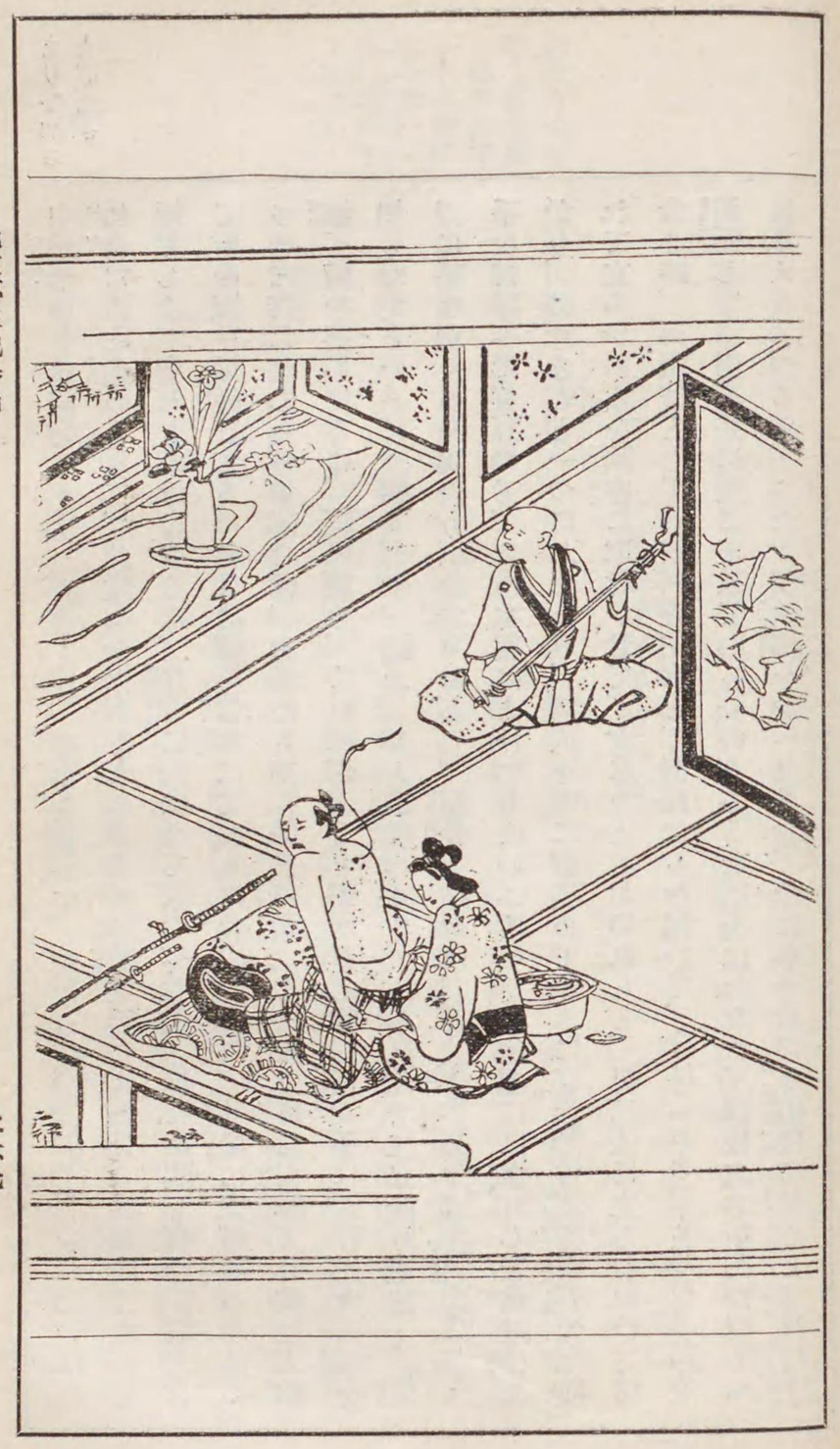
茶屋八幡の前より立ちならび、京大阪のごとく御國の賑ひ申すばかりなしと、何心なく語れば、主計一圓合點のゆかぬ貌して、いや餘所の事は聞きたうなし、頼母が屋敷にかはりたる事は無きかと尋ねしに、されば御當代になりて諸國御簡略に付き、御自分樣七年以前に御越の時ありし泉水も内證舟遊山の聞えよろしからじと、それをも潰し、跡には蘇鐵山をいたし、其外の榮耀道具皆減少いたし、只今は結句大旦那の時の借金まで相濟まし、世間御勝手共によく罷成り、拙者まで大慶に存ずるといへば、主計重ねて、別義に非ず、頼母わかき者にてさぞ其方が世話に成らん、京より美女呼寄せし事、此比江戸參勤の衆の物がたりにて聞きし、親ははやく果て、誰あつて諫言すべき者、其方より外になしといふ時、權之右衞門、御意返し申せば慮外がましく存ずれども、尤も旦那年若ながら勤の缺けたる事なく、交りも御家中においてはいづれに劣り給はん、されども御祝言いまだこれ無きによつて、私はからひとして此比京より女呼び下しおきぬ、其上の御氣遣は、私罷在るから少しも遊ばさるまじと、何心なく語りし時、主計氣色かはり、膝立直し、其方は近比利口に物言ふ大膽者、これ〳〵此狀を見よと、抛出しけるを取上げてみれば、何々、此者重罪ありといへども、當地にて手討いたせば世間やかましく罷成るにつき、其元へつかはす事、早々御成敗あそばし給はれのよし。はつと驚きたるを、主計、何とそれは屋敷に別義なき躰か、其段々委細に白狀すべしと、刀に手をかけて白眼つけし時、權之右衞門少しも騷かず、御紙面の通り眺め奉り、覺悟仕る上はいか樣とも御はからひにまかすべし。殊更御手討に預らば本望の至り、別に子細申上る事曾てこれなしとさしうつぶきて居るを、主計重ねて、樣子なきを討てとは申し越すまじ、必定其方に越度あるにまがひなし、子細をいはずば只今討つがといへば、成程御討あそばせ、元より一命をさしあげての勤めなれば、何しに前後を顧るべしと、いさぎよき氣色、主計しばし分別して、よし〳〵、右より誠に討つべきと思はば、此狀見するまでもなし、其方年來の舊功何の過か有るべしといへるに、權之右衞門涙を流し、誠に磯邊の御家久しく打續き、私不肖なれども代々執權役相勤めしに、最早此度御家の滅亡なり。この御心入と存じたらば、御手討に逢ふまでもなく鎖めやうありしものを、口惜しやと男泣、主計見て、さぞ有らん、最前より思ひしにたがはず、あたりに人もなし、子細語るべしと御尋ね、中々申上ぐるも御恥しく、憚り多く存ずれども、私女房友澤七郎平娘、去年御存知の通り祝言致す處に、當八月の中旬より頻に暇を乞ひし所以を達て承るに、勿躰

右より—はじめより

なくも旦那此女に御心をうつされ、貞女の道を守らんとすれば主命に背くこのつらさと、さめ〴〵と申せしを、何んぞ主命を夫に換ゆべしや、いかやうとも御意に從ふべしと、一先なだめ置きぬ。必定これを思召し詰められて、私を無實の科におとし給はんとの御はかり事、此上は人非畜生を主とも存ぜず、尙又二君に仕ふべき心底にも非ず、はやく首打つて給はれと、前後思ひくらべし心のうち、主計も横手をうち、やう〳〵に宥めて、長屋の一間なるにいたはり入れて置きぬ。その明けの日呼出されしに、權之右衞門大小羽織のみ殘して何處へか行方知らずなりける由申上げければ。主計呆れて、尤も不便千萬なる事に思はれ、賴母が心底憎き仕かた、此上はおのがまゝにさせて思ひ知らすべしと、權之右衞門が大小ならびに羽織をもたせて使者をつかはし、申越さるゝ通り成敗したる證なりとて贈りければ、賴母悅ぶ事限りなく、されども屋敷中にはこれをかくしおき、其夕權之右衞門が妻に灸なされたきよしにて、たび〳〵の使來れども、再三に及び辭退するにかなはず、奥ふかく召され、口說きかゝり給ふに、右より合點せざれば幾度仰せられても此段は御免なさるべし、殊に權之右衞門が留主の内暫くも人の思はくありと、立歸る所を引きとゞめ、扨は權之右衞門に貞女の道を缺くまじきばかりならば、つゝむに

あまる思ひより、伯父主計方にてはやく成敗して、そのしるしはこれ見よと、大小羽織を取散らしければ、此女氣も魂も消々と、つながぬ玉の涙せきかねながら、この心をつゝみて、扨は心にかゝる雲もなし、いかやうとも御意には泄れず、然らば私御心にかなふうへは、向後御本妻を祝き給ふ事は御とゞまり遊ばすかといへば、それは〳〵、世上のおもはくかへり見るやうな淺き事にあらず、其方さへ渝らずばと、打寛ぐ所を賴母に飛びかゝり、夫の敵のがすべきやと、脇指を拔く所を、捉つて伏せても男のきたなさは、今の一言に似合ぬ仕かた、只今さしころすが承引せまじきやと、いらざる所に念を入れて問返すに、女房しら〳〵と打笑ひ、やれ侍畜生め、たとへ身はづた〳〵になるとても其方に身をまかすべきや、口をしくもやみ〳〵と御手前が手にかゝりて、夫婦共に殺さるゝ事の無念やと、聲を立てて歎くこそ理なれ。賴母なほ〳〵立腹して、このまゝ殺すもをかしからずと、庭前の櫻にしばり付け、手鎗提げて弄殺し、目もあてられぬ有樣なるを、いまだ息のかよふうちに内庭の片隅に堀埋められ　姿の花は根にかへり、あたら朽木となりぬ。隱すより顯はるゝはなく、此事親里友澤七郎平も傳へ聞きしかど、其比不慮の越度ありて、改易に遭ひて備前ノ國に立退きけれども、妹娘を修理殿の

姿の花は根にかへり―千載集「花は根に鳥は古巢に歸るなり春のと



まりを知る人ぞなき

中小性増井兵藏にめあはせ置きしが、此事を聞いて、頻に又兵藏に暇を乞ひしいはれ如何なると尤められて、此段々かたりて女ながら姉の敵を討たん願ひ、兵藏聞くよりも賴もしく、少しも氣遣ひするな、其方にかはつて討つべしと、俄に御暇を貰ひ、浪人して折を窺ひて覘ひ寄る。其日は賴母當番にて歸るは夜の四つ半、外堀に夫婦待ちかけてさきに持たせし挑灯切落せば、あやめも知らぬ五月闇、この太刀風に周章て若黨三人惣堀へ轉び落ちけるに、賴母驚き、これは何者ぞと聲かけし時、汝が手にかけし女の敵を知らぬかといふに、物々しや、鎧おこせと取延べるを、ふみ込んで二尺餘り切落され、刀に手をかくるを馬より引きずりおろし、胴骨を踏付け、やれ女ども來つて敵を討てと、手を持添へて首打つて、さあ本望はとげたりといふ所へ、最前堀にはまりし若黨這ひあがり、のがさじと一つにかたまり、兩人を中に取籠めて戰ふに、兵藏は早數多手負ひ、疲れて立ちかぬるを駒寄に取付かせて、女なりともおのれらと、男二人に立ちむかひて切合ふ時、兵藏聲として南無阿彌陀佛と打倒れたるを聞いて、今はこれまでと思ひさだめ、切死して、兩人共に爰にて果てぬる心のうちこそはあはれなれ。扨權之右衞門が行くへは見えざりつるが、ふたゝび故郷をかへり見ず、今は小田原の片山陰に發心して行ひすまし、たま〳〵城下に出て托鉢せし時、此沙汰つたへ聞きて墨の袖を絞り、いよ〳〵三人の菩提をとぶらひける。世のことわりせめて悲しきものがたりにこそ。

御侍みやぎ野―古今集「御侍み笠と申せ宮城野の木の下露は雨にまされり」

第二　若衆盛は宮城野の萩

古歌に聞きし御侍みやぎ野の、萩山勝五右衞門といへる男、久しく浪人にて此里にねぐらの鳥の尾羽打ちからし、此身の果のなれる二人の中に勝之助とて、流石に我が子程ありけるよと、姿の花を思出に眺めくらしつ、殊更諸禮の家として指南に違あらず。同じ世を佗びし浪人田越辨右衞門と念比に昔の全盛を語合ひしに、勝五右衞門衰老して自から弱り、はかなくも臨終の折から、勝之助を辨左衞門に吳々賴み置ける一言忘れず、幸ひ千海右衞門殿家老屋島十郎右衞門に日比出入りければ、勝之助器量勝れたるを言立て、旦那へ御草履取なりともと願ひしに、右衞門元來小姓御好なれば、よき次手を以て、其筋目たゞしき美形なるよし申上ぐるに、早速召出され、御寵愛かぎりなく晝夜御側をはなれず勤めしに、傍輩葉田川九郎治、勝之助目見えのはじめより戀ひ惱み、度々文通に搔口說きぬれど、勝之助御目鑑を守り、御心底は忝しと、樣々言宥めつかはしけるを肯か

ず、太刀さきにて本望達せんと言越したる明けの日、御膳あがりて勝之助雉の間を通る襖の陰より九郎治立出で、子細は覺え有るべしと切付けしを抜合せ、二打ち三打ち受流して、九郎治を水もたまらず泡となしぬ。手ばしかく仕舞ひ、直に辨左衛門宿に歸り、箇樣々々と段々語りければ、我が息の通ふうちは少しも氣遣ひなる事なしと、まづ奥の一間に影をくろめし所へ十郎右衛門はや駈著け、勝之助はこれへ參りたるが、定めて子細はきき給ふべし、元我が取次の者なれば隨分贔屓致す心底なれども、他所へ退くべきにあらずと穿鑿極りて我來れり、いよ〳〵勝之助は行くへ知れざる分に申しおかん、言ふに及ばざれども、御いたはり頼み申すと云捨てて歸り、辨左衛門へも歸らざる由いへども、右衛門殿合點せられず、尤も九郎治兄弟すら無き者なれば、誰有て敵討つべき者なし、主從のよしみに、天地の間を尋ね出して成敗すべし、幸ひ十郎右衛門取次ぎたる者なり、急度追手をかけて搦め出せと、氣色かはりて仰付けられ、十郎右衛門分別こゝに定めかねしが、旦那此内證御存知なきゆゑにかゝる憎しみ深し、なまなか勝之助を伴ひ出て、九郎治不義の躰を申上げなば、却つて褒美有るべき者なり、もし承引なき時はぜひなし、諸共に切腹すべしと、分別きはめて辨左衛門方へ行き、樣子いふに合點せず、

外の濱―原本ほかと傍訓せるは誤なり
人置婆―口入宿なり

勿論御心底疑ひ申すにあらねど、もし旦那それを承引なされざる時は勝之助が命はなき物、然らば私一分立たず、こゝは御分別なされといへば、十郎右衛門、とかく此分にては濟まず、屋敷へ歸りて何を以て拙者一分も立たず、貰ひかけしは我、給はらぬは御自分、打果たさねば濟まぬ事と、言ひかけられて退かず、切り結びしに、勝之助其時ははや緣ある寺に預けられ、誰有て助太刀に出合ふ者もなく、老躰力なき辨左衛門を心やすく擊つて屋敷に立歸り、其段々語るに、今は勝之助事脇になりて、辨左衛門兄弟あるべし、十郎右衛門用心致せと、家中心地安からず、右衛門殿かさねて、領地の外の濱へ急ぎ退くべしと仰付られ、忍びやかに有樣をやつして送られける。こゝに辨左衛門弟辨藏同じ家中三形式部殿に勤めしが、此事聞きもあへず宿に歸り、ねらひ支度する處に、十郎右衛門が召しつかひの下女暇を出され、辨左衛門が宿にちかき人置婆がもとに集まり、下郎の筋無き者にて内證取沙汰し、外の濱の某處とやらんへ立忍ばれたると、語るを聞て悅び、立出づる所に、勝之助傳へ聞き、今は身顯れて走り來り、もとより我が身のがれず、御供申さんといふ所へ、また辨藏日比目がけし浪人宇野彦之丞、正木宅平、篠井門藏、林折右衛門、三栖江右衛門各駈著け、此度の御事と支度して、以上十三人外の濱に

用害―要害の宛字、用心

何事と―原本と文字なし

急ぎ、聞きし處に著きて樣躰見るに、嚴しく用害して、大藪なる惣堀の内に門々かためて、番の者數十人、内より假初に出入る者も檢め、そこ〳〵に氣を付けたる有樣、たやすく討たるべきとは見えず　先づ側の家をかりみな〳〵身拵へ、長旅の疲勞しばし骨をやすめ。こよひの四つ半時南の門より取りかくべしと相談を極め、心を一致にして、空行く月に古里を眺めやり、哀れや知れぬ命など口ずさみて竝居たる時、庭の枯垣のもとに人の呻く聲頻りなるに驚き、何事と立出て見れば、勝之助自ら草葉を朱の血汐になして伏しぬ。これはいかにと見るに一通を殘し置きぬ。はじめ辨左衞門殿の御恩滄海より深く、十郎右衞門殿の一言高山より高し、然れば何れに向つて弓をひかん、されども深き方に恩を謝せん心ざしにてこれまでは御供致し、憤りを表すのみなり、各首尾よく本望を遂げ給へ、心底紙上に盡し難しと、書留めし心の内皆々感涙ながして、あたら姿の花を土にかへしぬ。はや時分よしと言ふ程こそあれ、手毎に松明をふり立て、門前により擧つて聲かけしに、今は脫れぬ所と尋常に門をひらかせけるに、はや軒端に挑灯數をならべ、其身は著籠に天卷し、牀几に腰うちかけ、長刀を右手につき、家の子それ〴〵の覺悟すがた、兩方に取廻し、木蔭々々に篝火を燒立て、恰も白晝のごとし。辨藏も今は

鹿兒島―原本籠島とあり

獨辨―一人分の辨當といふ意か

十二人心靜かに門に入り、雙方互に立別れ、門をしめさせ、神妙に名乘合ひて切結ぶと土煙を立て、以上四十五人相鬪ふ太刀音、近所の者ども驚き出で、隣鄕の者はこの篝火雲にうつろひ火事と心得、駈著けける程に、百姓數百人此堀を十重百の重にとりまき、それにはあらぬ見物と立ちかさなりて、膽をひやして目を駭かす。すでに擊たるゝ者二十七人、其外も半死半生に血まよひける所に、辨藏小高き所にあがり、はや敵を討ちおふせたりといふ時、門をひらきて鎭めよと、大勢のぼり梯をもつて分けける。未聞の敵討なりと語り傳へておびたゞし。

第三　新田原藤太

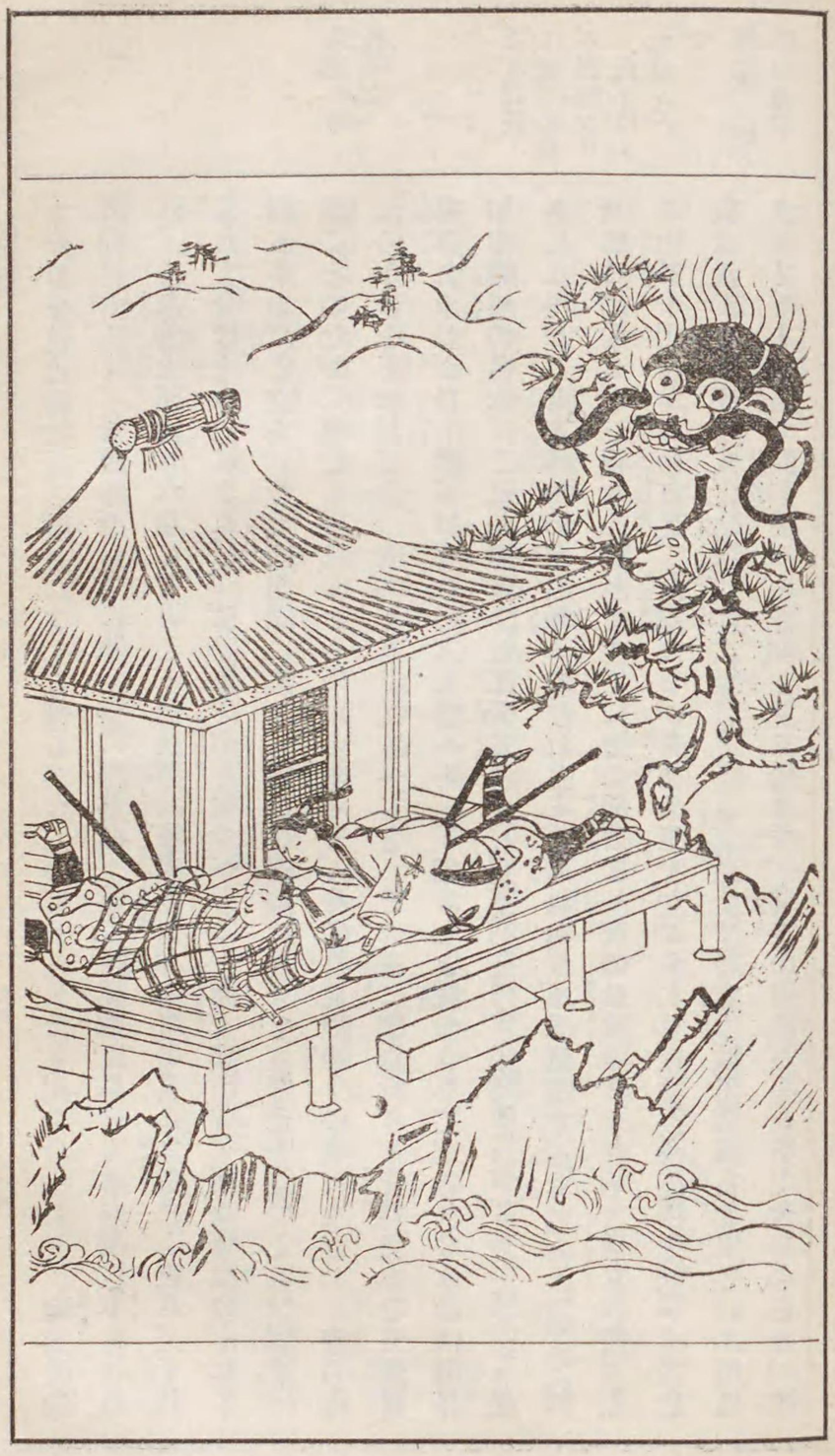
昔日薩摩ノ國鹿兒島にて諸役人宿番を勤められし御茶屋の藤書院といふ處を四人して御番せられしに、浮橋太左衞門、卷田新九郎、此兩人は宵から夜半まで休みて、それより明くるまで勤むる番ぐりなり。沖浪大助、中辻久四郎、此二人は行燈の光をうけて獨辨をひらき、小者に煎茶などはこばせて、淋しさをまぎらかし、夜半の時計待ちかね、殊更春のならひ　長雨、やめば間もなく降り出し、蛙の諸聲耳にひゞきて目覺しの友となり

出來出頭―俄に權勢を得たる者をいふ
是沙汰―評判高きこと
語りたろ―交りたるといふ義
果し眼―人を切り殺すべき眼付

ぬ。折ふし天井板に音ありて黑き物落ちかゝる處を、大助脇指を拔打ちに、何かは知らず少し手ごたへせしに、燈火よせて見れば、その長一尺四五寸ばかりの百足を二つに切りはなち、いまだ動くを取りあつめて塵塚に捨てさせける。久四郎横手を打て、扨も早業、古の田原藤太が勢田の橋は磯なり、沖波殿の今宵の御手柄眼前に、これは〳〵と譽めければ、大助も興に乘じ、天晴此男古今居合の名人なり、早い所御目にかけたと、さつと笑うてすましける。其後大助内用ありて町筋に出しに、南江主膳といふ出來出頭に出合ひけるに、大助を見かけ、これ藤太殿、何かたへの御越なるぞと申されし、某は大助と申すなり、藤太と官位は致さぬと申す。主膳重ねて、此程の百足の首尾家中にかくれもなき是沙汰、田原藤太殿と云捨てて通られける。大助宿に歸り、覺悟して相番の中辻久四郎方へ行きて、前夜の義は當座の一興にして武士の高名になるべき事にはあらず、其通りの義を方々取沙汰せらるゝ段、日來別して語りたるかひなし、今日途中にて主膳、藤太と申されし事心外なり。これみな貴殿の披露なるべし、此義堪忍ならずと、果し眼にて腹立。久四郎、少しも駭く氣色なく、拙者の申分一通り聞給ひて後、成程御相手に命は惜まじ、申し懸けらるゝからは覺悟なり。しかし此義において日本の神ぞ他言

御通りと―原本と文字なし
白癩―南無三寶といふ類の感詞

は申さず、外にも兩人同番あり、此衆中寢間にて樣子を聞て、自然沙汰せられし事存ぜず、此久四郎は申さぬなれども、其夜一所に在りしが不祥なり、いざ心底に任せ給へと、身拵へして立ちけるを、大助引きとゞめ、只今の理至極仕る。此段は免し給へと、それより直に主膳屋形に仕掛け、案内申せば、奥座敷にて鼓の音、山姥の曲舞半ばなれば、しばし返事はなかりき。大助玄關前に立ちながら、其謠につれて謠ひしまひぬれば、主膳立出で、御見舞めづらし、さあ〳〵座敷へ御通りと申さる。大助はしり懸り、藤太が太刀さき覺えたかと、一文字に切付くれば、白癩これはと拔合せ戰ふ所に、主膳弟善八鎧の鞘をはづしてかゝるを、引外して踏込み切折れば、脇指拔かんとする隙を飛びかゝりて擊てば　主膳後より疊み懸けて擊つを、其鎧を取直して突倒し、兄弟ながら止めまで刺しける時、家來四五人拔きつれて打つてかゝるを、二人突伏せ、一人大袈裟になるをみて、此勢ひに皆々逃去り、太刀おし拭ひ心靜かに立退きける。此事大守聞召され、いかなる意趣と穿鑿なかばなる處へ、久四郎登城して、このたび主膳事段々箇樣々々の次第と、はじめの通り申上げ、それにつき拙者快からず、切腹仰付られ下さらばと心底言上すれば、主膳が仕かた侍の道に缺けたる惡口なれば、跡目を潰せとの御意にて、其



方が申分近比神妙なる慣り、少しも憚る事なくいよ〳〵恙なく相勤むべしと、御褒美の御詞かず〳〵、久四郎面目身に餘り宿に歸りぬ。扨主膳屋敷は思ひよらぬ事に取上げられ、子息善太郎當年六歳になりし、母親諸共家來筋目なる者の里に立退きし哀れ。年月累ねて今は十六歳になれば、ぜひ親の敵を討つべしと、潔く立出で、國々尋ねめぐれど四五年あだに立ち、此度は四國に渡り、阿波の磯崎に著きて、萬景眺め盡くされぬ氣色誠にそのむかし西行も爰に心をとめたる緣とて、その具足の物今に殘れるよし、旅の疲れのうきを忘れがてら、立ちよりて見るべしと、その庵に尋ね行き、住持にあひて靈寶拜みたきねがひ、然らばそれへ入り給へと、子細らしき貌つきして、あれなる松は御存知の磯崎の名木、これが西行の近江菅笠、この煙管筒が富士を眺めに行かれし時のなり、あれに掛かりし友禪繪の布呂敷ふるけれども、破れぬが不思議なり、信しやかに語りぬ。秋の日のならひ、程なく暮れてすぐにその假寢に一夜の袖枕、夢ともなく現ともあらず、その長十丈ばかりの百足、血亂なるが夜光の玉をかゞやかし、善太郎が枕元にたゞずみ、我は汝が生國棒ノ津の片山陰に住む者なり、其方がねらふ敵は攝津ノ國古曾根といふ所にあり〳〵と御告、御形消ゆるが如く見え給はず。其夜の明くるをまちて舟をもとめ、津

具足の物―携帶品

近江菅笠―江州の名產不思議なり―此下にと字脫せにしや

棒ノ津―坊ノ津の寃字

の國に急ぎて窺ふに、先づ其村の小家に立ちより、もし西國方より爰に居住する者はなきかと尋ねしに、あれに見えたる主こそ西の果よりおはせし浪人なるよしと、いふにまかせ立ちより、樣子きくに人音せず、あやしやと立ち入て見れば、年比四十餘の女火燵の櫓に腰をかけ天卷し、扨も勢なや、聲を立つる力もなく、絕え入るばかりなる體、空よりおろせし繩に取付きたるは、產をする有樣、誰がこれを介抱する者一人もなし。何かはしらず不便につれて座敷にあがり、腰をかゞへてやれば、詞をかくるまではなく手を合せて、さても忝しといふ聲の下より產みけるに、氣力まさりてかひ〴〵しく、勿躰なく御手に懸けんやと、みづからはや湯をあびせながら、どなたさまも存ぜず、只今の御心ざしのありがたきにつけても、我がつれあひは由ある西國の人なりしが、不慮の事ありてより此國にくだり給ひ、うき住居のなかにも惣領の子出來たるをたのみにせしかひなく、親仁ははや七月前に果てられ、ありたきまゞに日を送り、此忘れ形見の出來るはおのが妹にあらずや、それをもかまはず、不孝をかへり見ず、剩へ親の百ヶ日たゞぬうちより芥川へ殺生のみに日を暮らし、罰當りめがと語るに、扨は太助は果てて其子なると知れり。かさねて幾歳ばかりといふに、もはや十九、器量人に負けず、親仁の名

どなたさまも存ぜず―どなたさまかも存ぜずの意

をかたどりて大七と申す、けふもこの寒きに襦袢一枚になりて、親の祕藏の百足丸といふ大脇指をさして川狩にと、問はねど子細をかたりける嬉しさ、今生まれしは女子なれば、まづは敵の種はつきぬ。暇乞して出れば、數々禮をいひて送り出ける、しらざる事は力なし。それより芥川にいそぎけるに、天神の森にて名のりかけ、大七を見事に討て歸りける。

第四　愁の中へ樽肴

往古三州に小見山惣左衞門とて物頭役を勤め、萬に理屈がましく、武を高く振ひ、付屆を第一に覺えたる男、傍輩深谷彌惣子息祝言の祝儀として、珍しからぬ鹽鯛、柳樽、若黨與四兵衞に口上いひつけて遣し、その戻り足に岩平德内へ御娘子御死去の悔申入れ、御返事に及ばず歸るべしと、使請取て行くに聞違へて、彌惣所にて弔ひの悔云捨にして走り出で、それより德内方へ行きて、樽肴をもつて目出度といふに家來合點せず、これは門違ひにて有るべしといへば、無調法千萬に、成程箇樣に承りたると達て斷るにつけて、旦那にかくと言上ぐるに、それならばまづ留め置けとて、使をかへしぬ。扨また彌惣所にては祝儀半に忌々しき使、亭主氣にかけて、直に惣右衞門方に行きて、最前は格別の御使、いかなる思召ぞと苦々しくいひ出せば、惣左衞門横手を打て、近比迷惑、德内方への使の通りを云分けたるに、彌惣かへつて氣の毒に思ひ、この類の事おほし、かならず使の者は御免を蒙るといひて歸りけれども、また德内思はく、かれこれ憎き奴と、與四兵衞呼びつけて手打にせぬばかりに呵られけるを、もはや首を擊たるゝかと、脇指ひねくり廻し、慮外面に顯れたるに、たまりかねて拔打にするを、丁とうけて切りむすび、惣左衞門が小鬢にしたゝか手を負はせながら、かなはじと逃出で、其隣屋敷里鐘郷左衞門長屋に駈込み、子細かたりて賴みけるに、此由郷左衞門にいへば、隨分いたはりて匿ふべしと、疵をば内緣ある外科にかけて養生させける。惣左衞門も門まで追かけ、正しく爰に駈込みしかども、家來を他の屋敷へ切散らす事を遠慮して、先づ内に歸れば、頭の疵けしからず痛み、之を惱みて公儀を罷めて居しを、家中の取沙汰よからず、家來に斬られたる淺ましと云ひはやらすを、壁に耳有て、之を惣左衞門に告げたるに、此上は諸士に面を合すべきに非ず、畢竟彼者を貰うて討つべしと、使をやるに郷左衞門一圓承けず。再三の使に、これは各別の駈込者の事なれば、いつまでも了簡賴むよし言ひた

成程―確に斷る―理由を述ぶること

壁に耳―諺

返事しきる——斷然返答する

るに、天地は動くとも渡すまじきと返事しきるに、このまゝにて止めば尙々恥辱かさなり、今は是非に叶はず、押付けて貰ふべしと先立つて狀を付け、追續いて若黨三人召しつれ、死裝束して玄關に入ると、かねて覺悟の者ども立合ひ、鄕左衞門家來四人討たれし時、自身手鑓の鞘はづして二人突倒す働きのうちに、はや與四兵衞を引出し、首を打つを見るより、惣左衞門を突き伏せ卽座に切腹して、あたら侍二人相果てけるに、鄕左衞門が一子彌七無分別に此場より行くへ知れず立退きしが、越前敦賀に父鄕左衞門が兄あるに行きて年月を送りぬ。然るに惣左衞門果てし七月ありて生れたる子專太郎、成人して諸國をねらひに出でし子細は、互に親と親相果てたる上は意趣なしといへども、彌七立ち退きたるに、これを敵と脇より取囃すに、自ら敵を打ちに出ざれば一分たゝず、方々尋ね廻り、それともしらず敦賀に來り、聞けば里鐘の同名あるをふしぎに、樣子窺はんため此屋敷に忍入り、濡緣より簀子の下に隱れ、一間なる下に一夜を明かす合點して身を縮めて窺ひぬ。爰に彌七從弟娘に美女ありしが、緣遠く十九の秋まで獨丸寢の出來心して、彌七に度々文を通はせども、曾て之を取上げざるを恨みて、今や命を捨つべしといふに不便は增さりながら、それとは無しに宵めんと思ひ、今宵密に忍び給へとつぶ

戀慕をはれ

やくに悅びて來り、此比の物思ひ、さりとて心强しなど戲れけるに、彌七兎角の返事なく、こなたの思召の通りに隨ひたくはあれども、我に思ふ子細あり、之を語らん爲めに招きたるなり、之を聞分けて給はるべし、我もと少時も爰に居るものにあらざりしに、過ぎし年此段々の首尾ありて、苦しからぬ所を何の思案なくたち退き、意趣殘らぬ事に敵となり、彼の者の一子我をねらひに出たる由、然れば明日にも相果てし時は、末もとどかぬ事に憂目見給はんもよしなし、若又このまゝ存命るとても、一たび敵に逢はざるうちは、枕をかはす事せまじと誓願を立てたり、奧の首尾もいかゞ、はや歸り給へといさめける心の中いさぎよしと思ふ時、娘涙を流して、とても承引なされぬ上は分別極めたりと、懷より剃刀取出して危きを、とどめて立噪ぐ時、專太郎此心入を感じ、緣の下より彌七々々と聲かけたるに興を覺し、何者ぞといへば、惣左衞門が一子專太郎なり、對面すべしといふに、疊をあげて覺悟すれば、まづ座敷へあがらぬ先に下より大小を渡し、其心底にあらず、元より意趣なき事ながら、世間の手前にかく身を碎いて、覘ふといへども、其方今宵の心根、是程の戀に、我に廻合ふべきを大切にして潔き振舞に、もはや遺恨殘らず、一度武士立つべきとも思はず、互に戀慕をはれ給へと、其座にて髻切つ

給へ―戀慕の念を晴らし給へ

て出たるに、彌七も之を感じ、一夜は比翼の契をなして執心を晴れさせ、二念をつがず發心して、專太郎が閉籠りし嵯峨の片庵に尋ね行きて、諸共に父の菩提をとひけるこそ殊勝なれ。

武道傳來記

卷八

諸國敵討

目錄

第一　野札の煙くらべ
　　身は一つを情は二つの事
第二　惜や前髪箱根山嵐
　　涙の時雨に木綿合羽の事
第三　播州の浦浪皆返討
　　雪の夜鶏思ひもよらぬ命の事
第四　行水で知るる人の身の程

伊賀の上野に打納めたる刀箱の事

無常野―墓原
毘屋―火屋にて火葬場をいふ

第一　野机の煙くらべ

石火電光、秋こそ物うきはじめなれ、嵐にもろき梢の一葉ちりて、丹波の峰別るゝ横雲の朝、無常野に白布の幕うたせ、御駕籠物靜かに毘屋に入れ奉り、いづれも無紋の袴しほれて儀式に燒香ありし時、三十あまりの美男兩人一度に立ちて香箱の蓋をあけ、前後をあらそひけるは歴々の侍、外より見ぐるしかりけり。一人は國見求馬、今一人は猪谷久四郎とて、此二人は大殿の御物あがりにて、祿も同じく千石の光を顯し、世に榮えける。此度の御死去に兩人共に御供申す志、御遺言に堅く止まるべきとの御事なれば、思極めし命をながらへ、若殿樣へ一命をさゝげて、御奉公を相勤むる心底いやしからざる者どもなりしが、人には意地といふ事ありて、年比互に武をあらそひける。殊更此度の首尾兩人共におとなしからずと、年寄中の差圖にて香爐二つ出して、求馬久四郎前後なく御燒香を濟ましぬ。此上に何の子細もなかりしに、久四郎立ちさまに袴の裾を踏みて、晴れがましき所にして轉びけるこそよしなけれ。求馬家來何とやら笑ひける有樣に見えければ、久四郎せき心より又最前の燒香の遺恨に心をなし、三昧はなれて福智山の入

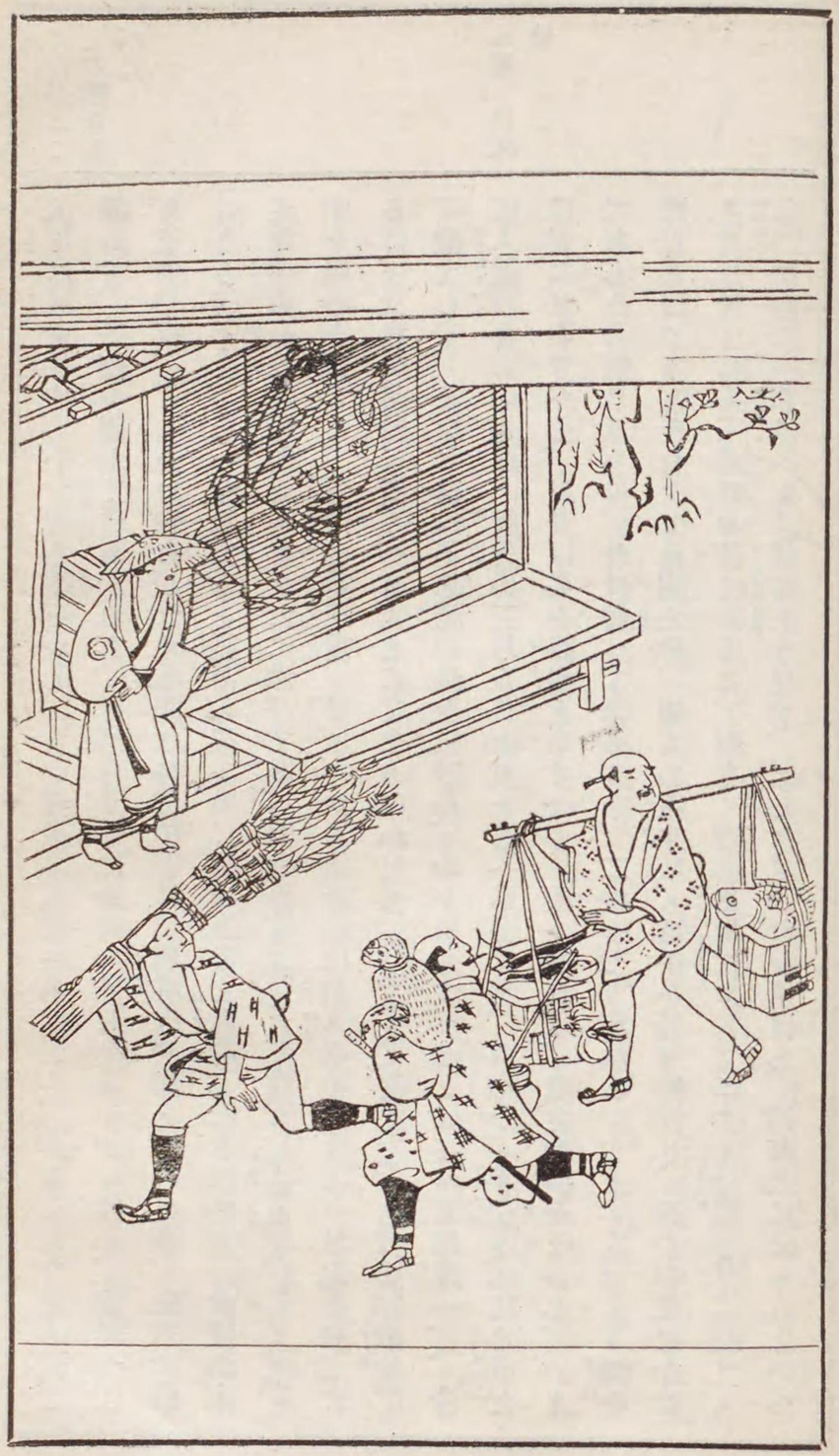
口にて求馬を討つて、直に何國をしれず立ちのきぬ。折ふし惡く此事よろしからぬ沙汰して久四郎を惡みける。求馬子供は龍之助とて十一歳、其次を虎之助七歳になりて童心にも親の敵を心がけける。それより三年過ぎて兄弟御暇を申請け、母親にも泪の別れして、家久しき下人に大木角右衞門、今津文吉、此二人付添ひ、旅のはじめの國めぐり、いつ會ふべきも定めなく、年月かさね尋ねけるに、きのふけふの心に暮れて、それよりは九年の憂き事を明かし、龍之助は二十六歳、虎之助は十九の冬のすゑに、敵の久四郎事出羽の庄内にしたしみ有りて身を隱すのよし、ほのかに知らせける者有て、又都より打立ち、其城内は憚り有つて、領境の里に人しれず借宿して、角右衞門は量鹽を賣れば、文吉は葉莨菪賣りぬ。龍之助は虫喰齒の妙藥をうり、弟虎之助は小間物賣の負箱に編笠かぶり、屋形町をまはり、しのび〳〵に敵の在家を聞けども、今に知れぬ事を歎き、或時淋しき町はづれにさしかゝり、夕ぐれ急ぐ春の名殘に、心もなき雨ふりて軒づたひに歸るに、花山の酒機嫌なる奴、薄色櫻をあらけなく手折り、手にかざして歸る醉の貌つき、春の木の間の入日のごとく照りて、眼に角を入れて往來に鞘あてをして噪ぎ來るこれかや春の物ぐるひと、人みな恐怖をなして蔀門口を鎖してけり。虎之助もかゝる處

眼に角を入れ―恐しき眼付をなす

に來合せ、さながら男の逃げられもせず、望みある身の由なき所にゐるも難義と思ひしに、下見世あげて簾のうちより二十あまりの女房やさしく、さりとてはあぶなし、こなたへ這入り給へと、戸さし明くるを嬉しく、内に入りて此難をのがれ、しばらく爰に休みて内證を見しに、草ふかき宿ながら火燵に紬の紫ぶとんをかけて眞綿引き、矢筈のもとに伽羅割の鉈などのありしに、何とやら此女奥ゆかしく心を付けしに、みよしの染めの著物に前結の帶の惡さ、只者とは思はれず、立ち別るゝ事の惜しく、幾度わらんぢの緒をしめて隙入れけるに、六十ばかりの老女煎じ茶わかして差出し給はるこそ嬉しけれ。すこし亂れて可笑き事いふべき口つき見て、彼の女姥さまといひて差合をいはせざりし。この利發尙又かはゆらしき面影を見そめ、明の日きのふの禮にもてなして、色ふくみし匂袋を參らせける。その後は自ら親しくなりて毎日音信けるに、姥御の留主の事もありて、好き物語りして歸り、いよ〳〵譯もなく心を通はせ、いつとなく老女の見るも恥ぢず、面白づくの念比をかさね、ある時女戯れて、獨笑ひの人形あるべし、慰みに見せ給へといふ。あらば何惜しからじ、それは持たぬといへば、小間物賣の持たぬとは、我取出すと箱を開くれば何もなく、大脇指をこしを見付け、そなた樣を最前から世の常の商

こと

大脇指こをしを―をこ



しはひとこしの誤なるべし

人置―口入婆

人とは見受けず、いかなる事ぞかし、女の無用なる尋ね事ながら、かりそめながら契を籠めて、子細を聞かではおかれじ、先づ自が命は貴様へ参らせおくからはと、義理つまり至極の所、この上は包みがたく生國は丹波の者にて猪谷久四郎といへる者、此所に隠れゐるのよし、それ尋ねぬると語りも果てぬに、それこそ私存じたる事あり、此國の家老衆柳田長五左衞門と申すかたに忍びて匿へおかれ、出崎といふ處に下屋敷ありけるが、中々用心きびしく、外門二重三重、番所、かりそめには出入なりがたし、私之を存じたるは、此秋の出替に置くべきよしにて参りけれども、何とやらおそろしく思はれ、欲捨て浪人して、そなた様に不思議の縁を結びぬ、命を参らすべしといふ一言は違へじ、今に人置我をしのべば、行先の三月五日よりそこへ奉公に出、みづから手引をして心任せに討たせ申すべし、只今は名を夢樂と申すよし、段々語れば、虎之助涙をこぼし、いまだなじみも無きうちに、身に替へての心ざし、二世までも忘れおかじと、なほ〳〵情を懸けあひける。それより兄龍之助、兩人の家來にも様子を語り聞かせ、商ひの見せかけもそこ〳〵にして其時を待ちけるに、程なく春の出替比になりて、人置の許へ行きて、日外のかたへ銀さへよくば宿下をせず、はしたばかりを遣はし、御奉公に参らうといへば、人置よろこび、夢樂の御方へ申して一年切に、其身とつかひ女と二人を仕著の外銀百五拾目に極め、表向の女郎分に出でしに、思ひの外なる事になりて、夢樂御内證に引きこまれて心にもあらぬ枕物語、是非もなき事ながら、これ皆虎之助様と申し替はせし爲めなれば、とても身は捨物にして御機嫌に入りける。此事すこしも包まず有りのまに小さく文したゝめて、下女によく〳〵申し含め、島田わけの髪の中へ彼の文を入れて、袋に扶持かた米のはね入れさせ、御門を出だしけるに、子細のある屋形なれば、身を振るはせ、萬事を改めて出しけるに、髪は思ひもよらず、度々虎之助と狀取替はしける。首尾心がけぬるに女の身は是非もなく、つひに懐胎して、物思ふうちに月かさなりて男子を安産しけるに、憂き中にも子といふもの不便にて、此女捨てがたくなりて、けふよりはそれがしが奥さまなりと、あまたの女に言葉をなほさせ、さりとては〳〵御恩忘れがたき御仕方なれば、心も亂れかゝりて、虎之助事を夢樂にかたり、返討にさせんと、女心のはかなき時、扨も口惜や、一たび虎之助どのと申しかはし、今また榮花に思ひ換ゆる事なかれと、心底をかためける折ふし、花の盛りになりて、毎年三月十七日には父親の命日にして光明院といふ山寺へ参詣するなり。されども人を忍ぶ事あれば長持

佛事道具と—原本と文字なし　そなた跡より—原本跡字なし今文意をおして補ふ

に入り、佛事道具と見せて參る事なり、そなた跡より乘物にてまゐられ、此程の氣づまりを晴らし給へとあれば、これ天のあたへとよろこび、此事書きしたゝめ、宵に虎之助方へ申しつかはしければ、之を待ち得たる嬉しさ。明くれば十七日に、以上四人身拵へして其寺の道筋に待ちければ、約束にたがはず塗長持、上に寒天、干大根など置きて、荷ひ來る後前より切立て、三人の中間殘らず打て捨て、扨長持の棒を抜き、武運のつきの久四郎、求馬が兄弟の悴龍之助、虎之助なるぞ、このまゝ打つもあまり酷し、せめて立出で、太刀打せよと、蓋をあくれど足たゝず、時刻移れば是非なく首をうち、軀ばかり長持を兩人家來其寺に荷ひ行けば、住持立出で、それはこれへと法師あまたに舁かせ、去年のけふは雨にて散々、けふの日和の仕合と、物語しながら蓋をあけて、これはと驚きさわぐ所へ、彼の女來て歎く事を歎かず、はじめの段々をかたり、此子も我腹は貸物と、そのまゝ刺殺し、其手にて自害して目前の落花とはなりぬ。此女仕方惜まぬ人はなかりき。龍之助は生國に歸り、父求馬の恥を雪ぎぬ。弟の虎之助は彼の女の事を思ひやりて、叡山にのぼり、出家して其跡を弔ひけるとなり。

歎く事を歎かず—歎くべき事なるに歎かず　腹は借物—諺　此女仕方—此女の仕方とありたし

命々鳥—佛經に見ゆる二頭一體の鳥

御機嫌を以て—御機嫌を見ての意　念もない事—思ひもよらぬ事

第二　惜しや前髪箱根山颪

茂き小笹をわけて衆道の道に入り初むるは、出羽ノ國の戀の山ばかりにはあらず、近道に箱根を越えて、むかし小田原の城下に、水際岸右衞門といへる弓大將の一子岸之助自然と美形に俤備はり、見し人之を焦れ、餘所目の關守なくば思ひの峠にのぼりつめ、水海の底にも沈まんかし。おなじ家中に出頭若ざかりの男松枝清五郎、いつの程にか色ある兄弟の契約、不斷妹背のごとく姿を二子山にならべ、愚に命々鳥の宿木に夜を籠め、晝もうつゝのごとく情の夢をわきまへず、寢るにもあらず、目の覺むるにもわりなき誓の詞、耳なき括枕も後には笑ふなるべし。岸之助今年ははや十七歳の春秋月花と眺めくらし、光陰の名殘おのづからに惜まれしもことわりぞかし。岸右衞門は次第に衰老の身となり、勤務去年よりは苦勞になり行く年の程、一日もはやく岸之助を男躰させ、其身は朝夕の寢覺心易きねがひより外はなかりき。或時岸之助を呼びて元服する支度すべし、御前へははや御機嫌を以て申上げたりといひ付けられしに、此事清五郎に語れば、念も無い事、よしの川ながるゝ水に行く年のかへらぬ花をやと合點せざるに、年の半も

たつを、岸右衛門以ての外不興して、散々しかられし迷惑、浮世のならひとして、我が身ながら、我まゝにならず、此内證をいまだしろしめされざる親仁のむかしを尋ねたし。家の長たる者に竊に之をかたり、親仁にまた傳へさせければ、そこにて漸う合點ゆかれ、しからば相役の鳶尾與七右衛門に樣子をかたり、此趣き清五郎へよろしく賴むよし、心得たりと、それより當番の書院にあがりし處に、清五郎も宿番のよしにて御廣間にて行合ひしより、態々參りて申さんと存ずる折から、好くこそ御目にかゝれ、別儀にあらず、岸之助親岸右衛門年罷寄りたるにつき、勤務形の如く成りがたく、それにつき岸之助に一日もはやく元服させたきねがひ、これは立身奉公の事なれば了簡あつて許し給はれと拙者に其方へ傳へ給はれとの事、清五郎合點せず、與七右衛門打笑ひ、勿論若き時のならひ、某などもおほえ無きにあらず、可惜前髪振を惜きは常の人ごころ、されども外の事と各別の儀、御耳にも達したる上の樣子もあり、身が賴まれし效には、清五郎殿聞かせられて給はれ、六十にあまりたる者が八幡賴みまする、幸ひ今日は日がらよし、今晩元服致させると云捨て立ちけるを、清五郎、いやこれ與七右殿、拙者は合點いたさぬと雖も、聞かぬ顏して御番御沿斷なく御つとめ、申したる事は其通りに仕る、さらば〳〵といひながら歸り、直に岸右衛門所に立寄り、只今晝番勤めて歸ります、扨元服の事は拙者是非と申して參りたる上は別儀なし、御望みのごとく御前首尾よかるべき瑞相則ち今日元服日、最早清五郎殿には今宵宿番なれば歸らるまじ。目出度初冠あそばせと、何の子細なくいひて戻られける跡にて、風は剃刀の利く柳髪をや吹落すらん。明くれば清五郎番より下りて歸る道にて增川槇右衛門、星村九郎八にあひ、先づもつて此比は御目にかからず、かはりたる咄はとかく緩りと承るべし、御兩人ながら御入あそばせと伴ひて入り、一つ二つ大坂より參りたる落しばなし、次に二道の色噂になりて言ふは冗けれども、御亭主の御仕合に及ぶ者は、他國はしらず岸之助殿の器量に增してまた有るべしとも覺えず、されども年月の流るゝには柵もなく、人は一歲も闌けては眺めの薄くなる物ながら、いつまでも置きたきは前髪といへば、清五郎此詞耳に嬉しくとまり、これはよい所を仰せらるゝ、拙者もそれ一つを思入にてゐる所に、氣の短き親仁にて、此比は是非元服させたきよし、某聞入れざるとて、相役與七右衛門を賴み、昨日もお城にて傳言なれども、一圓合點いたさぬなりと言ひ切りたりといふ所へ、岸之助御見舞と來りけるに、宿を出でさまに時雨のしたれば、雨羽織著ながら頭巾ふかく被り、何れも御出と時

八幡—誓詞

初冠—元服のこと

二道—男色女色

なる姿—なれる姿の意

宜はして、頭巾は取らず座につくを、清五郎之を咎めて、若き者の今から頭寒がるさへあるに、いかに御兩所ながら御心やすきとて、無禮なる仕方と睨めば、くつ〳〵笑ひしに、槇右衞門氣をつけて、今の話の樣子にては無きかといふに、清五郎心もとなしと、無理に頭巾をとれば、南無三寶、櫻に大風、花なき枯木男となる姿、是程にかはるものかといへば、兩人いや〳〵世間の盛りより、吉野の春の暮に迷ふべしと座興いへども、清五郎不機嫌になりて、挨拶そこ〳〵にしらけたるに、首尾あしと二人は歸りぬ。跡にて岸之助懷より前髪袱紗物につゝみて出して、其方へ渡しますといふを、取つて投付け、其方はたれに許されて元服したると、氣色かはりたるに驚き、はて昨日與七右殿に苦しからぬ程に元服せよとの、こなたと申しかはし來られしといふを、無心底者と引寄せて刺殺し、それより與七右衞門所に行けば、折ふし宿に居合はせしに、拙者聢とも合點いたさぬを元服させ給ひ、世間我ら一分立ち申さずと、拔打にするを切りむすび、與七右衞門老足ふみ定めがたく危き所へ、岸右衞門公用の事ありて來かゝりしが、我が子のはや討たれたるといふ事もしらず、このありさまを見て、まづ相役の親しきかたに牽れて、與七右助太刀いたすと、詞を懸けて清五郎に切つてかゝる。されども力かひなき

地道—原本振假名ちだうとあれど、誤なること明なれば改む

耳に替へて—身に替へての誤にや引いて參るべし—其下にと文字脫せしにや

老武者の打つ太刀、強い若い手にたゝきつけられ、兩人共に切倒し、とゞめを刺して退く處を、與七右衞門若黨龜右衞門遁がさじと切る太刀、清五郎大袈裟にわかれて伏しぬ。下々ながら卽座に主の敵のみか、三人の敵まで討留めける。

第三　播州の浦浪皆かへり討

人は地道なるこそよけれ。毎年信濃ノ國桐原の里より賣馬引かせて、彌太夫といふ馬口勞播州立野に立ち越えける。昔は武士の名馬を持つ事第一にたしなみぬ。このたびの若馬は雲雀毛の太く逞しく、天晴名も高く龍山と申して、自慢する甲斐こそあれ。其比小湊井右衞門とて家中一番の馬好、まづ此屋形に行きて見せけるに、其勢ひ耳に替へても欲しき心底あらはれしに、彌太夫仕合爰と、思ひの外に高ばり、金三枚と申し出すを、拾貳兩より拾五兩まで望みしに、大かた談合しまりて、代金は明朝相渡すにして厩につながせ、彌太夫は宿に歸る時、道にて出來出頭の樗李彌に會ひ、其方が最前に引ける馬、代金にかまはず此方へ取るべしと言ふに欲心萠し、その御心底ならば只今引いて參るべし、また井右衞門方へ行けば折ふし公用ありて留主なり、少しのうち借りたきよし、若

黨合點せず、旦那の御前は我らに任せ給へ、いまだ金取りたるにてもなしと、無理に引出し、杢彌方に行けば悦ぶ事限りなく、代金三枚に極め、則ち明朝渡すべしと約束して、歸りぬ。杢彌その夕梅の馬場にて輪乘までしたるを、見る者手を打つて、是程の馬今では家中におそらくは竝びあるまじと讃められて、尙自慢して私宅に歸りける。其中に富森久九郎といへる男、其足より直に井右衞門方に行き、扨も今朝御手前の厩にて見し雲雀毛を、杢彌求めしとて祕藏に乘りたり、あれ程の馬何として買はれぬぞといふに井右衞門おどろき、我が留主の内に引いて行くさへ憎きに、分別有りと、急ぎ彌太夫を呼びにやり、段々不屈なる仕方、買ふとも買はずとも急度引いて參れと、あらけなく呵られ、迷惑ながら又杢彌方へ行き、しばしのうち借りたきといふ。子細を聞けば始めに井右衞門殿契約、されども手形も致さず、所詮御留主のうちに引いて參つた御腹立、此上はたとへ百兩にても賣りは致さねど、右の言譯に一寸お目にかけて參らん間、いかやうとも御恩に著申すべしと達て言ふに、然らば馬は此方の馬なりと、返すぐ〳〵念を入れて貸しぬ。それより井右衞門屋敷へ引けば、先づ厩につながせ、彌太夫を呼出だし、金子拾五兩相渡し、請取手形いたせといふに、これは近比迷惑といはせず、爲ぬにおいては一寸

祕藏に乘りたり―祕藏にして乘りたり

一寸も躙らせぬ―身動きもさせぬ

も躙らせぬがと、刀に反を打てば、いかにも仕るべしとて、賣手形慥に書きて、其足より直に本國へ走りける。井右衞門は其夜の明くるを待ち兼ね、ほのぐ〳〵より鞍鐙をあらためて美々しく粧はせ、知りたる方には云ふに及ばず、乘りありきて見せけるを、彈他仁介此事を杢彌に語り、昨日其方の乘られし馬をば、今朝井右衞門我が買ひたる馬とて、自慢たらぐ〳〵にて通りたりといふに、杢彌大きに不興し、彌太夫を呼びにやれば、宿にはやや夜脫して居らず。既に我梅の馬場にて乘りたるを誰知らぬ者なし、然るを井右衞門に取られたりと評判にあひては一分立たずと、彈他仁介前を乘り通りたらば、定めて小松馬場にて責むべしと、狀したゝめて下人に持たせやりて渡せば、井右衞門うなづき、晩程此松原へ竊に立合ひ、此方も僕一人もつれず、たがひに一騎打と、其宮に立寄り、返事さら〳〵と書いて、使戻して宿に歸り、支度して兩人立出で、言ひしごとくに只一人づつ見事なる仕方ぞかし。比は極月の下旬、しかも其夜に降る雪馬蹄三尺ふかく、袖打拂ふ暇なく戰ひけれども、杢彌もとより一流の兵法、たやすく討たるまじと思ひしより、井右衞門請太刀二つ三つ擊たれながら、無念やとそこに倒れ伏して、四五返南無あみだ佛〳〵と唱へ、はやく寄つて止めを刺せといへば、杢彌、扨は今擊ちし太刀手應せ

袖うち拂ふ―「駒とめて袖打拂ふ陰もなし佐野のあたりの雪の夕暮」

そこに倒れ伏し―原本にの字なし

しと覺えしが、頭に淺く切込みたるよと嬉しく、近寄るに音なし。扨こそ息絶えたりと、留刀さしかゝる處を寢ながら横に拂へば、二つに成つて倒れしを、首尾よく仕舞ひ、これより三町南に德山八平隱居して八入、この庵にたどり行けば、折ふし雪中の夜梅といふ題を置いて、燭を乘りて遊ぶ所に、此有樣を見て子細二言に及ばず、先づ佛壇の下に隱し、祕藏せし唐雞を突殺し、自身手にさげて、右の杢彌が死骸の際より此血を絞りこぼし、そこより北の藪の堀端までつたはせ、歸りに足跡を消して、樣々心を盡して勞る、武士の意氣地ぞかし。其翌日此沙汰家中一倍になりけれども、血の引きたる樣子、西國海道に退きたると見えしより、杢彌子息孫七、同じく弟宇助、御暇を申上げて出でける。こゝに哀れなるは、先年杢彌浪人のうち、江戸にて娘を嫁せ置きし夫は身上輕き奉公人、牛俣彌二郎といへる男、しかも祿よりは內證貧しかりき。此事を孫七方よりいひやりしに、女とりわけて歎き、いかに女子に生れたりとも、武は弟どもには負けまじと、彌二郎に暇を乞ひし時、それ程に思はれなば、我がためにも舅、親と同前なれば遁るべきに非ず、しかし彼の敵の在家いづくとも知れざるうちは、尋ぬるに路錢たくはへずしては成りがたし、其內隨分其方も外なる營みしてなりとも路金たまる分別、我も勤めの

境垣―原本振假名さいかきとあり

淺しく―淺ましくの誤か

際は油斷なく心がくべしと、終夜野に出で、里の境垣に輪穴かけて犬を釣りて之を賣り、女房は人目を忍び、絞煙草入を縫賃僅少を顧みず、心に此思ひを含みて、朝夕胸に迫りて忘れず、半年は末をたのみに誰しらぬ賤の手業、男も雨の夜は怠り、月の夕も仕合によりて空しく露に袖絞りて歸るのみ。世は心に任せぬ習なるに、思ひの外の事に身を窶しぬるぞ賴もしき。されども金銀捗どらず、女心の淺しく、ある時彌二郎に恨しき色を見せ、我も男に生まれなば、今までかくしてもをらじ、ぜひ覘ひて本望達せんと思へば、男子から成るまじき事に非ず、他人の身の念力薄きより何時か望を遂げん、侍はその別ちなき義理の道立てるも立てざるも、心々の胴骨强き者の羨しき時、殊更今なりといふ心底の程、彌二郎之を耳に障へて、かく武士の道ならぬ事に殺生するも其ためならずや、尤も親の敵を討つべき思ひ大切なるよりいへばとて、夫たるものを蔑にする惡口一度二度ならずと、內證は調らず、心は急く餘りに女房を刺殺し、六歲になりし女子をも、ながらへて憂目見んよりと、同じ刀にて突殺し、其身も自害して果てけり。扨孫七、宇助は西國殘らず尋ねしに逢はず。引返して江戸に下り、尋ぬるには行くへをしらず、無念ながら、孫七裏棚かり宇助は四谷熊之進殿へ小性分に出し、これももし敵の便ともな

ほとほりて—發熱すること

らんかと勤めし。或時小性中間四五人次の間に集り四方の咄するに、宇助は壁に靠れかかり、夜前の酒宴に草臥たりと言ひながら居眠しばしとて、柱にあたりて立てかけの髪茶筅になりぬ。目覺めて之を不審して、誰が解きぬらんと四邊見廻す所に、戸川浪之助、壺口仙六興がる咄を打笑ひてゐたるを聞き、宇助、扨は髪そこなはしたるが可笑しきかと、理不盡に切付けしに、言分するに隙なく二人して打ちとめ、熊之進にこの由いひあぐるに、浪之助を不便がらるる最中にて、宇助は手討と沙汰させて置きぬ。扨孫七は杖柱と頼みつる一人の弟におくれ、今は力を失ひしが、從弟に樗北右衞門といふ浪人、これを便に心を合せ覘ひしに、ある夕、風の心地して床に就き、三日ほとほりて疱瘡出で、九日めに相果てけり。彼の井右衞門は八入に七十日かくまはれ、西風烈しき夜密かに國を立ち忍び、當所に所縁のあるに始めは影を隱しけれども、孫七兄弟は西の國にくだりたると聞きて心をゆるし、編笠ふかく被りて久しき氣積りを晴らさんと、寺社の景地を心ざして行くに、番町にて孫七之を見付け、小湊井右衞門遁さぬと詞を懸けし時、うろたへ者、人違ひといふに、見損じたりやと編笠覗く所を拔打に切倒しける。以上四人の敵今は一人も殘らず絶えて、井右衞門が手柄隱れなし、世にはかゝる例もあるものか。

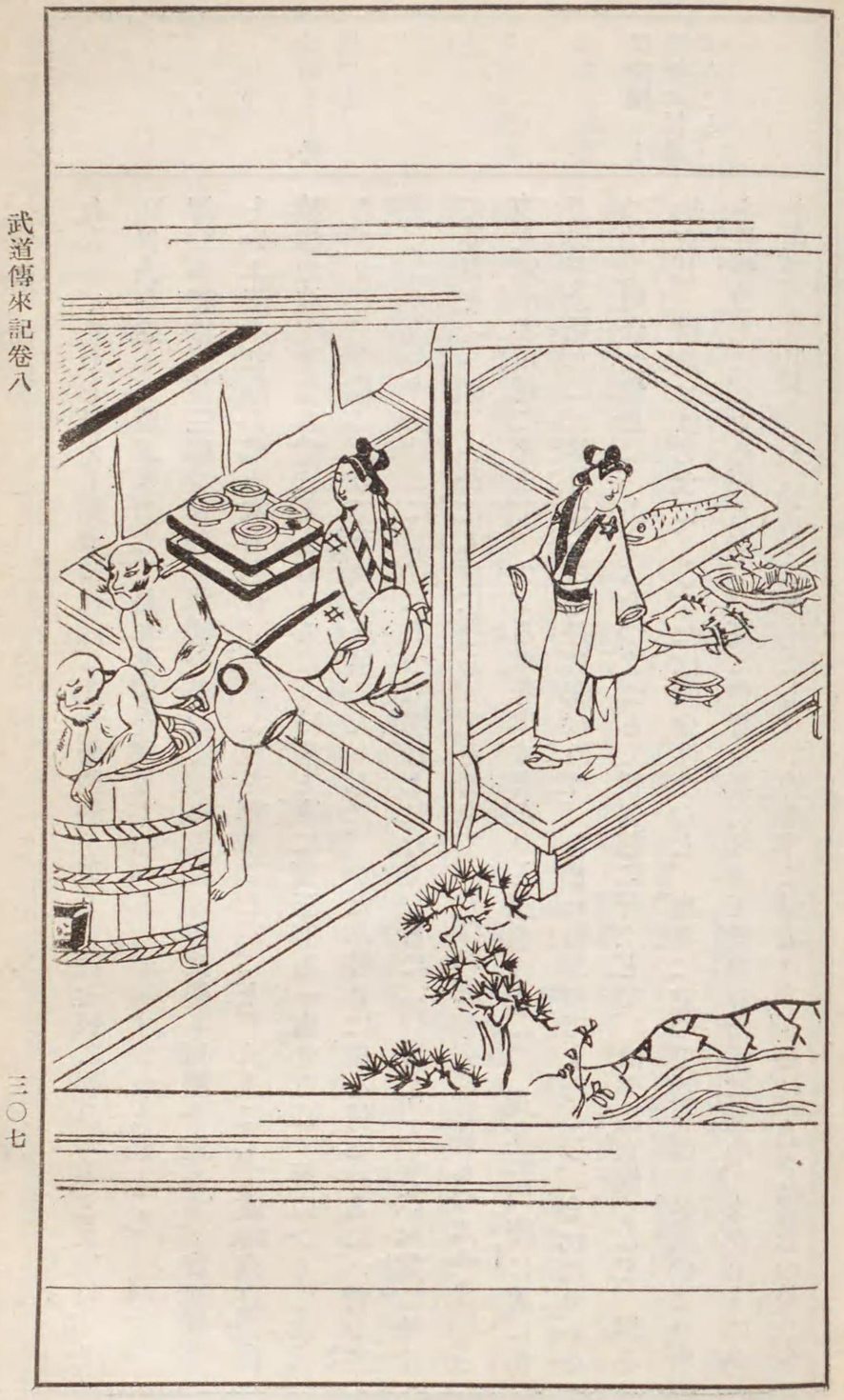
輕行—輕裝

第四　行水でしるる人の身の程

白妙に降りつゞきて、下野ノ國黑髪山も夜の間に姿の變りて老の首と見なしぬ。年を重ねてむかし語りに聞きしは、那須の何がし殿に勤めし菅田傳平、陰山宇藏、此兩人申出して、けふの雪の面白きに、いざ追鳥狩をはじめ、酒の肴に雉子四五羽、手に取りたるやうに勸めければ、いづれも飛出る若者ども、三十餘人さそひ合せ、其身輕行に拵へ、手毎に棒乳切木、或は割竹にて敲立て、驚く鳥のほろろうち弱りしを捕へける。或人申せしは、此原の殺生石にとまりし諸鳥たちまち落ちて、骨をもをらず摑取といへば、おのおのこれは不思議と、其石の邊に行きて見しに、人の申せしに違はず、とまらむとすればそのまゝ轉落ちて、烏鳶に限らず、殊更鷺はもろく、山鳥のおのが命しらず、飛びかゝつて落つるを、皆々取る事を論じて駈著けしに、いまだ片息にして駈廻りしを、あなたこなたに追付、終に捕へて、それよりすぐ鍋掛の里に行きて、烏ども毛燒して萩柴をりくべ、酒事になして寒さをしのぎけるに、菅田傳平申せしは、彼の石に落ちたる烏はかならず中る事なり、そも人に寄るべしと申せば、なまぬるき世の中、堪忍せざる若

五百八十年
―長き事を
いふ諺

者命惜しからずと、胴殼焼きかしらまで餘さず暴食の中に、熊川茂七郎思案顔して喰はざりしに、之を見て心ある人はいづれも用捨して酒ばかりを飲みくらしけるに、高砂丹兵衛横手を打て、茂七郎殿の長生、烏をまゐらぬ人々は五百八十年も生殘りて見給へと、四五度も申しければ、茂七郎刀おつ取り、立つ所を皆々引きとゞめ、子細なく假宿を立ちて歸りさまに、人の透間を見て丹兵衛を待伏せして、最前の事覺えたかと、一文字に打つてかゝれば、丹兵衛もおくれぬ男にて、しばらく切結ぶうちに、茂七郎運盡きて棚橋にあがりしに、薄雪にて朽木の穴見えずして、太股までこれに踏込み、身のはたらきなりがたく、打留められける。それより丹兵衛行方しらず退きける。茂七郎一子茂三郎七歳なれば敵討つ事も果てしなく、母親歎きの中にそだてあげて十六歳になりぬ。されども丹兵衛見知らざりければ、たとへ廻合ひても討つべき便なく、又後見頼む方もなく、明暮無念をかさねける。やう〳〵思ひ出して、因幡なる伯父を頼みて丹兵衛を討たすべし、汝の父のためには兄なれども、樣子あつて拶挨悪しく久々不通なりしが、此度立越え頼みなば、よもや外には見捨て給ふまじと、文こま〴〵と書き認め、茂三郎を仕立て、熊川茂左衛門殿かたへ遣はしけるに、旅の日數をかさねて、因幡ノ國に著きて屋形に尋



時節と—偶然にも

出立燒く—朝飯の用意すること

ね入り、ありし事ども語りければ、茂左衛門涙を流し、茂七郎に恨みの事ども忘れ、その丹兵衛惡し、我助太刀して是非本望を達せしむべし、心やすかれと賴もしく請合ひ、御暇申請け、茂三郎を伴ひ、諸國を尋ねめぐりしに、丹兵衛も何國を定めず、森澤團齋といふ浪人に鎚の名人有りしが、一向これを賴みにして、上下八人にして或時奈良の都猿澤の池の前なる宿にとまりけるに、時節と隣に茂三郎も一宿せしに、互にかくとは知らざりし。夕暮になりて下々水風呂に入りしに、かたみ替りに後を流しけるに、背中空所もなく灸をすゑけるに、けふあつて明日しれぬ身なるに、何か養生入るべし、萬に付けて憂世といへば、いかにも世に隱るゝ主を持ちて、いづれ定めがたき身とつぶやきける。茂三郎小者垣越に聞きて、かゝる事を申す者ありと語りけるに、茂左衛門密に裏に出でのぞき見しに、年月ねらひし丹兵衛なれば、をどりあがりてよろこび、それより心をつけて聞合せけるに、あすは七つ立にして伊賀越に行くとて、はや出立燒くなど、馬を約束し、用意せはしきに、こなたは隨分沙汰なし、夜半に立つて道すがら足場のよき所を見繕ひしに、よき所もなく、既に伊賀上野になりて詮ずる所爰に極め、まがりとの角を見立て　以上四人いさみて酒屋に入りて釣掛升に引請けて、それながら差しつ差され

町はづれ—原本てうはづれと振假名せり

武命—武運

手者—熟練者

つ心祝ひして、緣がはに腰をかけてゐならび、其日も八つの下りになりて乘掛二匹を追立て、上野の宿に入りけるは、互にあやうき所なり。團齋得ものの鎗持、町はづれの屋根にもたしかけて、雪隱に入りけるは、丹兵衛が武命の盡なり。茂三郎馬の眞先に向ひ、熊川茂七郎が悴子茂三郎、親の敵うつぞと、名乘り懸けて切る太刀に高股落して、ひらけば丹兵衛拔合はせ、一命爰にして戰ひしは、天晴武士の働きなり。時に團齋飛び下り助太刀うつを、茂左衛門横手なぎて、兩方手者なれば誓が程祕術を盡しける。されども茂三郎茂左衛門理の刃なれば次第に强く、うち留めて止めを刺し、其身も深手なれば死骸に腰を掛け、息をつぎける內に、其國の守より大勢駈著け、いさめて歸る。古今武士の鑑、刀は鞘にをさめ、御代長久、松の風靜かなり。

貞享四年卯初夏

江戸日本橋青物町
萬屋清兵衛

大坂吳服町眞齊橋筋角
岡田三郎右衞門

日本永代藏

日本永代藏

目　錄

初午は乘つて來る仕合
江戸にかくれなき俄分限
泉州水間寺利生の錢
二代目に破る扇の風
京にかくれなき始末男
壹歩拾うて家亂す悴子
浪風靜に神通丸
和泉にかくれなき商人

卷一

北濱に箒の神をまつる女

昔は掛算今は當座銀

江戸にかくれなき出見世

壹寸四方も商賣の種

世は欲の入札に仕合

南都にかくれなき松屋が跡式

後家は女の鑑となる者

天地は萬物の逆旅云々李白春夜宴ニ桃李園一序に「天地者萬物之逆旅、光陰者百代之過客而浮生若レ夢」

暴雨の役に―一本役にはとあり

初午は乘つてくる仕合

天道言はずして國土に恵ふかし、人は實あつて僞おほし。その心は本虚にして物に應じて跡なし。これ善惡の中に立つてすぐなる今の御代を、ゆたかに渡るは人の人たるがゆゑに常の人にはあらず、一生一大事身を過ぐるの業、士農工商の外出家神職にかぎらず、始末大明神の御詫宣にまかせ金銀を溜むべし、これ二親の外に命の親なり。人間長くみれば朝をしらず。短くおもへば夕におどろく。されば天地は萬物の逆旅、光陰は百代の過客、浮世は夢幻といふ、時の間の煙死すれば何ぞ、金銀瓦石にはおとれり。黄泉の用には立ちがたし。然りといへども殘して子孫のためとはなりぬ。ひそかに思ふに世に有る程の願ひ何によらず、銀德にて叶はざる事天が下に五つあり、それより外はなかりき。これにましたる寶船の有るべきや、見ぬ島の鬼の持ちし隱れ笠かくれ簑も暴雨の役に立たねば、手遠き願ひを捨てて、近道にそれ〴〵の家職を勵むべし、福德はその身の堅固にあり、朝夕汕斷する事なかれ、殊更世の仁義を本として神佛を祭るべし、これ和國の風俗なり。折ふしは春の山二月初午の日、泉州に立たせ給ふ水間寺の觀音に貴賤男女參詣

ける。皆信心にはあらず欲の道づれ、はるかなる苔路嫗萩荻の燒原を踏み分け、いまだ花もなき片里に來て、此佛に祈誓かけしは、その分際程に富めるを願へり。この御本尊の身にしても、一人々々に返言し給ふもつきず、今この娑婆に摑みどりはなし、我賴むまでもなく、土民は汝にそなはる、夫は田打ちて婦は機織りて、朝暮そのいとなみすべし、一切の人この如くと戸帳ごしにあらたなる御告なれども、諸人の耳に入らざる事の淺まし。それ世の中に借銀の利足程おそろしき物はなし。この御寺にて萬人かり錢する事あり。當年一錢あづかりて來年二錢にして返し、百文請取り一百文にて相濟ましぬ。これ觀音の錢なれば、いづれも失墜なく返納したてまつる。おの〳〵五錢三錢十錢より内をかりけるに、爰に年のころ二十三四の男生付ふとくたくましく、風俗律義にあたまつき跡あがりに、信長時代の仕立著物袖下せはしく裾まはり短く、うへした共に紬のふとりを無紋の花色染にして、同じ切の半襟をかけて、上田縞の羽織に木綿裏をつけて、中脇指に柄袋をはめて、世間かまはず尻からげして、爰に參りし印の山椿の枝に野老入れし髭籠取りそへて下向と見えしが、御寶前に立ち寄りて借錢一貫と云ひけるに、寺役の法師貫ざしながら相渡して其國其名を尋ねもやらず、彼の男行きがた知れずなりにき。寺僧あつ

この如くと。
―一本となし

ふとり―太織

髭籠―竹の端をあみのこしたる籠

まりて當山開闢よりこのかた、終に一貫の錢かしたる例なし、借る人これがはじめなり、此錢濟むべき事とも思はれず、自今は大分にかす事無用とさたし侍る。其人の住所は武藏江戸にして小網町のするに、浦人の著きし舟問屋して次第に家榮えしをよろこびて、掛硯に仕合丸と書き付け、水間寺の錢を入れ置き、獵師の出船に子細を語りて百文づつかしけるに、かりし人自然の福ありけると遠浦に聞き傳へて、せんぐりに毎年集りて一年一倍の算用につもり、十三年目になりて元壹貫の錢八千百九十二貫にかさみ、東海道を通し馬につけ送りて御寺に積み重ねければ、僧中横手を打ちて、そののち詮議あつて、末の世のかたり句になすべしと、都よりあまたの番匠をまねきて、寶塔を建立、有難き御利生なり。この商人内藏には常燈のひかり、其名は網屋とて武藏にかくれなし。惣じて親のゆづりをうけず其身才覺にしてかせぎ出し、銀五百貫目よりしてこれを分限といへり。千貫目のうへを長者とは云ふなり。此銀の息より幾千萬歲樂と祝へり。

住所―一本すみし所

出船―一本出舟

番匠―大工

二代目に破る扇の目

人の家にありたきは、梅櫻松楓、それより金銀米錢ぞかし。庭山にまさりて庭藏の眺め、

喜見城―帝釋天の居所
丹波口の西―島原の所在なり

四季折々の買置、これぞ喜見城の樂みと思ひ極めて、今の都に住みながら四條の橋を東へ渡らず、大宮通より丹波口の西へゆかず、諸山の出家をよせず、諸浪人に近付かず、少しの風氣蟲腹には自藥を用ひて、晝は家職を大事につとめ、夜は内を出ずして、若い時習ひ置きし小諧を、それも兩隣をはゞかりて、地聲にして我ひとりの慰みになしける。灯をうけて本見るにはあらず、覺えた通り世の費一つもせざりき。この男一生のうち草履の鼻緒を踏みきらず、釘のかしらに袖をかけて破らず、萬に氣をつけて、其身一代に二千貫目しこためて行年八十八歳、世の人あやかり物とて升搔を切らせける。さればかぎり有る命、この親仁其年の時雨ふる比、憂の雲立どころを待たず、頓死の枕に殘る男子一人して、此跡を丸どりにして、二十一歳より生れ付きたる長者なり。この世悴親にまさりて始末を第一にして、あまたの親類に所務わけとて箸かたし散らさず、七日の仕揚、八日目より蔀門口を明けて、世をわたる業を大事にかけて、腹のへるを悲みて、火事の見舞にも早くは歩まず、しはい穿鑿に年くれて、明くれば去年のけふぞ親仁の祥月とて旦那寺に參りて、下向に猶むかしを思ひ出して泪は袖にあまれる。この手紬の碁盤縞は命しらずとて親仁の著られしが、思へばをしき命、今廿二年生き給へば長百なり。若死あそば

命しらず―丈夫にて長く破損せぬ

ことと廿二年―十二年の誤算
五大力丼―途中の安全を祈るために封じ目にかくしるす風習ありし也
局女郎―下級の遊女
付石―すりつけて金銀の眞贋をためす石
諸分―雜費
一角金―一歩金

して大ぶん損かなと、これにまで欲先立て歸るに、紫野の邊御藥苑の竹垣のもとにして、めしつれたる年切女、齋米入れし明袋持ちし片手に、封じ文一通拾ひあげしを取りてみれば、花川さままゐる二三よりと裏がき、そくひ付けながら、念を入れて印判おしたるうへに、五大力丼とそめぐ〳〵と筆をうごかせける。これは聞き及ばぬ御公家衆の御名なりと、それより宿に歸り人に尋ねければ、これは島原の局女郎の方へやるなるべしと讀みすてけるを、これも杉原反古一枚の德、損のゆかぬ事とて物靜にとき見しに、壹歩一つころりと出しに、これはと驚き先づ付石にてあらため、その後秤の上目にて一匁二分、りんとある事をよろこび、胸のをどりを靜め思ひよらざる仕合はこれぞかし。世間へ沙汰する事なかれと、下々の口を閉ぢて、扨彼の文を讀みけるに、戀も情も離れて頭から一つ書にして、時分がらの御無心なれども、身にかへてもいとほしさのまゝ春切米を借越しつかはし參らせ候、此内二匁はいつぞやの諸分、その殘りは皆合力、年々つもりし借錢を濟まし申さるべし。惣じて人には其分限相應のおもはく有り、大坂屋の野風殿に西國の大臣菊の節句仕舞にとて一歩三百おくられしも、我らが一角も心入れは同じ事ぞかし、あらば何か惜しかるべしと、哀れふくみての文章、讀む程不便かさなり、いかにし

ても此金子をひろうてはゐられじ、この存念もおそろし、此男に返さんとすれど住所しらず、先の知れたる島原に行きて、花川を尋ね渡さんと、すこしは鬢のそゝけを作りて宿を立ち出し後、此一歩只かへすも思へばをしき心ざし出て、五七度まで分別かへけるが、程なく色里の門口につきてすぐには入りかね、暫く立ちやすみ揚屋より酒取りに行く男に立ち寄り、この御門は斷なしに通りましても苦しう御ざりませぬかといひければ、彼の男返事もせず、おとがひにて教へける。さてはと編笠ぬぎて手に提げ、中腰にかゞめてやう〳〵に出口の茶屋の前を行き過ぎて女郎町に入り、一文字屋の今唐土出掛け姿に近寄り、花川さまと申す御方はと尋ねけるに、太夫遣手のかたへ貌を移して私は存じませぬとばかり、遣手青暖簾のかゝるかたに指ざして、どこぞそのあたりにて聞き給へといへば、跡なる六尺目に角を立てて、其女郎つれておぢやれ、見てやらうと申せば、つれ參る程なれば御前さまに御尋ねは申しませぬと、跡へさがりて彼方此方に尋ねあたり、様子を聞けば二匁どりの端傾城なるが、この二三日氣色あしくて引き籠り居らるゝ由、そこ〳〵に語り出ければ、彼の文屈けず歸りさまに思ひの外なる浮氣おこりて、元此金子我が物にもあらず、一生の思出に此金子切に、けふ一日の遊興して、老いての咄の種にもと思ひ極め、揚屋の町は思ひもよらず、茶屋にとひ寄り、藤屋彦右衛門といへる二階にあがり、晝のうち九匁の御かたを呼びてもらひ、呑みつけぬ酒にうかれて、これより手習ふはじめ、情文の取りやりして、次第のぼりに太夫殘らず買ひ出し、時なるかな都の末社四天王、願西神樂あふむ亂酒にそだてられ、まんまと此道にかしこくなつて、後には色作る男の仕出しもこれがまねして、扇屋の戀風様といはれて吹き揚げ、人はしれぬ物かな、見及びて四五年このかたに、二千貫目塵も灰もなく火吹く力もなく、家名の古扇殘りて、一度は榮え一度は衰ふると、身の程を謠うたひて一日暮しにせしを見る時聞く時、今時は儲けにくい銀をと、身を持ちかためし鎌田屋の何がし子供にこれを語りぬ。

九匁―一本
十一匁とあり

しれぬ物かな―一本し
れぬ物かは
身の程を謠
うたひて―
一本謠なし

浪風靜に神通丸

諸大名にはいかなる種を前生に蒔き給へる事にぞ有りける。萬事の自由を見し時は、目前の佛というて又外になし。さればとよ世に大名の御知行、百貳拾萬石を五百石どり、釋迦如來御入滅このかた今に永々勘定したて見るに、これを取りつくさじといへり。大

入港—一本入海
八木—米
たてり商—立ちながらの取引の意か
問丸—問屋

人小人の違ひ各別世界は廣し。近代泉州に唐かね屋とて金錢に有德なる人出來ぬ。世わたる大船をつくりて、其名を神通丸とて三千七百石つみても足かろく、北國の海を自在に乘りて難波の入港に、八木の商賣をして次第に家榮えけるは、諸事につきて其身調義のふきゆゑぞかし。惣じて北濱の米市は日本第一の津なればこそ、一刻の間に五萬貫目のたてり商も有る事なり。その米は藏々に山をかさね、夕の嵐朝の雨、日和を見合せ、雲の立所を考へ、夜のうちの思ひ入れにて賣る人あり買ふ人あり、一分二分を爭ひ、人の山をなし、互に面を見知りたる人には、千石萬石の米をも賣買せしに、兩人手打ちて後は少しもこれに相違なかりき。世上に金銀の取りやりには預り手形に請判、慥に何時なりとも御用次第と相定めし事さへ、其約束をのばし出入になる事なりしに、空さだめなき雲を印の契約をたがへず、その日切に損德をかまはず賣買せしは、扶桑第一の大商人の心も大腹中にして、それ程の世をわたるなる、難波橋より西見渡しの百景、數千軒の間丸甍をならべ、白土雪の曙をうばふ、杉ばへの俵物山もさながら動きて、人馬に付けおくれば大道轟き地雷のごとし。上荷茶船かぎりもなく川浪に浮びしは、秋の柳にことならず。米さしの先を爭ひ、若い者の勢虎臥す竹の林と見え、大帳雲を飜し十露盤丸

繩なる人—身代薄き人
次第おくり。の—一本に見るを見まれ—諺
内證扱ひ濟。

雪をはしらせ、天秤二六時中の鐘にひどきまさつて、其家の風暖簾吹きかへしぬ。商人あまた有るが中の島に岡、肥前屋、木屋、深江屋、肥後屋、鹽屋、大塚屋、桑名屋、鴻池屋、紙屋、備前屋、宇和島屋、塚口屋、淀屋など、此所久しき分限にして商賣やめて多く人を過しぬ。昔こゝかしこのわたりにて繩なる人なども、その時にあうて旦那樣と呼ばれて、置頭巾撞木杖替草履取るも、これ皆大和河内津の國和泉近在の物づくりせし人の子共、惣領殘して末々を丁稚奉公に遣はし置き、鼻垂れて手足の土氣おちざるうちは、豆腐花柚の小買物につかはれしが、お仕著二つ三つ年をかさねけるに、定紋をあらため、髪の結振を吟味仕出し、風俗も人のやうになるに隨ひ、供はやし能舟遊にも召しつれられ、行く水數かく砂手習地算も子守の片手に置き習ひ、いつとなく角前髪より銀取の袋をかたげ、次第おくりの手代分になつて、見るを見まねに自分商を仕掛け、利德はだまりて損は親方にかづけ、肝心の身を持つ時親請人に難義をかけ、遣ひすてし金銀の出所なく、それなりけりに內證扱ひ濟みて、荷ひ商の身の行くすゑ幾人か限なし。おのれが性根によつて長者にもなる事ぞかし。惣じて大阪の手前よろしき人代々つゞきしにはあらず、大かたは吉藏三助がなりあがり銀持になり、其時をえて詩歌鞠楊弓琴笛鼓香會

みて―一本すまして
琴笛鼓―一本笛なし
手に取りたる事なし―一本手にとる事もなし
すぎはひは云々―すぎはひは草の種といふ諺による
なほまた延し―一本またなし
大豆板―丁銀のこと

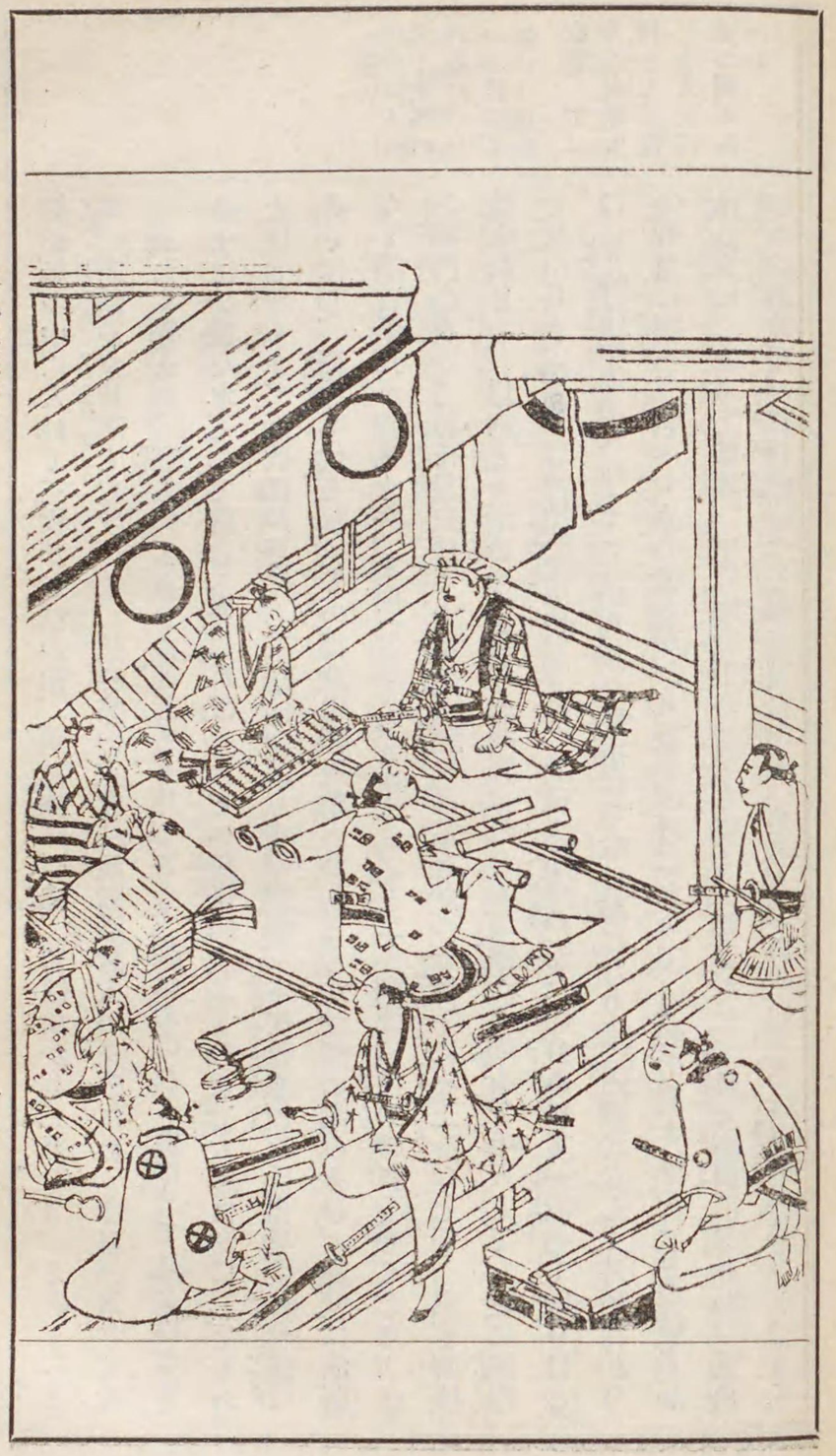
茶の湯も、おのづからに覺えてよき人付合、むかしの片言もうさりぬ、兎角に人はならはせ、公家のおとし子作花して賣るまじき物にもあらず。これを思ふに奉公は主取が第一の仕合なり、子細は繁昌の所にはよらず、北濱過書町のほとりに住みける指物細工人ありしに、此職人にもちひさき弟子二人ありしが、新屋天王寺屋などの十貫目入の銀箱、不斷手にかけて寸法は覺えて、其銀はつひに手に取りたる事なし。此子おとなしくなりて、一分店を出しけるに、親方にかはらず鍋蓋火打箱の仕置、これより外はしらず。此者も同じ所から大所につかはれなば、それ〴〵の商人になるべき物をと見及び不便なり、すぎはひは草箒の種なるべし。この濱に西國米水揚の折ふし、こぼれすたれる筒落米をはき集めて、其日を暮せる老女ありけるが、形ふつゝかなれば二十三より後家になりしに、後夫となるべき人もなく、ひとり有る世悴を行くすゑの樂に悲しき年を經りしに、いつの比か諸國改免の世の中すぐれて八木大分此浦に入舟晝夜に揚げかね、借藏せまりて置くべきかたもなく、澤山に取りなほし捨れる米を塵塚まじりに掃き集めけるに、朝夕にくひあまして一斗四五升たまりけるに、これより欲心出來て始末をしけるに、はや年中に七石五斗延してひそかに賣り、明の年なほまた延しける程に、毎年かさみて二十餘年に胞くり金拾貳貫五百目になしぬ。其後世悴にも九歳の時より遊ばせずして、小口俵のすたるをひろひ集めて、錢ざしをなはせて、兩替屋問屋に賣らせけるに、人の思ひよらざる錢まうけして、我が手よりかせぎ出し、後には慥なるかたへ日借の小判當座がしのはした銀、これより思ひ付きて今橋の片陰に錢見世出しけるに、田舍人立ち寄るにひまなく、明けがたより暮れがたまで、わづかの銀子とりひろげて、丁銀こまがねかへ、小判を大豆板に替へ、秤にひまなく懸け出し、毎日々々つもりて十年たゝぬうちに、中間商のうはもりになつて、諸方に貸帳、我がかたへは借る事なく、銀替の手代これに腰をかゞめ機嫌をとる程になりぬ。小判市も此男買ひ出せば俄にあがり、賣り出せば忽ちさがり口になれり。自ら此男の口を窺ひ皆々手をさげて旦那々々と申しぬ。中にも先祖をさがして、何ぞあれめに隨ひ世を渡るも口惜しきと我を立てける人、物の急なる時にさし當つて迷惑し、これも亦御無心申さるる、金銀の威勢ぞかし。後は大名衆の掛屋、あなたこなたの御出入もつぱらにしければ、昔の事はいひ出す人もなく、歴々の聟となつて、家藏數をつくりて、母親の持たれし筒落掃藥箒子、澁團扇は貧乏ぢねくといへども、此家の寶物とて乾の隅に納め置かれし。諸國をめぐりけるに、今もまだ稼いで見るべき所は、大坂北

濱、流れありく銀もありといへり。

昔は掛算今は當座銀

古代にかはつて人の風俗次第奢になつて、諸事その分際よりは花麗を好み、殊に妻子の衣服、また上もなき事ども身の程しらず、冥加おそろしき高家貴人の御衣さへ、京織羽二重の外はなかりき。殊更黑き物に定まつての五所紋、大名より末々の萬人にこの似合はざると云ふ事なし。近年小ざかしき都人の仕出し、男女の衣類品々の美をつくし、雛形に色をうつし、浮世小紋の模樣、御所の百色染、解捨の洗鹿子、物好各別世界にいたり穿鑿、女の身持娘の緣組より內證うすくなりて、家業の障となる人數しらず、嫋娘の平生きよらを見するは渡世のためなり、萬民の美婦は春の花見秋の紅葉見婚禮振舞の外は、目立つ衣裳を著重ねずともすむ事なり。ある時室町の片脇に仕立物屋の軒をかりて、橘の暖簾掛りて、當世著物の縫出しすぐれて都の手利ありて、絹綿爰に持ちつどひて、さながら衣掛山を我が宿に見し事ぞかし。仕付の絲火熨あつるを待ち兼ねしほとゝぎす、初空卯月一日は衣がへとて色よき袷を縫ひかけしを見るに、白き紋羅のひつかへしに、

いたり穿鑿
―贅澤なる好み



生牛の目云云—生馬の目をぬくといふ諺による

衣配—十二月に來春の料として親しき人々に衣を贈るをいふ

緋縮緬を中に入れて三枚がさねの袷、兩袖襟に引綿、昔はなかりし事なり。このうへは萬の唐織を常住著となすべし。此時節の衣裳法度諸國諸人の身のため、今思ひ當りて有りがたく覺えぬ。商人のよききぬ著たるも見ぐるし、紬はおのれに備はりて見よげなり。武士は綺羅を本として務むる身なれば、たとへ無僕のさぶらひまでも風儀常にしてもおもはしからず。近代江戸靜にして松はかはらず常盤橋、本町呉服所京の出見世紋付鑑にあらはし、棚守手代それ〳〵の得意の御屋敷へ出入ともかせぎに勵みあひ、商賣に油斷なく辯舌手だれ智惠才覺、算用たけてわる銀をつかまず、利德に生牛の目をもくじり、虎の御門の夜をこめ千里にゆくも奉公、朝には星をかづき秤竿に心玉をなして、明暮御機嫌とれども、以前とちがひ今繁昌の武藏野なれども、隅から隅まで手入して、更に摑取もなかりき。御祝言又は衣配の折からは、其役人小納戸かたの好みにて一商して取りけるに、今時は諸方の入札すこしの利潤を見掛けて喰ひ詰になりて、內證かなしく外聞ばかりの御用に調へ、剩へ大分の賣りがかり數年不埒になりて、京銀の利まはしにもあはず、かはし銀につまりて難義、俄に取りひろげたる棚も仕舞ひがたく自ら小前になりぬ。兎角はあはぬ算用、江戸棚殘つて何百貫目の損、足もとのあかいうちに本紅の色もかへてと、

日野—上州の産

郡內—甲州の産

手前細工人—店つきの職人

銘々分別する時、又商の道は有る物、三井九郎右衞門といふ男、手金の光むかし小判の駿河町と云ふ所に、面九間に四十間に棟高く長屋作りして、新棚を出し、萬現銀賣に掛直なしと相定め、四十餘人利發手代を追ひまはし、一人一色の役目、たとへば金襴類一人、日野郡內絹類一人、羽二重一人、紗綾類一人、紅類一人、麻袴類一人、毛織類一人、このごとく手わけをして天鵞絨一寸四方、緞子毛貫袋になる程、緋繻子鑓印長、龍門の袖覆輪かた〳〵にても、物の自由に賣り渡しぬ。殊更俄目見えの熨斗目、いそぎの羽織などは、其使をまたせ數十人の手前細工人立ちならび、卽座に仕立てこれを渡しぬ。さによつて家榮え、每日金子百五十兩づつならしに商賣しけるとなり。世の重寶これぞかし。此亭主を見るに日鼻手足あつて外の人にかはつた所もなく、家職にかはつて賢し、大商人の手本なるべし。いろは付の引出に唐國和朝の絹布をたゝみこみ、品々の時代絹、中將姫の手織の蚊屋、人丸の明石縮、阿彌陀の涎かけ、朝比奈が舞鶴の切、達磨大師の敷蒲團、林和靖が括頭巾、三條小鍛冶が刀袋、何によらず無いといふ物なし、萬有帳めでたし。

世は欲の入札に仕合

用心し給へ國に賊家に鼠、後家に入聟急ぐまじき事なり。今時の仲人頼もしづくにはあらず、其敷銀に應じて、例ば五十貫目つけば五貫目取る事といへり。この如く十分一銀出して、娌呼ぶ方へ遣しけるは内證心元なし。一代に一度の商事、此損取りかへしのならぬ事、よく〳〵念を入るべし。世の風儀をみるに手前よき人表向かるう見せるは稀なり。分際より萬事を花麗にするを近年の人心よろしからず、娌取時分のむす子ある人は、まだしき屋普請部屋づくりして、諸道具の拵、下人下女を置き添へて、富貴に見せかけ、娌の敷銀を望み商の手だてにする事心根の恥しき、世の外聞ばかりに送り迎ひの駕籠、一門縁者の奢くらべ、無用の物入かさなりて、程なく穴のあく屋根をも葺かず、家の破滅とはなれり。或は又娘持ちたる親はおのれが分限より過分に先の家を好み、身代の外聟の生れ付諸藝ありて、人の目に立つ程なるを聞き合せけるに、小鼓うてば博奕うち、若い者ぶりすれば傾城ぐるひ止まず、一座の公儀ぶりよき人と、人の譽むれば、野郎あそびに金銀をつひやしぬ。これを思ふに男よくて身過にかしこく、世間にうとからず、親

國に賊家に鼠―諺

下人下女を―一本をなし

に孝ありて人に惡まれず、世のためになる人聟に取りたきとて尋ねても有るべきや。よい事過ぎてかへつて難義ある物ぞかし。上つかたにさへ不祥はある物、ましてや下つかたの人、十に五つは見ゆるし、小男なりとも、はげあたまなりとも、商口利きて親のゆづり銀をへらさぬ人ならば縁組すべし。あれは何屋の誰殿の聟ぞと、五節句に袴肩衣たためつけ、紋付の小袖に金拵の小脇指、跡より小者若い者柳箱持ちつれたる當世男見よげにして、娘の母親よろこぶ事なり。それも分散にあへば衣類刃物も皆人手にわたりて、あしき男の紬を花色小紋に染めて著、あるひは裏付の木綿袴きたるよりは劣れり。娌も高人の家は各別、民家の女は琴のかはりに眞綿を引き、伽羅の煙よりは薪の燃えしさるをばさしくべたるがよし。それ〳〵に似合ひたる身持するこそ見よけれ。世間躰ばかり皆いつはりの世の中に時雨降り行く奈良坂や、春日の里に曝布の買問屋して、有德人松屋の何がしとてありしが、むかしは今の秋田屋樽屋にまさりて、世盛りの八重櫻爰の都に花をやつて春をゆたかに暮され、所酒のから口鱶のさしみを好み、其身榮花に明し、此家次第に衰へ、天命をしる年になりて、平生の不養生にて頓死をせられける。妻子に大分の借錢を殘し、これを讓られける。人の身代死なねば知れぬぞかし。此後家今年三十八に

高人―身分高き人

世間躰ばかり―一本世間躰こそ

此家次第に衰へ―一本此家の二字

なし
天命を知る年―「論語爲政篇五十而知二天命一」

濟むべき―一本濟ますべき

して小作りなる女、殊更きめこまかにして色白く、うち見には二十七八、人の好める當流女房、跡を忘れて又の縁にもつきかねざる風俗なりしに、若年の子供をあはれみ、人の疑はぬ程に髪切りて、白粉絶えて紅の唇色さめ、男模樣の著物、帶も細きを好み、才覺男にまされど、女の鍬もつかはれず、柱の根つぎも手細工には及びがたく、いつとなく軒もる雨にしのぶ草しげりて、野を内に見る鹿の聲、不斷聞くよりは悲しく、戀慕の外につれあひの事ゆかしく、女ばかりも世を立てがたき事、今ぞ身に覺えける。今時の後家立つるは、その死跡に過分の金銀家督ありて、欲より女の親類異見して、いまだ若盛りの女に、無理やりに髪をきらせ、心にもそまぬ佛の道をすゝめ、命日を弔はせける。必ずうき名立ちて、家久しき若い者を旦那にする事、所々にこれを見及びける。かくあらんよりは外への縁組、人の笑ふ事にはあらず。彼の松屋後家こそ世の人の鑑なれ。いろいろの渡世して心まかせにかなはず、むかしの借銀濟むべき調法もならず、次第にまづしくなる時、一生一大事の分別出し、住宅を借りかたの衆中に渡すべきと申せど、人皆あはれみて今取るべきと云ふ者一人もなし。借銀五貫目、此家賣れば三貫目より内なり、後家町中に歎き、此家をたのもしの入札にして賣りける。壹人に銀四匁づつ取りて、突き當りたる方へ家を渡すなれば、てんぽにして銀四匁と札を入れける程に、三千枚入て銀十二貫目請取り、五貫目の借銀はらひ七貫目殘りて、後家二度これより分限になりぬ。人に召しつかはれし下女、札に突き當りて四匁にて家持となれり。

日本永代藏

卷二

目錄

世界の借屋大將
京にかくれなき工夫者
餅搗もさたなしの宿
怪我の冬神鳴
大津にかくれなき醬油屋
何をしても世を渡る此浦
才覺を笠に著る大黑
江戸にかくれなき小倉持

身過の道急ぐ犬の黒燒
天狗は家名の風車
紀伊ノ國に隱れなき鯨ゐびす
横手ぶしの小歌の出所
舟人馬かた鐙屋の庭
坂田にかくれなき亭主振
明くれば春なり長持の蓋

世界の借屋大將

分限我なり——一本我。の字なし

都のさたに——一本に。なし

いはれしに——一本いはれしが。

借屋請狀之事、室町菱屋長左衞門殿借屋に居申され候藤市と申す人、慥に千貫目御座候、廣き世界にならびなき分限我なりと自慢申せし、子細は二間口の棚借にて千貫目持、都のさたになりしに、烏丸通に三十八貫目の家質を取りしが、利銀つもりておのづから流れ、始めて家持となり是を悔みぬ。今までは借屋に居ての分限といはれしに、向後家有るからは京の歷々の内藏の塵埃ぞかし。この藤市利發にして一代のうちにかく手まへ富貴になりぬ。第一人間堅固なるが身を過ぐる元なり。此男家業の外に反古の帳をくゝり置きて、見世をはなれず、一日筆を握り、兩替の手代通れば錢小判の相場を付け置き、米問屋の賣買を聞き合せ、木藥屋吳服屋の若い者に長崎の樣子を尋ね、繰綿鹽酒は江戸棚の狀日を見合せ、毎日萬事を記し置けば、紛れし事は爰に尋ね、洛中の重寶になりける。不斷の身持、肌に單繻絆大布子綿三百目入れて一つより外に著る事なし。袖覆輪といふ事此人取りはじめて、當世の風俗見よげに始末になりぬ。革足袋に雪踏をはきて、終に大道をはしりありきし事なし。一生のうちに絹物とては紬の花色、一つは海松茶染にせしこ

海松茶染云

と若い時の無分別と、二十年もこれを悔しく思ひぬ。紋所を定めず、丸の内に三つ引又は壹寸八分の巴を付けて、土用干にも疊の上に直には置かず、麻袴に鬼縅の肩衣幾年か折目正しく取り置かれける。町並に出る葬禮には、是非なく烏部山におくりて、人より跡に歸りさまに、六波羅の野道にて僕もろ共苦參を引いて、これを陰干にして腹藥なるぞと只は通らず、跪く所で燧石を拾ひて袂に入れける。朝夕の煙を立つる世帶持は、よろづか樣に氣を付けずしてはあるべからず。此男生れ付て慳きにあらず、萬事の取りまはし人の鑑にもなりぬべき願ひ、かほどの身袋まで年とる宿に餅搗かず、閙敷時の人遣ひ、諸道具の取り置きもやかましきとて、これも利勘にて大佛の前へあつらへ、一貫目に付き何程と極めける。十二月八日の曙、いそぎて荷ひつれ、藤屋見世にならべ請取り給へといふ。餅は搗きたての好もしく春めきて見えける。旦那は聞かぬ貌して十露盤置きしに、餅屋は時分柄にひまを惜み、幾度か斷りて、才覺らしき若い者、杜斤の目りんと請取りてかへしぬ。一時ばかり過ぎて今の餅請取つたかといへば、はや渡して歸りぬ。この家に奉公する程にもなき者ぞ、溫もりのさめぬを請取りし事よと、又目を懸けしに思ひの外に減のたつ事、手代我を折りて喰ひもせぬ餅に口をあきける。その年明けて夏に

云—海松の如く黑みがかれる茶色にて染直しのきかぬよりいふ
苦參—せんぶりの事、當藥
利勘—利益を勘ふること
はや渡して歸りぬ—此下にといふの字を補ひて見るべし
ゑひもせず京の云々—いろは歌の終に京の字を添ふるよりのいひかけ
世智—世智がしこく儉

なり、東寺あたりの里人茄子の初生を目籠に入れて賣り來るを、七十五日の齡是たのしみの一つは二文、二つは三文に直段を定め、何れか二つとらぬ仁はなし。藤市は一つを二文に買ひていへるは、今一文で盛りなる時は大きなるがありと、心を付くる程の事あしからず。屋敷の空地に柳柊楪葉桃の木花菖蒲薏苡仁など取りまぜて植ゑ置きしは、ひとり有る娘がためぞかし。葭垣に自然と朝貌のはへかゝりしを、同じ詠めにはかなき物とて刀豆に植ゑかへける。何より我が子をみる程面白きはなし。娘おとなしく成りて、頓て娌入屏風を拵へとらせけるに、洛中盡しを見たらば見ぬ所を歩行たがるべし。源氏伊勢物語は心のいたづらになりぬべき物なりと、多田の銀山出盛りし有樣書かせける。此心からはいろは歌を作りて誦ませ、女寺へも遣らずして筆の道を教へ、ゑひもせず京のをやめ、盆に踊らず、毎日髪かしらも自ら梳きて、丸曲に結ひて、身の取廻し人手にからず、引きならひの眞綿も著丈の竪横を出かしぬ。いづれ女の子は遊ばすまじきものなり。折ふしは正月七日の夜、近所の男子を藤市かたへ、長者に成る樣の指南を賴むとて遣しける。座敷に燈かゝやかせ、娘を付け置き露路の戸の鳴る時しらせと申し置きしに、

約なること丸曲―今日のものとは形異なり

最前の―一本のなしいはれし―一本いはれた。

一升入る壺

此娘しほらしくかしこまり、灯心を一筋にして嗜の聲する時、元のごとくにして勝手に入りける。三人の客座に著く時、臺所に摺鉢の音ひゞきわたれば、客耳をよろこばせ、これを推して皮鯨の吸物といへば、いや〳〵はじめてなれば雑煮なるべしといふ。又ひとりはよく考へて煮麪とおちつきける。必ずいふ事にしてをかし。藤市出でて三人に世渡りの大事を物語りして聞かせける。一人申せしは今日の七草といふ謂れはいかなる事ぞと尋ねける。あれは神代の始末はじめ増水と云ふ事を知らせ給ふ。又一人掛鯛を六月まで荒神の前に置きけるはと尋ぬ。あれは朝夕に肴喰はずにこれを見て喰うた心せよと云ふ事也。又太箸をとる由來を問ひける。あれは穢れし時白げて一膳にて一年中あるやうに、これも神代の二柱を表すなり、よく〳〵萬事に氣を付け給へ、扨宵から今まで各咄し給へば最早夜食の出づべき所なり、出さぬが長者に成る心なり、最前の摺鉢の音は大福帳の上紙に引く糊を摺らしたといはれし。

怪我の冬神鳴

細波や近江の湖に沈めても一升入る壺は其通りなり。大津の町に醤油屋の喜平次といふ

云々―一升入る壺は海へ入れても一升といふ諺による

じやう云云―漢方醫の藥袋には煎じやう常

者ありける。此所は北國の舟著、殊更東海道の繁昌、馬次かへ駕籠車を轟かし、人足の働き、蛇の鮓鬼の角細工、何をしたればとて賣れまじき事にあらず。近年問屋町長者のごとく、屋造り昔にかはり、二階に撥音やさしく、柴屋町より白女よび寄せ、客の遊興晝夜のかぎりもなく、天秤のひゞきわたり、金銀も有る所には瓦石のごとし、身代程高下の有る物はなしと、喜平次荷桶おろして無常觀じける。我が商に廻れるさき〳〵にも、世は愁喜貧福のわかち有りて、さりとは思ふまゝならず、かしこき人は素紙子きて、愚なる人はよき絹を身に累ねし、兎角一仕合は分別の外ぞかし。然れども其身働かずして錢が一文天から降らず地から湧かず、正直にかまへた分にも埒は明かず、身に應じたる商賣おろそかにせじと一日暮しを樂みける。關寺のほとりに森山玄好といへる人、かたのごとく藥師は上手、殊に老功なれども比叡の山風程の事にもかつて藥まはらず、門に嗜の聲絶えて、内に神農の掛繪も身ぶるひして、萬の紙袋の書付ほこりに埋もれ、冬も羽二重のひとへ羽織、煎じやう常に變らぬ衣裝つき、醫師も傾城の身に同じ、呼ばぬ所へはゆかれず、宿に居れば外聞あしく、毎日朝脈の時分より立ち出でて、四の宮の繪馬をながめ、又は高觀音の舞臺に行きて、近江八景もあさゆふ見てはおもしろからず、身すぎは缺け

の如しと書くよりいふ

繪馬醫者―はやらぬ醫者の病家めぐりする如く見せかけて繪馬堂などにて日を暮すよりいふ

て隙の有る程氣の毒なる者はなし。人には繪馬醫者といはれ、口をしかりし。或人取り立て碁會の宿して一番に三錢づつ茶の代とりて、漸う死なぬを德にして世をおくる人も有り、また馬屋町といふ所に、坂本屋仁兵衛殿とて前は大商人なりしが、大分の銀をなくなし、殘る物とて家藏賣りて、二十八貫目ありしを取つて退き、その後三十四五度も商賣かへられしうちに、今は殘らず喰込みて何をすべきたよりもなく、昔の厚鬢もうすく、仁躰をかしげなれば、ちつとも埒のあかぬ男、貧乏神の社人になれとて、一門中これを見かぎる。されども母親の隱居銀十貫目あるをひとりの子なれば不便におもはれ、せめてはこれを取らせ世に住む種ともなれかし、然れども仁兵衛に渡しては一年もあるまじ、姉聟にあづけて月に八十目づつ利銀わたし、この有切に五人口を過ぎよといはれし。先づ夫婦子が一人、弟に仁三郎とて背僂病、ひとりは乳のませし姥が足たゝずして、外に賴む島もなく爰にかゝり舟、日和を見てもどれを一人出て行けといふものもなし。さりとては十貫目の利銀にて八十目取り、五人口は過ぎがたし。此銀朔日に請取り、五匁の屋賃をのけて置き、白米のよきに味噌鹽薪をとゝのへ、常住、香の物菜、この外にはいかな〳〵三月の鯛を一枚、松茸一斤二分する時も目に見るばかり、咽がかわけば白

味噌鹽薪―一本味噌醬油鹽薪とあり

御伊勢樣を賣りて―賣るとは口實にするなり

七匁六分―一本九匁六分とあり

八匁八九分―一本九匁

湯に焦穀、油火も眞中に一つともして、これを寢ざまに消して鼠のあるゝをかまはず、盆正月の著物もせず、年中始末に身をかため、慰みには觀世紙縷をして、明暮不自由なる世や。あきなひの道しるとて百目に足らぬ金にて、七八人樂々と年こすもあり、又松本の町に後家あり、一人の娘に黃唐茶の振袖に菅笠を著せて、言葉少し訛りならひ、拔參りの者に御合力と御伊勢樣を賣りて、此十二三年も同じ僞にて世を過ぐる女もあり。又池の川の針屋ほそき事なれども、娘を京への緣組を聞き立て、銀二千枚付けるとて仲人噂が飛びまはり、强ひたら百貫目は付けてやらるべしと私語きし。人の內證は知れぬ物、此大津のうちにもさま〴〵ありと、醬油賣りまはるさき〴〵にて見聞き、喜平次が宿にかへりて語りける。此女房隨分かしこく、子供も奇麗にそだて、人の物をも負はず、年とり物をも師走のはじめ比より調へ、節季に帳かたげた男の貌を見ぬを嬉しやとて、萬事を仕舞ひけるに、この幾年か錢とり集めて七匁五分か八匁、七匁六分八匁八九分か殘り、つひに十匁ともちて年越えたる事なく、板木でおしたるやうな此家の若ゑびすと祝ひけるに、瓦落々々と空さだめなや、冬神鳴十二月二十九日の夜の明けがたに落ちかゝりて、一跡に一つの鍋釜、微塵粉灰にくだかれ、これを嘆くにかひなく、片時もなければ

八九分とあり　一跡―一身代

一に俵云々―童謡をもちりて用ふ　信心に徳あり―信あれば徳ありの諺を用ふ　埒の明かざる―一本埒の明かぬ

ならず買ひもとめしに、其年の暮にそれ程足らずして、九匁二十四五所に買ひがかりやかましき事を聞きぬ。これをおもふに當所のかならず違ふものは世の中、我も神鳴の落ちぬまでは世にこはき物はなかりしにと悔みぬ。

才覺を笠に著る大黒

一に俵二階造り三階藏を見わたせば、都に大黒屋といへる分限者ありける。富貴に世をわたる事を祈り、五條の橋切石に掛けかはる時、西づめより三枚目の板をもとめ、これを大黒に刻ませ、信心に徳あり次第に榮え、家名を大黒屋新兵衛としらぬ人はなかりき。男子三人無事に撫育て、いづれもかしこく、親仁よろこび、老後の樂みを極め、追付隱居の支度をせしに、惣領の新六俄に金銀を費し、算用なしの色あそび、半年立たぬに百七十貫目入帳の内見えざりしに、とても埒の明かざる僉議なれば、手代ひとつに心をあはせ、買ひ置の有物に勘定仕立て、七月前を漸うに濟まし、向後奢を止めたまへと意見さまざま申せしに、更に聞き入れずして、其年の暮に又二百三十貫目たらず、今は内證に尾が見えて、稲荷の宮の前にしるべの人ありて身を隱しぬ。律義なる親仁腹立せられし

を、色々詫びても機嫌なほらず、町衆に袴きせて舊里を切つて子をひとり捨てける。されば親の身としてこれ程までうとまるゝ事、大かたならぬ惡心なり。新六是非もなき仕合せ、はや當分の借屋にも居られぬ首尾になりて、爰を立ち退き東のかたへ行く道の草鞋錢とてもなく、悲しさは我が身ひとりと歎くに甲斐もなし。比は十二月二十八日の夜、水風呂に入りしを、それ親仁樣といふ聲おそろしく、濕身に綿入ひとつ肩にかけ、左に帶を提げて下帶には氣を付けずして逃げのび、けふ旅立にも尻からげ氣の毒、二十九日の空さだめなく、たまりもやらぬ白雪の藤の森の松にふりしこりて、菅笠なしの首筋に入相の鐘も胸にひゞきて、大龜谷勸修寺の茶屋の奇麗に湯釜の沸るをこのもしく、堪へがたき寒さをしのぐ物よと思ひながら、一錢もなければ腰かけを見あはせ、大津伏見駕籠の立ちつゞき、大勢のどさくさまぎれに咽のかわきを止め、立ちさまに人の脫ぎ捨てし豐島莚をはづし、はじめて盜心になつて行くに、小野と云ふ里につきぬ。落葉して梢さびしき柿の木の陰に、童子友達の集りて、惜しや弁慶が死にけると悔むを聞けば、特牛程なる黑犬なるを立ち寄りてこれを貰ひ、彼の莚につゝみ音羽山の麓に行きて、野に鍬つかふ夫を招き、これは疳の妙藥になる犬なり、三年あまり種々の藥をあたへ今黑燒にな

水風呂―溫湯なり蒸風呂に對していふとも、据風呂の訛なりともいふ

特牛―偉大なる牡牛

行くも歸るもの云々―「これやこの行くも歸るもわかれては知るも知らぬも逢坂の關」の歌に據る

八丁―大津の町名

鏡山―近江の山の名を鏡餅にきかす

磯浪―一本磯うつ浪

すといへば、さては諸人の爲めぞと、あたりの柴枯笹をあつめ、火打袋を取出し煙の種となし、里人にもわづかに取らせ、殘るを肩に置きて、山家の作り言葉になりて狼の黑燒はと、聲の可笑しげに賣りて、行くも歸るもの關越えて、知るも知らぬもにつき付商、隨分道中の人になれたる心の針屋筆屋かたられて、追分より八丁までに五百八十が物代なして、先づは才覺男、この取廻しが京にて出づれば、遠い江戸までは行かずに濟む事をと、心ながら泣いつ笑うつ勢田の長橋末に賴みをかけて、草津の人宿にて年を取り、姥が餅を昔の鏡山に見なし、頓て心の花もさきいづる櫻山、色も香も有る若ざかり、かせぐに追ひ付く貧乏神は、足弱き老曾の森の注連飾も、おのづからに春めきて、秋見る月もたのもしく、不破の關戸の明暮、美濃路尾張を過ぎて東海道の在々廻り、都をいでて六十二日めに品川に著きぬ。これまでの口をすぎ錢二貫三百延ばし、賣り殘せし黑燒を磯浪に沈めて、それより江戸入りを急ぎしに、暮れて行く當所もなければ、東海寺門前に一夜を明しけるに、其片陰に薦かぶりて非人あまた臥しけるが、春も浦風あらく浪枕のさわがしく、目のあはぬ夜半まで身の上の事共、物がたりをするを聞くに、皆筋なき乞食、一人は大和の龍田の里の者、すこしの酒造りて六七人の世を樂々と送りしに、

筋なき乞食―乞食に筋なしといふ諺あり、最初より乞食となるべく生れたる系統なしとの意

伊藤源吉―仁齋

嘉太夫―加賀掾

大和屋甚兵衛―俳優

兩色里―祇園島原

次第にたまりし金銀取りあつめて百兩になる時、所の商まだるく、萬事うち捨て爰にくだるを、一門殘らず親しき友の色々申してとめける、わが無分別さかんにまかせ、吳服町の肴棚かりて、上上吉諸白の軒ならびには出しけれども、鴻ノ池伊丹池田南都根づよき大木の杉のかをりに及びがたく、酒元手を皆水になして、四斗樽の薦を身に被りて、古郷の龍田へもみぢの錦は著ずとも、せめて新しき木綿布子なれば歸るにと男泣して、これに付けても仕付けたる事を止めまじき物ぞと、云ふ程よろしからず、よい智恵の出時もはやおそし。又一人は泉州堺の者なりしが、萬にかしこ過ぎて藝自慢して爰にくだりぬ。手は平野仲庵に筆道をゆるされ、茶の湯は金森宗和の流れを汲み、詩文は深草の元政に學び、連誹は西山宗因の門下と成り、能は小畠の扇を請け、鼓は生田與右衛門の手筋、朝に伊藤源吉に道を聞き、ゆふべに飛鳥井殿の御鞠の色を見、晝は玄齋の碁會にまじはり、夜は八橋撿校に彈きならひ、一節切は宗三に弟子となりて息づかひ、淨瑠璃は宇治嘉太夫節、踊は大和屋の甚兵衛に立ちならび、女郎狂ひは島原の太夫高橋にもまれ、野郎遊びは鈴木平八をこなし、噪ぎは兩色里の太鼓に本粹になされ、人間のする程の事其道の名人に尋ね覺え、何をしたればとて人の中には住むべきものをと腕頼みせしが、

火宅―法華經に「三界無安猶如火宅」

車善七―非人の頭領

かゝる至り穿鑿、當分身業の用には立ちがたく、十露盤をおかず秤目しらぬ事を悔しがりぬ。武士勤めは勝手をしらず、町人奉公もおろかなりとて追ひ出され、今此身になりて思ひあたり、諸藝のかはりに、身を過ぐる種を教へおかれぬ親達を怨みける。今一人は親から江戸の地生にて通り町に大屋敷を持ちて、一年に六百兩づつ定まつての棚賃を取りながら、始末の二字をわきまへなく、其家まで賣りはたし、身の置き所なく心の燃ゆる火宅を出て、車善七が中間はづれの物もらひとなりぬ。思ひ〳〵の身の上物語、さりとては同じ思ひに哀ふかく、新六枕に立ちより、我らも京の者なるが、舊里斷られてお江戸を頼みに下りけるが、各咄を聞くに心ぼそしと、恥をつゝまず申せば、三人共に口を揃へて、詫言の手便はあらずや、姨樣もないか、何とぞ下り給はぬがよい物をと言ふ。はや跡へ歸らぬ昔、今から先の思案なり、扨面々の利發にて、かく淺ましく成り給ふは不思議なり、何事を見立て給ひても有るべきといへば、いかな〳〵この廣き御城下なれども、日本のかしこき人の寄合、錢三文あだには儲けさせず、只銀がかねをためる世の中といへり。久しく見及び給ふ内に商の仕出しはなきかと尋ねしに、されば大分にすたり行く貝がらを拾ひて、靈岸島にして石灰を燒くか、物毎鬧しき所なれば刻昆布花鰹かきて量

賣か、つゞき木綿を買うて手拭の切賣か、か様の事ならでは輕い商賣有るまじと云ふにぞ智惠付き、夜の明けがたに立ち別れけるが、三人に三百の置錢、悅ぶ事限りなく、御仕合せみえて富士山程の金持に今の事ぞと申しける。それより傳馬町の太物棚にしるべ有りて尋ね行き、此度の子細かたれば哀れをかけ、男の働くべき所は爰なり、ひとかせぎと云ふにぞ力をえて、思ひ入れの木綿を調へ切賣の手拭、然も三月二十五日、はじめて下谷の天神に行きて手水鉢のもとにて賣り出しけるに、參詣の人買うての幸と、一日に利を得て、毎日これより仕出して、十ヶ年立たぬ内に五千兩の分限にさゝれ、一人の才覺者といはれ、新六が指圖をうけて所の人の寶とは成りける。暖簾に菅笠きたる大黑を染めければ笠大黑屋といへり。八つ屋敷がたに出入り、九つ小判の買置き、十で丁ど治りたる御代に住める事の目出たし。

しるべ―一本しる人

八つ屋敷に云々―童謡に因みていふ

天狗は家名の風車

智惠の海廣く日本の人の働をみて、身過にうとき唐樂天が逃げて歸りし事のをかし。詩をうたふは耳遠く、横手ぶしといへる小歌の出所を尋ねけるに、紀路大湊泰地といふ里

樂天云々―謡曲白樂天の事をさしていへり

の妻子のうたへり。此所は繁昌にして若松群立ちける中に鯨惠比須の宮をいはひ、鳥居に其魚の胴骨立ちしに、高さ三丈ばかりも有りぬべし。目なれずしてこれに興覺めて浦人に尋ねければ、此濱に鯨突の羽指の上手に天狗源内といへる人、毎年仕合男とて昔此人を雇ひて舟を仕立てけるに、或時沖に一むら夕立雲のごとく鹽吹きけるを目がけ、一の鑓を突きて風車のしるしをあげしに、又天狗とは知りぬ。諸人浪の聲をそろへ笛太鼓鉦の拍子をとつて、大綱つけて轆轤にまきて磯に引きあげけるに、そのたけ三十三尋二尺六寸、千味といへる大鯨、前代の見はじめ、七郷の賑ひ、竈の煙立ちつゞき、油をしぼりて千樽のかぎりもなく、其身其皮ひれまですたる所なく長者になるは是なり。切りかさねし有樣は山なき浦に珍しく、雪の富士紅葉の高雄爰にうつしぬ。いつとても捨て置く骨を源内もらひ置きてこれをはたかせ、又油をとりけるに思ひの外なる德より分限になり、末々の人のため大分の事なるを、今まで氣の付かぬこそおろかなれ。近年工夫をして鯨網を拵へ、見付け次第に取り損ずる事なく、今浦々にこれを仕出しぬ。昔日は濱びさしの住ゐせしが、檜木造の長屋二百餘人の獵師をかゝへ、舟ばかりも八十艘、何事しても頭に乘つて、今は金銀うめきて、費へど跡はへらず、根へ入りての内證吉、これを楠木分

羽指―和訓栞に「森鋒をもて鯨をさす者をいふ、長袖の短衫をきたり、鯨を見ては羽袖を振りて指揮す、よて羽指と呼ぶなるべし」

七郷の賑ひ―鯨をつきあつれば七郷浮ぶといふ諺に據るもらひ置き

て—一本もらひて見付次第に—一本。にの字なし
楠木分限—之に對して俄に身代のよくなるを梅木分限といふ
信あれば德あり—諺
神を祭る—一本神祭る
手船の—一本のなし
手は—一本手を。
兼ひあひ—

限といへり。信あれば德ありと、佛につかへ神を祭る事おろかならず、中にも西の宮を有りがたく、例年正月十日には人より早く參詣でけるに、一年帳綴の酒に前後を忘れ、漸う明けがたより手船の二十挺立ちを押しきらせ行くに、いつの年よりおそき事を、何とやら心がかりに思ひしに、年男の福太夫といふ家來子細らしき貌つきして申し出せしは、二十年以來朝ゑびすに參り給ふに當年は日の入、旦那の身袋も挑灯程な火がふらうと、思ひもよらぬあだ口、いよ〳〵氣をそむきて、脇指に手は掛けしが、爰が思案とをさめて、春の夜の闇を挑灯なしにはあるかれじと、足を伸ばし胸をさすりて苦笑ひの内に、早船廣田の濱につきて、心靜かに參詣せしに、松原淋しく御燈の光幽に、皆下向ばかりにて、參るは我より外になく、心をせきて神前になれば、御神樂といへど社人は車座にゐて錢つなぎかゝり、誰の彼のと兼ひあひ、舞姫の跡にて鼓ばかり打つてそこ〳〵に埒明け、鈴も遠いから戴せて仕舞はれける。神の事ながら少し腹立ちて、大かたに廻りて又船に取り乘り、袴も脱がず波枕して、いつとなく寢入りけるに、跡よりゑびす殿烏帽子のぬげるもかまはず、玉襷して袖まくり片足あげて、岩の鼻から船に乘り移らせ給ひ、あらたなる御聲にて、やれ〳〵よい事を思ひ出してゐてから忘れたは、此福を何れの獵師

ゆづりあひ
魚島—魚の出盛り時

なりとも機嫌に任せ語り與ようと思ふに、今の世の人心せはしく、我がいふ事ばかりいうてさら〳〵と立ち行けば、何を云うて聞かす間もなし、おそく參りて汝が仕合せと、耳たぶによらせられ小語き給ふは、魚島時に限らず、生船の鯛を何國までも無事に著けやうあり、弱りし鯛の腹に針の立てどころ、尾さきより三寸程前を尖りし竹にて突くといなや、生きて働く鯛の療治、新しき事ではないかと、語り給ふと夢覺めて、これは世の例ぞと御告に任せけるに、案のごとく鯛を殺さず、これに又利を得て、仕合せのよい時津風眞艫に舟を乘りける。

舟人馬かた鐙屋の庭

北國の雪竿毎年一丈三尺降らぬと云ふ事なし。神無月の初めより山道を埋み、人馬の通ひ絶えて明の年の涅槃の比まではおのづからの精進して、鹽鯖賣の聲をも聞かず、莖桶の用意、燒火をたのしみ、隣向ひも音信不通になりて、半年は何もせずに明暮煎じ茶にしておくりぬ。諸事を兼々たくはへ置きし故に渴命に及ばざりき。かゝる浦山へ馬の背ばかりにて荷物をとらば、萬高直にして迷惑すべし、世に船程重寶なる物はなし。爰に

坂田の町に鐙屋といへる大問屋住みけるが、昔は纔なる人宿せしに、其身才覺にて近年次第に家榮え、諸國の客を引請け、北の國一番の米の買入れ、惣左衛門といふ名を知らざるはなし。表口卅間裏行六十五間を家藏に立てつゞけ、臺所の有樣目を覺ましける。米味噌出し入れの役人、燒木の請取り肴奉行、料理人、椀家具の部屋を預り、菓子の捌き、萱菷の役、茶の間の役、湯殿役、又は使番の者も極め、商手代、内證手代、金銀の渡し役、入帳の付手、諸事一人にて一役づつ渡して、物の自由を調へける。亭主年中袴を著て少しも腰をのさず、内儀は輕い衣裳をして居間をはなれず、朝から晩まで笑ひ貌して、中々上方の問屋とは各別、人の機嫌をとり、身過を大事に掛けける。座敷數かぎりもなく客一人に一間づつ渡しける。都にて蓮葉女といふを所詞にて扨といへる女三十六七人、下に絹物上に木綿の立縞を著て、大かた今織の後帶、これにも女がしら有りて指圖をして、客に一人づつ寢道具あげおろしのために付け置きける。十人よれば十國の客、難波津の人あれば播州網干の人もあり、山城の伏見衆京大津仙臺江戸の人入りまじりての世間咄、いづれを聞きても皆かしこく、その一分を捌き兼ねつるは一人もなし。年寄りたる手代は我がためになる事をしておく、若い手代は惡所づかひ仕過し、とかく親方

座敷數かぎりもなく客一人に一間づつ渡しける—此句一本なし

十人よれば云々—十人よれば十國のものとい

に德をつけず、これを思ふに遠國へ商につかひぬる手代は、律義なる者はよろしからず、何事をもうちばに構へて、人の跡につきて利を得る事難し。又大氣にして主人に損かけぬる程の者は、よき商賣をもして取り過しの引負をも埋むる事はやし。この問屋に數年あまた商人形氣を見及びけるに、はじめての馬おりより葛籠をあけて、都染の定紋付に道中衣物を脫ぎかへ、皺皮取りすて新しき足袋草履、鬢撫でつけて咬へ楊枝、誰にか見すべき采躰をつくろひ、このあたりの名所見に行くとて、用を勤めし手代を案内につれける人、今まで幾人かして出られしためしなし。親方がかりの程なく親方になる人は氣の付所各別なり。爰に著くといなや面若い者に近寄り、いよ〳〵跡月中比の書狀の通りと相場かはりたる事はないか、所々で氣色はかはる物にて、日和見さだめがたく、あの山の雲だちは二百日を待たずに風とは御覽なされぬか、當年の紅の花の出來は、青苧は何程と、入る事ばかりを尋ね、干鮭のぬけ目のない男、間なく上方の旦那殿より身袋よしとなられける。いづれ物には、仕やうの有る事ぞかし、鐙屋も武藏野の如く廣う取りしめもなく、問屋長者に似て何國に内證あぶなかりしは、定まりし貢錢とるをまだるく、手前の商をして大かたは仕損じ損をかけぬる物ぞかし、問屋一片にして客の賣物買物大

ふ諺に據る

皺皮—墓の背の如き文あるしぼみ皮の足袋

干鮭云々—干鮭は目凹みたるより拔目なき枕詞のやうに用ふ

事にかくれば何の氣遣ひもなし。惣じて問丸の内證、脇よりの見立と違ひ、思ひの外諸事物の入る事なり。それを實躰なる所帶になせば、必ず衰微して家久しからず、年中の足り餘り元日の五つ前ならでは知れず、常には算用のならぬ事なり。鐙屋も仕合せの有る時、來年中の臺所物前年の極月に調へ置き、それより年中取込み、金銀を長持におとし穴明けてこれに打入れ、十二月十一日定まつて勘定を仕たてける。たしかなる買問屋、銀をあづけても夜の寢らるゝ宿なり。

日本永代藏

卷三

目　錄

煎じやう常とはかはる問藥
江戸にかくれなき箸削
小松さかえて材木屋
國に移して風呂釜の大臣
豐後にかくれなきまねの長者
程なくはげる金箔の三の字
世は拔取の觀音の眼
伏見にかくれなき後生嫌ひ

質種は菊屋が花ざかり

高野山借錢塚の施主

大坂にかくれなき律義屋

三世相よりあらはるゝ猫

紙子身躰の破れ時

駿河にかくれなき花菱の紋

無間の鐘を聞けば突きぞこなひ

一本には此一章三分一ばかりに文章を省約せり

食酒―食事の時に酒飲むこと

斑猫砒霜石

煎じやう常とはかはる問藥

四百四病は世に名醫ありて驗氣をえたる事かならずなり、人は智恵才覺にもよらず貧病のくるしみ、これを直せる療治のありやと、家有德なるかたに尋ねければ、今までそれを知らず、養生ざかりを四十の陰まで、うか〳〵暮されし事よ、少し見立おそけれども、いまだよい所あるは革足袋に雪駄を常住帶るゝ心からは、分限にもなり給はん、長者丸といへる妙藥の方組傳へ申すべし△朝起五兩△家職二十兩△夜詰八兩△始末十兩△達者七兩、此五十兩を細にして、胸算用秤目の違ひなきやうに手合念を入れ、これを朝夕呑み込むからは、長者にならざるといふ事なし、然れどもこれに大事の毒斷あり○美食淫亂絹物を不斷著○内義の乘物全盛娘に琴歌がるた○男子に萬の打囃○鞠揚弓香會連俳○座敷普請茶の湯數奇○花見舟遊び日風呂入○夜歩行博奕碁双六○町人の居合兵法○物參詣後生心○諸事の扱請判○新田の訴訟事金山の中間入○食酒莨菪好心當なしの京のぼり○勸進相撲の銀本奉加帳の肝入○家業の外の小細工金の放目貫○役者に見知られ揚屋に近付○八より高い借銀。先づ此通りを斑猫砒霜石より怖しく口にていふも扨置き、心

—共に毒藥に思ふ事もなかれと、小き耳に小語き給へば、これ皆金言と悦び、彼の福者の教に任せ、朝暮油斷なく、所は御江戸なれば何をしたればとて商の相手はあり、珍しき見立もがなと、日本橋の南詰に曙より一日立ちつくしけるに、流石諸國の人の集り、山も更に動くが如く、京の祇園會、大坂の天滿祭にかはらず、毎日の繁昌この御時、君が代の道廣く、通町十二間の大道所せきなく、此橋の上に馬乘一人出家一人鎗一筋、朝から晩まで絶ゆる事なく、されども人の大事にかくる物は落さず、錢を一文いかなくに目に角立てても拾ひがたし。之を思ふに仇に使ふべき物にはあらず。兎角商賣に一精出し見んと、心は働きながら、手振でかゝる事は、今の世の中に取手の師匠か、取揚婆々より外に銀になる物なし、種蒔かずして小判も一歩もはえる例なし。何とぞ只取る事をと氣を付け心を碎く中に、屋形々々に行きて殿作りしまひ大工、屋根葺、おのが一連に二百三百人、辰巳あがりなる高咄、逆鬢にして天窓つきをかしく、襟の汚著物袖口の切れたる羽織のうへに帶して間棹杖に突くも有り、大かたは懐手腰の屈みし後付、其職人とは看板なしに知れける。跡より番匠童に鉋屑木屑をかづかせけるに、可惜檜の木の切々おちて捨るをかまはず、これらまで大樣なる事、天下の御城下なればこそと思はれ、これに氣を付

所せきなく—所狹きことなく
取手—柔術
辰巳あがり—調子の高きこと
逆鬢—髪を高くとるより鬢の毛の上へ逆立つをいふ

けて一つ〳〵拾ひ行くに、駿河町の辻より神田の筋違橋までに一荷にあまる程取り集め、そのまゝこれを賣りけるに二百五十文手取して、足もとにかゝる事を今まで知らぬ事の殘念と、其後は日毎に暮を急ぎ、大工衆の歸りを見合せ、其道筋に有る程拾ひけるに、五荷よりすくなき事なし。雨の降る日はこの木屑より箸を削りて、須田町瀬戸物町の靑物屋におろし賣り、箸屋甚兵衞と鎌倉河岸にかくれなく、次第分限となりて、後はこの木切大木となりて、材木町に大屋敷を求め、手代ばかりを三十餘人抱へ、河村柏木伏見屋にも劣るまじき木山をうけ、心の海廣く身躰眞艫の風、帆柱の買置に願ひのまゝなる利を得て、幾程なく四十年のうちに十萬兩の内證金、これぞ若い時呑み込みし長者丸の驗なり。今は七十餘歳なれば、少しの不養生も苦しからじと、はじめて上下共に飛驛紬に著替へ、芝肴もそれ〴〵に喰ひ覺え、築地の門跡に日參して下向に木挽町の芝居を見物、夜は碁友達をあつめ、雪のうちには壺の口を切り、水仙の初咲投げ入れ花のしほらしき事ども、いつ習ひ初められしも見えざりしが、銀さへあれば何事もなる事ぞかし。此人前後にかはらず、一生惜くは富士を白銀にして持ちたればとて、武藏野の土羽芝の煙となる身を知つて、老の入前かしこく取り置き、世にある程のたのしみ暮し、八十八の時

芝肴—芝の海にてとる小魚
壺の口を切り—茶の湯を催すこと
老の入前—

老後の入費

聞傳へ升搔をきらせ、子供の名付親に頼み、人の用ひ世の沙汰に飽いて、此人死光さながら佛にもならるゝ心地せり。後の世も惡しからじと萬人これを羨みける。人若い時貯へして年寄りての施し肝要也。迚も向へは持ちて行けず。なうてならぬ物は銀の世の中。

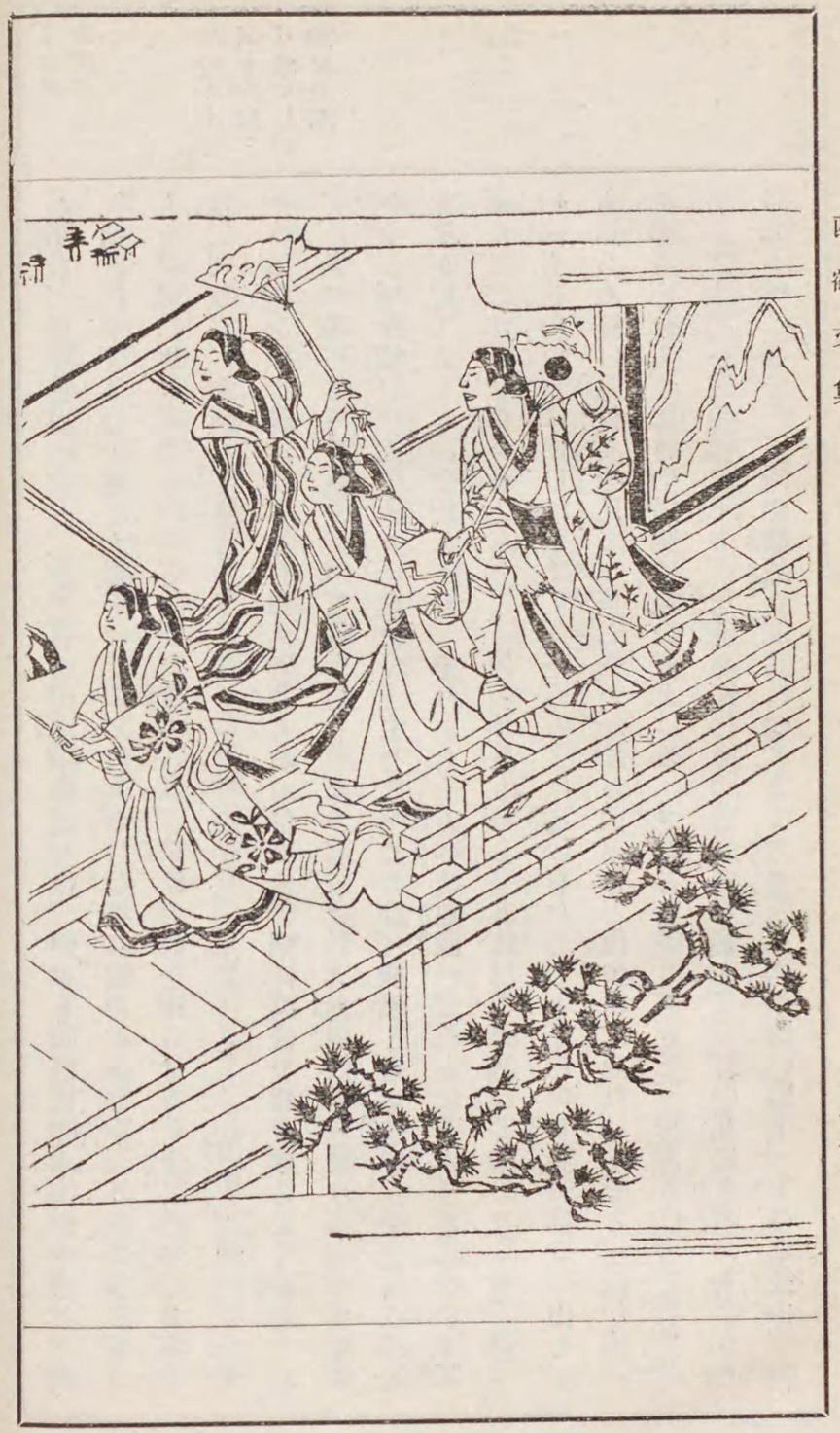
國に移して風呂釜の大臣

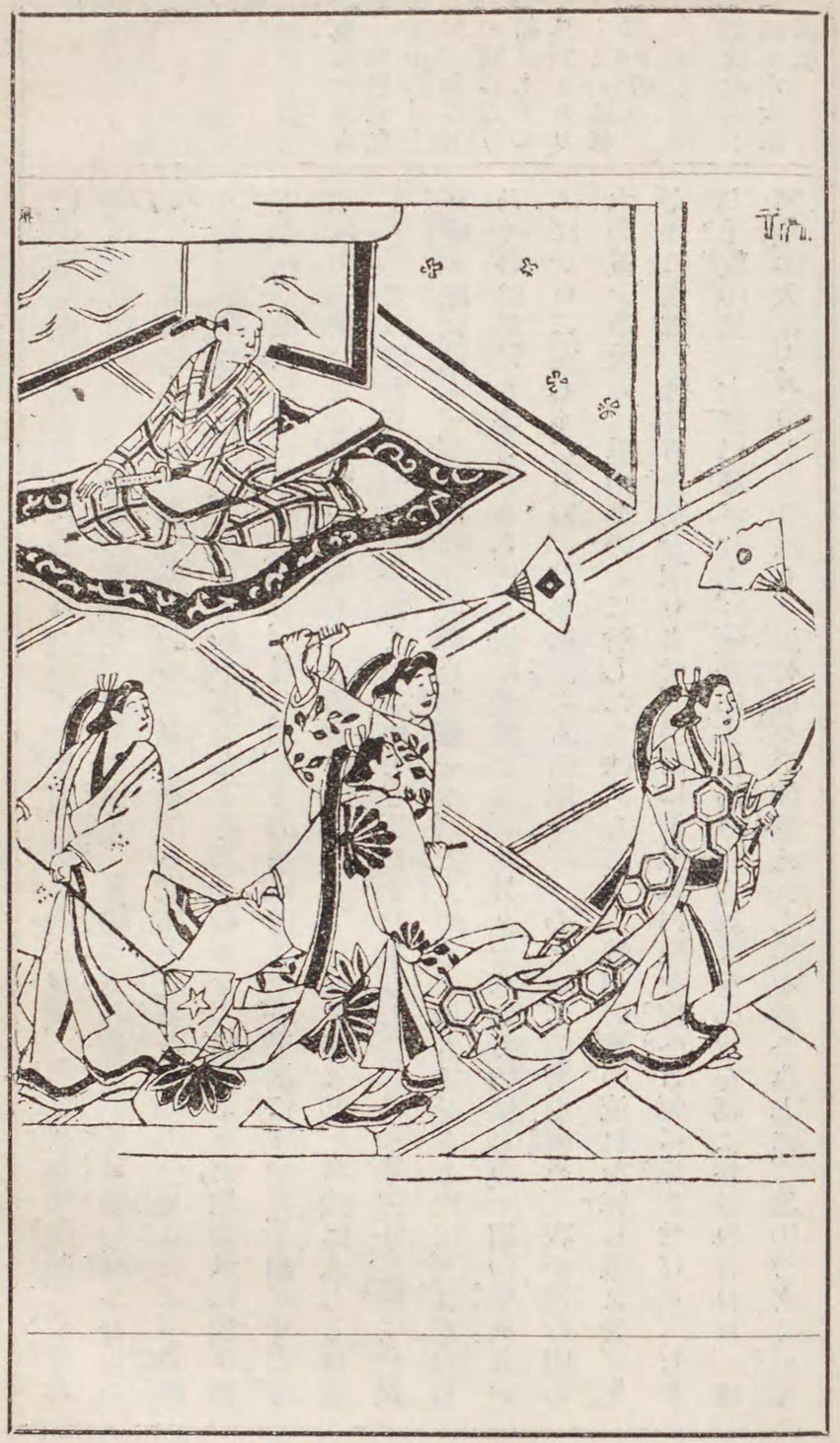
見放し―一本見放して

國中の醫師見放し、既に末期の水、今ぞ生死の海、蛤貝にて入れけるに、これさへ咽を通りかね、いづれも手足を握り、これ〳〵西方極樂へ只一道に、どこへも寄らずに參る事を忘れ給ふな、親仁樣とすゝめければ、又中眼に見ひらき、我は行年六十三、定命さし引なしに浮世の帳面さらりと消して、閻魔の筆に付けかゆるに胸算用を極めければ、何をか思ひ殘す事なし、汝等過賄の種を忘れなと、言ひおかるゝも外の事なく往生いたされしを、各歎きを止めて取り置きける。扨も死んでは何も入らぬぞ、帷子一つと錢六文を、四十九日の長旅のつかひ、地獄の馬に乘り給ふも成るまじきと、終に行く道をおもひやりける。其後親の家督を取りて昔にかはらず、豐後の府内に住みて萬屋三彌と名高し―一本名高き

名高し。萬事掟を守り三年が程は、軒端の破損もそのまゝに愁を心根にふくみ、命日を弔ひ、慈悲善根をなし、ひとりの母に孝を盡せば、何事も願ひに叶ふ仕合せなり。親仁遺言にすぎはひの種を大事と申し置かれしが、菜種は油のしぼり草、此種の事なるべしと一筋に思ひ入り、いつぞは此買置するか、又はこれを作らせて、分限になる事を明暮工夫めぐらしける。或時里をはなれし廣野荒れて、古代より渺々と薄原を通りけるが、かゝる所を狼の臥戸にするも國土の費とおもひ付き、竊に菜種を蒔き散らして心見けるに、其時節に花咲き實がのりて、おのづからさへ是なれば、新田に申し請けて、十年は無年貢、爰を切り平して所々に幾村か人家を立てつゞけ、鋤鍬とらせ耕作させけるに、毎年德を得て人しらぬ金銀たまり、それより上方への船商ひ、あまた手代にさばかせ、西國に竝びなき次第長者となりて、何の不足もなし。其後母親同道して京の春に逢へり。何國も花の色香に違ひはなくて、花みる人に違ひ有り、おもしろの女蔦の都や、山も川も散らぬ花の歩行くを見て、悲しやいかなる因果にて田舍には生れけるぞと、我が國元の事を忘れて、毎日の遊興に氣を亂しける。されども限りありて、歸るさに色よき妾者十二人抱へて豐後に下り、居宅を京作りの普請美を盡して、軒の瓦に金紋の三字を付けならべ、四方に三階の寶藏、廣間につゞきて大書院、六十間の廊下、東西に築山、南

古代より云云―古代より渺々たる薄原の意





眞野の長者—用明天皇皇子たりし時、此長者の婿になり給はんとて草刈となりしといふ俗説あり

鹽釜大臣—河原左大臣源融

に洲濱を掘らせ、岩組西湖を移し、玉の蒔石、唐木のかけ橋、亭に雪舟の卷龍、銀骨の瑠璃燈をひらかせ、瑪瑙の釘隱し、青貝の梁鼻、眞綿入りの疊に、天鵞絨の緣を付け、其外の結構記し難し。雪の朝を詠め、夏の夕涼み玄宗の花軍をやつし、扇軍とて數多の美女を左右に分けて、其身は眞中に坐して汗しらぬ姿を、兩方より金地の風に扇ぎ立てられ、風強きかたの女に靡き、負けたる方の扇は振ぎ取りて池にうかめ、扇ながしを慰みの一景、昔の眞野の長者も、この奢には何としてかは及ぶまじ。內證は人しらねばとて、天の咎も有るべし、一家これを悔めど更に止む事なし。年久しき手代根帳をメめ、錢藏銀藏は渡して、三間に五間の小判藏一つ、主人のまゝにもさせざる內は、其家たじろく事は思ひも寄らざりしに、世は無常なり、此男五十八の冬のはじめ、霜の朝風といふばかりに空しくなりぬ。其後は鑰ども請取りて、心まかせの奢を極め、我が住む國の水の重きを改め、兎角都の水に增したるはあらじと、音羽の瀧の流れを毎日汲ませ、先ぐりに幾樽か遙なる舟路を取りよせ、手前に湯屋風呂屋を拵へ日毎に燒かせける。むかし千賀の浦を七條に移されし、鹽釜の大臣あり。これは都の水を桶に移されければ、風呂釜の大臣とぞ申しならはし、追付朝夕の煙絕えにし事を待ちみしに、案のごとく一年

千丈の堤も蟻穴より崩る—諺

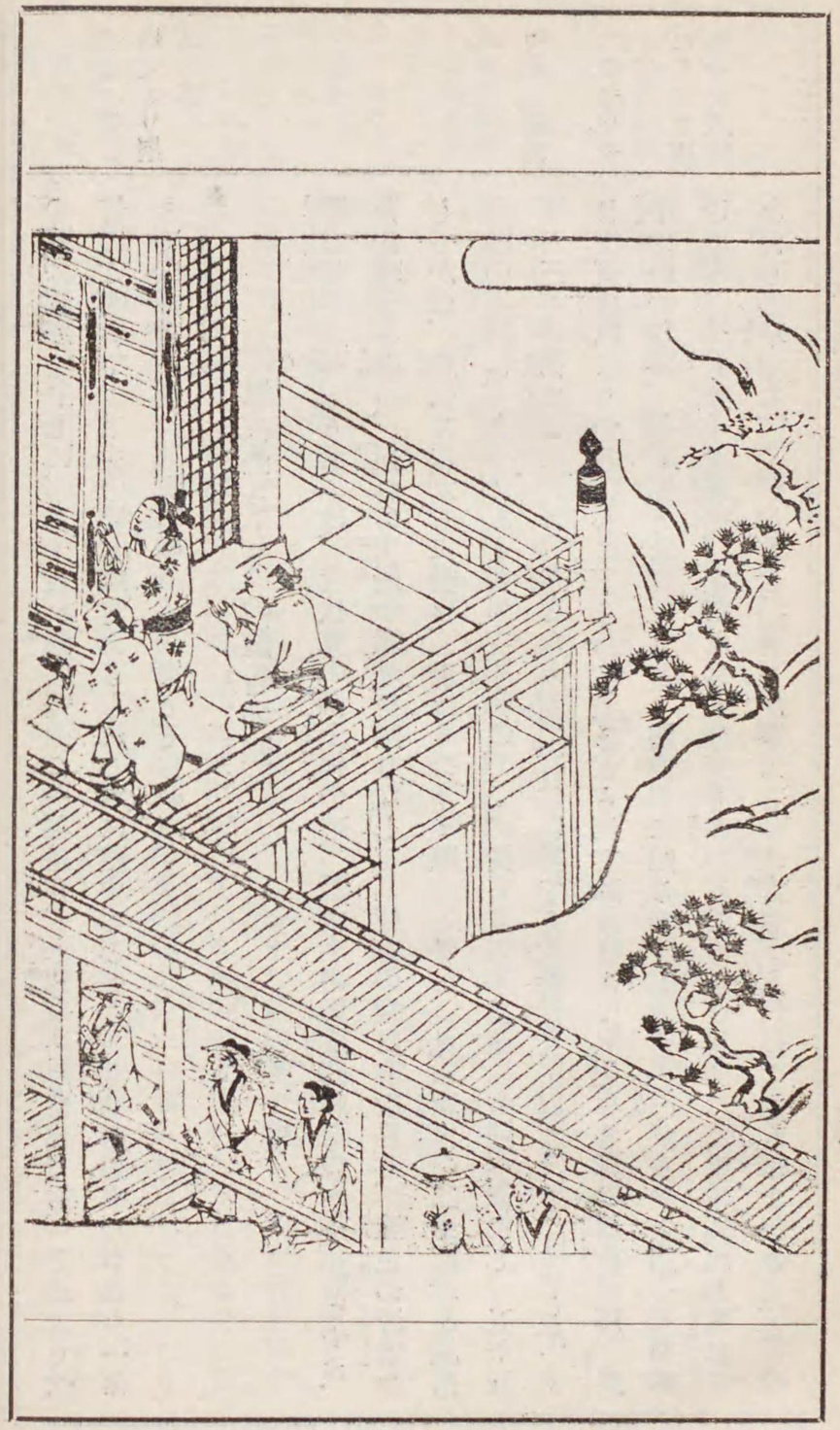
物成—租稅

大舜老萊子—いづれも二十四孝中の人物

の暮に惣勘定せしに、五千貫目餘の差引に一匁三分、本銀に不足出來そめ、それより次第に穴明きて　千丈の堤も蟻穴よりもれる水に滅するごとく、其身に惡事かさなり一命までほろび、世に殘れる物は人の寶とぞなれり。

世はぬきどりの觀音の眼

歌念佛の日暮しと云ふは、昔伏見の御上代の時、諸大名の御成門軒を竝べてかゞやき、金銀珠玉を鏤め、何れの工匠か珊瑚を削りなして、紅梅の枝に春を移し、五色の浮雲をしづかに、龍はさながらに動き、虎はそのまゝ驅ける勢ひ、見ぬ唐土の二十四孝を越前の殿の御門に、あり〳〵と美形を彫物に、この淸らなる事言葉にも述べがたし、五十五萬石三年の物成これに入けるとなり。彼の京の鉦たゝき盂蘭盆の比勸進にまはりしが、朝日影御成門にうつろひしに、これに氣をとられて詠めけるに、先づ大舜の耕作の所、斑牛のいかな事、作り物とは思はれず、淀鳥羽に歸る車をとゞめ、己が友かと道づれを戀ひける。又老萊子が舞振、足にはたらきて音曲の有るやうに思はれ、手にふれし風車にあたりの草木も靡くがごとし。郭巨が掘出し金の大釜、あれにて飯も燒かれまじ、茶沸



日暮坊云々—説經節の太夫は代々日暮某と名乗るよりいふ

寂しき—一本寂しく。

屋根の輪—薄板葺のおもしに置く石の轉びおちぬために用ふる輪

藏にも—一本内藏にも

羽釜—鍔のある釜

す事も勿體なし。ほしや小判に碎き　一生樂々と世を渡るものと、それに心をとられ、これに目をよろこばし、實に秋の日のならひにて、はや暮れておどろき、願以此功德空袋かたげて都に歸るを見て、人申しならはして日暮坊と、そのすゑ〳〵今に名だかし。其時の繁昌にかはり、屋形の跡は芋畠となり、みるに寂しき桃林に花咲く春は人も住むかと思はれける。常は晝も蝙蝠飛んで螢も出づべき風情なり。京海道は昔殘りて見世の付きたる家もあり、片脇は崩れ次第に人倫絶えて、一町に三所ばかりかすかなる朝夕の煙、蚊屋なしの夏の夜、蒲團もたずの冬を漸うに送りぬ。葛籠吹矢の細工人はまだしも歴々なり、取葺の屋根の輪、扇の要、刻み灸箸を削り、荷縄なひ賣したればとて、細長い命はつながれまじ、うき世に住むに哀れ多し。町はづれに菊屋の善藏といへる質屋ありしが、内藏さへもたず、車のかゝりし長持一つ、物置にも藏にもこれを頼みにして、此道を知るとて二百目に足らぬ元銀にて、先繰に利を得て八人口を大かたにして渡世しける。此家に質置き、さりとては悲しき事かず〳〵なり。降りかゝる雨にぬれて古傘一本六分かりて行けば、朝食焼き捨てし跡まだ洗ひもやらぬ羽釜さげきて、錢百文かり行くも有り、八月にも帷子著たる女房が、うす汚れたる二幅一つに三分かりて、身の見え透く

かた見世—質屋と同じ軒を分てる店

ひすらこく—原本ひすらくとあり一本によりて補ふ自己の利得をのみ專ら謀ること

高泉和尚—宇治萬福寺

をかまはず行く。また八十ばかりの腰かゞみ婆々、能う生きてから今年も知れぬ身をして、一日も悲しく兩手のない佛一躰、肴鉢一つ持ちてきて、四十八文かりの世や。また十二三の娘六つ七つの小坊主と昇階子長きを、跡向漸うにかたげてきて、錢三十文かりて、すぐにかた見世にある黒米五合手束木買うて歸る。扨もいそがしき内證、しばし見るさへ身に應へて泪出でしに、亭主は中々心弱くてはならぬ商賣、これ程いやな事はなし。これにも請人印判吟味かはる事なく、掟の通り大事に掛けゝるに、千貫目かるにも判一つと、わづかなる事に念入るを思はれける。利といふ物つもれば大分なり、この菊屋四五年に銀二貫目あまり仕出し、なほひすらこく人に情を知らず、足もとなる高泉和尚の寺にまゐらず、祭にも五香の宮に參詣せず、神佛の願ひいかな〳〵思ひ出しもせざる男、遠い初瀬の觀音を信心し、俄にあゆみを運ぶを、人の氣もあの如くかはる物かと、世間にて是沙汰ぞかし。此寺の開帳七日を、古代より判金一枚づつに極めおかれしを、菊屋二貫目の身袋にて三度まで開帳すれば、本願坊をはじめ一山に名を聞き傳へ、またもなき後生ねがひ、古今に三度まで一人しての開帳なき事申し侍る。或時心をつけて戸帳を見しに、かけまくも長竿にして一端つゞきの十端ならびを、用捨もなくあげおろしに、

の五世、元祿五年歿す
五香の宮—伏見にあり神功皇后を祭る
是沙汰—專らの噂
菊屋申すは—一本菊屋申しけるは
手池にせし

半ことの外そこね見ぐるしかりき。菊屋申せしは、我たび〳〵開帳せしに、戸帳かく切れ損じけるを、寄進に新しく掛けかへんといふ。僧中これをよろこび、都より金襴とりよせ改めける。そのゝち菊屋申すは、この古き戸帳を申しうけ、京の三十三所の觀音へかけたきといへば、安き事とてつかはしけるを、殘らず取りて歸る。此唐織申すもおろか、時代わたりの柿地の小づる淺黄地の花兎、紺地の雲鳳、其外も模樣かはりぬ。これ皆大事の茶入の袋、表具切に賣りける程に、大分の金銀とりて家榮え、五百貫目と脇から指圖違ひなし。觀音信仰にはあらず、これをすべき手だて、さても透かぬ男、一たび思ふまゝとなりしが、元來すぢなき分限、昔より淺ましくほろびて、後には京橋に出て、くだり舟にたより、請賣の燒酎諸白、あまいも辛いも、人は醉はされぬ世や。

高野山借錢塚の施主

物には時節花の咲き散り、人間の生死歎くべき事にあらず。然れども命は養生の一大事なるに、毒魚と知りながら鰒汁、これに風味かはらずして藻魚といふもの何の氣遣なかりき。女房は緣組のはじめより、婆になるまで手池にせしを、無分別に水をへらしぬ。

を云々—女房といふ自家所有の池あるに、他人に滛行して自己の精氣を亡ぼすとの意
九軒—新町にあり

この貧とりかへす事なく一生損にたつなれば、人たしなむべきは是、長命は其心にありと堅作りの親仁、若い者どもに異見を申せし。むかし難波の今橋筋にしはき名をとりて分限なる人、其身一代獨り暮して、始末からの食養生殘る所なし。此人も男ざかりに浮世を何の面白い事もなく果てられ、其跡の金銀御寺へのあがり物、四十八夜を申してから役に立たぬ事なり。されども年久しく內藏に隱れ、世間見なんだ銀が人手にまはりて、九軒の二日拂ひの用にも立ち、道頓堀の座拂ひのたよりともなる、寶といふ字の消ゆる程、今は世のすれ者となりけると大笑ひせし。このしはき人は五十七癸の辰にてありしが、又癸の辰の年、辰の日の辰の刻に相果てられしといへば、これも不思議の宏才なる人有りて、三世相命鑑を繰りけるに、此男先生は鎌倉の將軍賴朝公より西行法師に給はりし黃金の猫、値遇の緣にひかれて、たま〳〵人界に生を受け、その身は金ながら使ふ事もならず、人の子の物に成りける、このはづなり。その金猫は西行しばし手にふれて、里の童子にとらせける、其猫ほしやと見もせぬ昔の物語にも先づ搔きつき、欲をまろめて今の世の人間とはなりぬ。分限は才覺に仕合せ手傳はでは成りがたし。隨分かしこき人の貧なるに、愚なる人の富貴、この有無の二つは三面の大黑殿のまゝにもならず。

鞍馬の多門天のをしへに任せ、百足のごとく身を動きて、其上に身袋のならぬ是非もなし、天も憐み有り、諸人も不便をかくるなり。おのれがかせぎは疎略して、居宅を奇麗に作り、朝夕酒宴美食を好み、衣類腰の物を拵へ、分際に過ぎたる人付合、傾城狂ひ、野郎遊び、尻も結ばぬ絲の如く、針を藏に積みても溜らぬ内證、人の物を見せかけにて借込み、これを濟ますべき分別なし。これは我と覺えての仕業、手を出して晝盗人より惡し。末末一度は倒るゝつもりに五七年も前より覺悟して、弟を別家に仕分けて分散にこれを遁れさし、京の者は伏見に名代を替へては屋敷をもとめ置き、大坂の者は在郷の親類に田畠を買はせ置きぬ。身の置き所を先へ、跡の虚殼を借錢のかたへ渡して、古帳を枕にして横に寢てかゝるこそうたてけれ。町衆扱ひにかゝり、年分に其家を立てんといへば、かへつてこれを迷惑がりて、外聞は灰まで渡し住家を立ちのき、三月の節句を心やすく、桃の酒を祝へり。或時十一貫目の分散に、ある物二貫五百目、課せ方八十六人、毎日勘定に出合ひ、中間事に始末する人なく、遣日記に溫飩蕎麥切酒肴さまゞの菓子を好み、半年あまり隙を費し、取る物はみなになして、埒の明く所は一人手前より四分五厘づつ出してつくはひ、町内へ禮いうて廻るもをかしかりき。むかし大津に千貫目借錢おひければ、世になき事と申せしに、近年京大坂に三千貫目二千五百貫目の分散、いづれ遠國のひさき所には無い事ぞかし。ならびなき大港なればこそ貸す人もあれ、借るもこれ程までは商人なり。手柄にも百貫目までは借られぬ物といへり。むかし難波江の小島に、伊豆屋といへる手前者自然と倒れ、正直の首をさげて詫言して、財寶渡して六分半あり、殘る三分半はいつとて仕合せ次第に濟ますべしと、結構づくに立ち退きて、生國伊豆の大島に行きて親類を賴み、日夜に世をかせぎ、一たび元の如くにと思ひこみし所存より、大分まうけて二たび大坂にのぼり、あつて過ぎたる分散の殘り銀ことゞく濟ましぬ。それより十七年すぎぬれば、國遠して知れぬ人もあり、此分の銀は太神宮へ御初穂にあけ、又六七人も死にうせて子孫のなき人の銀は、高野山に石塔を切つて借錢塚と名付け、其跡をとぶらひける。かゝる人前代ためしなき事なり。

尻結ばぬ絲―尻ぬけになりて物を縫ふこと能はざる譬

針を藏につみ云々―いくら多くありても足らずとの諺

一人手前より―一本一人前に

つくはひ―つぐのひの誤か

紙子身袋の破れ時

商賣左前なる吳服屋忠助とて、昔は駿河の本町に軒ならべし中にも、花菱の大紋に家名をしらせ、住む國はおろかなく、東國北國にあまたの手代出見世をかざらせ、次第に人